

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (154)

東九州自動車道建設（鹿屋申良IC～曾於弥五郎IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I

かじきほり
加 治 木 堀 遺 跡

みやのもと
宮 ノ 本 遺 跡

つばきやま
椿 山 遺 跡

かきのきだん
柿 木 段 遺 跡

のがたまえだん
野 方 前 段 遺 跡 A 地 点

（曾於郡大崎町）

2010年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(154)

加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡
柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点

二〇一〇年三月 鹿児島県立埋蔵文化財センター





遺跡遠景（北・野方前段遺跡側から）



野方前段遺跡 A 地点 縄文時代早期 土器26



柿木段遺跡 縄文時代晩期 土器10, 11



遺跡遠景（南・柿木段遺跡側から）

序 文

この報告書は、東九州自動車道(鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間)の建設に伴って、平成19～20年度に実施した曾於郡大崎町に所在する加治木堀遺跡、宮ノ本遺跡、椿山遺跡、柿木段遺跡、野方前段遺跡A地点の発掘調査の記録です。

加治木堀遺跡では、列状に配置された縄文時代後期の落とし穴が発見され、この時期の狩猟形態の一端を見ることができました。

椿山遺跡は、弥生時代中期の甕形土器や壺形土器と中世の古道跡が発見されました。

柿木段遺跡は、狭い谷水田に埋もれた遺跡で、縄文時代晩期の打製石斧の埋納遺構は予想外の発見でした。

野方前段A遺跡は、縄文時代早期の遺跡で、狭い範囲に石蒸し焼き等の生活痕跡が残されていました。

これらは、いずれも本県の歴史を解明する上で貴重な資料であります。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省大隅河川国道事務所、大崎町教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

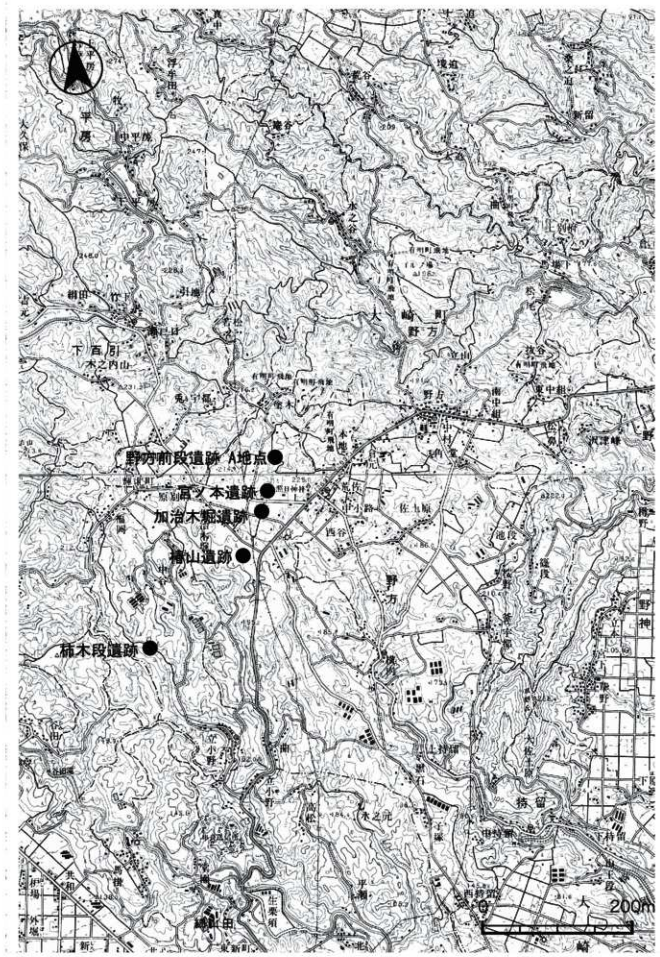
平成22年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 山下吉美

報 告 書 抄 録

ふりがな	かじきばりいせき	みやのもといせき	つばきやまいせき					
書名	かきのきだんいせき	のがたまえだんいせきえーちてん	樺山遺跡					
副書名	加治木堀遺跡	宮ノ本遺跡	樺山遺跡					
巻次	柿木段遺跡	野方前段遺跡A地点						
シリーズ名	東九州自動車道建設（鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	I							
編集者氏名	154							
編集機関	彌榮久志 遠矢勝幸 長崎慎太郎 岩永勇亮 岩元康成							
所在地	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
発行年月日	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃 〃	〃 〃	㎡		
かじきばりいせき 加治木堀遺跡	かごしまけん 鹿児島県 きおてん 曾於郡 おおさきまちよう 大崎町 のむち 野方 かじきばり 加治木堀	46468	70-7-0	31° 29' 41"	130° 55' 35"	確認調査 20070516～ 20070703 本調査 20071101～ 20080319	340 7,000	
みやのもといせき 宮ノ本遺跡	かごしまけん 鹿児島県 きおてん 曾於郡 おおさきまちよう 大崎町 のむち 野方 みやのも 宮ノ本		70-91-0	31° 29' 50"	130° 55' 38"	確認調査 20070516～ 20070703 本調査 20070516～ 20080319	40 500	
つばきやまいせき 樺山遺跡	かごしまけん 鹿児島県 きおてん 曾於郡 おおさきまちよう 大崎町 のむち 野方 つばきやまい 樺山		70-109-0	31° 29' 37"	130° 55' 17"	確認調査 20070611～ 20070702 本調査 20080601～ 20081127	40 1,300	東九州自動車道建設
かきのきだんいせき 柿木段遺跡	かごしまけん 鹿児島県 きおてん 曾於郡 おおさきまちよう 大崎町 たちおの 立小野 かきのきだん 柿木段			31° 28' 59"	130° 54' 29"	確認調査 20070704～ 20070727 本調査 20080522～ 20090319	160 4,900	
のむち 野方前段遺跡 A地点	かごしまけん 鹿児島県 きおてん 曾於郡 おおさきまちよう 大崎町 のむち 野方 まえだん 前段		70-63-0	31° 30' 07"	130° 55' 43"	確認調査 20070516～ 20070713 本調査 20070801～ 20080319	200 3,600	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加治木堀遺跡	散布地	縄文時代中期 弥生時代中期 古墳時代 古代～中世	落とし穴7 溝状遺構、古道跡、 畝状遺構、土坑1	土器、石鏃、楔形石器、敲石 山ノ口式土器 成川式土器、鉄鏃 白磁、青磁、軽石製品	
宮ノ本遺跡	散布地		なし	なし	
椿山遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代中期 古代～中世	落とし穴 溝状遺構、古道跡	岩崎下層式土器、岩崎上層式 土器、石匙、石鏃 吉ヶ崎式土器	
柿木段遺跡	散布地	縄文時代晩期 弥生時代 古墳時代 古代 中世～近世	落とし穴、石斧埋納 遺構、土坑 カマド跡 溝状遺構、古道跡	黒川式土器、石鏃、石斧 山ノ口式土器 成川式土器、鉄鏃 土師器、須恵器 青磁、白磁、染付、薩摩焼	
野方前段遺跡 A地点	散布地	縄文時代 弥生時代 古代～中世 近世	集石遺構6、炭化木、 落とし穴5、土坑3 土坑1 溝状遺構、古道跡 土坑14 土坑25	石板式土器、平椀式土器、塞 ノ神式土器、苦浜式土器、石 京西式土器、石鏃、石匙、磨 石、敲石、石皿、南福寺式土 器、黒川式土器、石製垂飾品 吉ヶ崎式土器 須恵器 染付、薩摩焼	
遺跡の概要		<ul style="list-style-type: none"> ・加治木堀遺跡 縄文時代中期と弥生時代中期、古墳時代及び中世の遺跡である。縄文時代中期の遺構として円形の落とし穴を7基検出している。落とし穴には桜島起源P7(4.7～5千年前)火山灰が埋土上部に混入し、2列に配置されていた。 弥生時代は山ノ口式土器、古墳時代は成川式土器と鉄鏃が出土している。 中世遺構は畝境、古道跡を検出し、畝は長方形で畝跡も検出している。 ・椿山遺跡 縄文時代中・後期の土器と落とし穴、弥生時代中期の土器、古代～中世の溝状遺構・古道跡を検出している。 ・柿木段遺跡 縄文時代晩期では土坑4基、落とし穴1基、石斧埋納遺構1基を検出している。古代は溝状遺構19本、古道跡46条、カマド遺構2基を検出している。 ・野方前段遺跡A地点 縄文時代早期・前期・中期・晩期、弥生時代中期、古代、中・近世の遺跡である。 遺構は縄文時代早期の集石遺構6基と、古代の可能性のある溝状遺構を1条検出している。 			



遺跡位置図

例 言

- 1 本報告書は、東九州自動車道（鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間）建設に伴う加治木堀遺跡、宮ノ本遺跡、椿山遺跡、柿木段遺跡、野方前段遺跡A地点の発掘調査報告書である。
- 2 加治木堀遺跡、宮ノ本遺跡、椿山遺跡、野方前段遺跡A地点は鹿児島県曾於郡大崎町野方、柿木段遺跡は曾於郡大崎町立小野に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成は、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は確認調査と本調査に分けて行い、確認調査は宮ノ本遺跡、加治木堀遺跡、椿山遺跡、柿木段遺跡の順で平成19年5月16日～平成19年7月27日の間実施した。本調査は加治木堀遺跡を平成19年11月1日～平成20年3月19日、柿木段遺跡を平成20年5月22日～平成21年3月19日まで実施した。
野方前段遺跡A地点は確認調査を平成19年5月16日～平成19年7月13日まで、本調査を平成19年7月16日～平成20年3月19日まで実施した。
- 5 遺物番号は、加治木堀遺跡及び宮ノ本遺跡、椿山遺跡、柿木段遺跡、野方前段遺跡の遺跡毎に通し番号を付し、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は土器が1/3、石器の小型及び剥片石器が1/1または2/3、磨石・敲石等の大型の石器は1/3を基本としたが、一部についてはこの限りではない。遺構の縮尺は1/20を基本としたが、一部の遺構に関してはこの限りではない。各々、挿図毎に示した縮尺を参考とされたい。
- 7 本書で使用したレベル数値は、国土交通省が提示した工事計画図面にに基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面作成、写真撮影は、調査担当者が行った。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て、加治木堀遺跡及び野方前段遺跡A地点を長崎慎太郎と岩永勇亮が、椿山遺跡及び柿木段遺跡を遠矢勝幸が行った。
- 10 土器の実測・トレースは整理作業員の協力を得て彌榮久志、遠矢が行った。
- 11 石器の実測・トレースは整理作業員の協力を得て彌榮、遠矢が行い、一部を九州文化財研究所に委託し、監修は彌榮が行った。
- 12 遺構内出土の炭化物の放射性年代測定は、(株)加速器分析研究所に委託した。
- 13 土器と石器の出土分布図は、整理作業員の協力を得て、加治木堀遺跡及び野方前段遺跡A地点を長崎が、椿山遺跡と柿木段遺跡を永濱功治の協力を得て遠矢が行った。
- 14 遺物の写真撮影は、西園勝彦と吉岡康弘が行った。
- 15 本報告書の執筆・編集は彌榮、遠矢、長崎、岩永、岩元康成が行った。
第1章 発掘調査の経緯、第2章 遺跡の位置と環境 長崎・遠矢
第3章 第1節 加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡 彌榮・長崎・岩永
第2節 椿山遺跡 遠矢・彌榮
第3節 柿木段遺跡 遠矢・彌榮・岩元
第4節 野方前段遺跡A地点 彌榮・長崎
- 16 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、各遺跡の遺物注記の略号は、加治木堀遺跡（KGB）、椿山遺跡（TY）、柿木段遺跡（KD）、野方前段遺跡A地点（NGM・A）である。

目

序文	
報告書抄録	
遺跡位置図	
例言	
第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	2
第3節 調査の経過(日誌抄)	5
第2章 遺跡の位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3章 各遺跡の概要	13
第1節 加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡	13
1 発掘調査の方法及び層位	13
2 確認調査の状況	14
3 縄文時代	20
(1) 遺構	20
(2) 遺物	30
4 弥生時代	32
5 古墳時代	37
6 古代、中・近世	38
(1) 遺構	38
(2) 遺物	41
7 まとめ	42
第2節 栢山遺跡	43
1 発掘調査の方法	43
2 層位	43
3 縄文時代・弥生時代の調査	47
(1) 概要	47
(2) 遺構	47
(3) 遺物	49
4 古代以降の調査	52
(1) 概要	52
(2) 遺構	52
5 まとめ	52
第3節 柿木段遺跡	53

次

1 発掘調査の方法及び層位	53
(1) 発掘調査の方法	53
(2) 層位	54
2 縄文時代の調査	59
(1) 前期・後期	59
ア 概要	59
イ 遺物	59
(2) 晩期	61
ア 概要	61
イ 遺構	61
ウ 遺物	67
3 弥生時代～古墳時代の調査	81
(1) 概要	81
(2) 遺物	81
4 古代の調査	84
(1) 概要	84
(2) 遺構	84
(3) 遺物	92
5 中世～近世の調査	101
(1) 概要	101
(2) 遺物	101
6 発掘調査のまとめ	108
7 放射性炭素年代測定	110
第4節 野方前段遺跡A地点	111
1 発掘調査の方法	111
2 層位	112
3 縄文時代	118
(1) 早期	118
ア 遺構	118
イ 遺物	123
(2) 前・中期	136
ア 遺構	136
イ 遺物	138
(3) 後・晩期	139
ア 遺構	139
イ 遺物	140
4 弥生時代	144

5	古代・近世	145	6	まとめ	152
(1)	遺構	145	7	野方前段遺跡における放射性炭素年代測定	153
(2)	遺物	151			

挿 図 目 次

第1図	東九州道自動車道建設に伴う遺跡	4	第3図	土層断面図①	44
第2図	周辺遺跡図	11	第4図	土層断面図②	45
加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡			第5図	土層断面図③	46
第1図	地形図及びグリッド配置図	13	第6図	縄文時代 遺構配置図	47
第2図	加治木堀遺跡土層断面図1	15	第7図	土坑実測図	48
第3図	加治木堀遺跡土層断面図2	16	第8図	落とし穴状遺構実測図	48
第4図	加治木堀遺跡土層断面図3	17	第9図	縄文時代 土器	50
第5図	加治木堀遺跡土層断面図4	18	第10図	縄文時代・弥生時代 土器	51
第6図	宮ノ本遺跡土層断面図	19	第11図	縄文時代 石器	51
第7図	縄文時代遺構配置図	20	第12図	溝状遺構・道跡配置図	52
第8図	1号落とし穴	22	柿木段遺跡		
第9図	2号落とし穴	23	第1図	確認トレンチ及びグリッド配置図	53
第10図	3号落とし穴	25	第2図	柿木段遺跡 基本土層図	54
第11図	4号落とし穴	26	第3図	土層断面図①	55
第12図	5号落とし穴	27	第4図	土層断面図②	56
第13図	6号落とし穴	28	第5図	土層断面図③	57
第14図	7号落とし穴	29	第6図	土層断面図④	58
第15図	縄文時代中期 土器	30	第7図	縄文時代前期・後期 遺物出土状況図	59
第16図	縄文時代中期 石器	31	第8図	縄文時代前期・後期 土器実測図	60
第17図	弥生時代中期 土器1	33	第9図	落とし穴状遺構実測図	62
第18図	弥生時代中期 土器2	34	第10図	土坑実測図①	62
第19図	弥生時代中期 土器3	35	第11図	土坑実測図②	63
第20図	古墳時代 遺物	37	第12図	石斧埋納遺構実測図	64
第21図	弥生・古墳時代 遺物出土状況	38	第13図	石斧埋納遺構内遺物実測図①	65
第22図	溝状遺構・古道跡・畝状遺構	39	第14図	石斧埋納遺構内遺物実測図②	66
第23図	古道跡	40	第15図	縄文時代晩期 遺構配置図	67
第24図	古代・中世 遺構配置図	40	第16図	縄文時代晩期 土器（深鉢形） 石器出土状況図	70
第25図	土坑	41	第17図	縄文時代晩期 土器（浅鉢形・マリ 形・ボウル状）出土状況図	70
第26図	中世 遺物	41	第18図	縄文時代晩期 土器実測図 （深鉢①）	71
椿山遺跡					
第1図	確認トレンチ及びグリッド配置図	43			
第2図	椿山遺跡土層図	44			

第19図	縄文時代晩期 土器実測図 (深鉢②)	72
第20図	縄文時代晩期 土器実測図 (深鉢③)	73
第21図	縄文時代晩期 土器実測図 (浅鉢)	74
第22図	縄文時代晩期 土器実測図 (浅鉢・マリ形)	75
第23図	縄文時代晩期 土器実測図 (ボウル状)	76
第24図	縄文時代晩期 石器実測図①	79
第25図	縄文時代晩期 石器実測図②	80
第26図	弥生時代～古墳時代 遺物出土状況図	81
第27図	弥生時代 土器実測図	82
第28図	古墳時代 土器実測図	82
第29図	弥生時代 石器実測図	83
第30図	カマド状遺構配置図	84
第31図	カマド状遺構実測図	85
第32図	古代 溝状遺構・道跡配置図 (A～G-1～6区)	88
第33図	古代 溝状遺構・道跡配置図 (A～F-11～15区)	89
第34図	古代 溝状遺構断面図	90
第35図	溝状遺構内遺物実測図	91
第36図	古代 土師器・土製品実測図	94
第37図	古代 土師器(壺①)実測図	95
第38図	古代 土師器(壺②)実測図	96
第39図	古代 土師器(壺③)・須恵器 実測図	97
第40図	古代 須恵器実測図	98
第41図	古代 遺物出土状況図	98
第42図	鉄製品実測図	100
第43図	中世～近世 遺物(土師器・白磁 ・青磁・染付)実測図	104
第44図	近世 遺物(肥前系染付・薩摩焼) 実測図	105
第45図	近世 遺物(薩摩焼・肥前系) 実測図	106

野方前段遺跡 A地点

第1図	地形図及びグリッド配置図	111
第2図	土層断面図1	113
第3図	土層断面図2	114
第4図	土層断面図3	115
第5図	土層断面図4	116
第6図	土層断面図5	117
第7図	縄文時代早期 遺構配置図	118
第8図	集石遺構1	119
第9図	集石遺構2	120
第10図	集石遺構3 炭化木	121
第11図	縄文時代早期 遺構内遺物	122
第12図	縄文時代早期 I類土器	123
第13図	縄文時代早期 II類土器	125
第14図	縄文時代早期 III類土器	126
第15図	縄文時代早期 IV類土器1	127
第16図	縄文時代早期 IV類土器2	128
第17図	縄文時代早期 出土状況図	130
第18図	縄文時代早期 石器1	132
第19図	縄文時代早期 石器2	133
第20図	縄文時代早期 石器3	134
第21図	縄文時代早期 石器4	135
第22図	落とし穴1	136
第23図	落とし穴2	137
第24図	縄文時代前・中期 出土状況図	138
第25図	縄文時代前期 土器	138
第26図	土坑	139
第27図	縄文時代後期 土器	140
第28図	縄文時代晩期 土器	141
第29図	縄文時代後・晩期 出土状況図	142
第30図	縄文時代後・晩期 石器	143
第31図	土坑	144
第32図	弥生時代 土器	144
第33図	弥生時代 出土状況図	145
第34図	溝状遺構・古道跡	146
第35図	土坑1	147
第36図	土坑2	148
第37図	土坑3	149
第38図	土坑配置図	150

③④6・7号落とし穴2号 発掘

⑤加治木堀遺跡 遠景（東から）

図版4 ①弥生時代 遺物出土状況

②古墳時代 鉄鍬出土状況

③④中世 敵状遺構・土坑

⑤⑥古道跡 検出状況

図版5 縄文時代土器 弥生時代土器

図版6 弥生時代土器

図版7 縄文時代石器、弥生時代土器

古墳時代・古代・中世の遺物

椿山遺跡

図版8 19年度トレンチ遺物出土状況

A-1～3区、4～5区北西側土層断面図

A-4区落とし穴調査中、発掘状況

図版9 遺物出土状況

縄文時代中期土器出土状況

弥生時代土器出土状況

B-8～9区北西側土層断面図

Ⅲ層上面溝状遺構検出状況南側から

Ⅲ層上面溝状遺構断面、発掘状況

作業風景

図版10 縄文時代中期土器・後期土器

弥生時代土器、石器

弥生～古墳時代土器

柿木段遺跡

図版11 19年度トレンチ7、8遺物出土状況

道跡検出状況

19年度トレンチ5発掘状況

B-3～4区落とし穴

落とし穴調査中、下面小ビット検出、発掘

4号土坑

図版12 石斧埋納遺構検出状況

カマド状遺構および土器集中検出状況

カマド状遺構1号調査中(1)～(3)

古代土器器出土状況、鉄鍬出土状況

図版13 D～F-3～5区 溝状遺構、道跡

道跡(道36・37・40・41・42)北側から

E～G-1～6区東側から溝1、溝2、溝7

溝状遺構(溝3)断面

A～C-11～14区溝状遺構、道跡検出状況南側から

E～F-4～6区溝9、道23・25・27・28南西側から

図版14 縄文時代前期・後期土器

図版15 縄文時代晩期土器1

図版16 縄文時代晩期土器2

図版17 縄文時代晩期石器

図版18 弥生時代土器 弥生時代石器

図版19 古墳時代土器 鉄製品

図版20 古代土器器(坏・埴)

図版21 古代土器器(坏・埴・紡錘車)、内黒土器器

図版22 古代土器器(甕)

図版23 古代須恵器

図版24 中世・近世出土遺物

図版25 近世出土遺物(薩摩焼・土器器・肥前系陶器)

野方前段遺跡 A地点

図版26 野方前段遺跡空堀

図版27 ①土層断面

②③1号集石 平面・断面

④～⑦2～5号集石

図版28 ①6号集石 ②炭化木

③縄文時代早期 土器出土状況

④～⑦1～4号落とし穴 半截

⑧5号落とし穴 発掘

図版29 ①縄文時代後期 土器出土状況

②縄文時代晩期 土坑硬化面

③弥生時代 土坑

⑤古道跡 ⑥溝状遺構

図版30 縄文時代早期 土器

図版31 縄文時代早期 土器

図版32 縄文時代早期 土器

図版33 縄文時代早期 石器

図版34 縄文時代前・後期 土器

図版35 縄文時代晩期 土器

図版36 縄文時代晩期 石器

弥生時代 土器

古代・近世 遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道（志布志IC～末吉財部IC間）の建設を計画し、当該事業区の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会を行った。

これを受けて文化財課は、平成11年1月に鹿屋串良IC～末吉財部IC間を、平成12年2月には志布志IC～鹿屋串良IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50カ所の遺跡（854,100㎡）の存在を報告した。

分布調査の結果を基に、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センターの4者で協議や対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化へ政府の方針が提起され、事業の見直しと建設のコストの削減も検討され、併せて遺跡の緻密な把握が求められることとなり、詳細な分布調査や試掘調査を実施することとした。

そこで、文化財課と県立埋蔵文化財センターは、平成13年7月10日～7月26日の間、鹿屋串良IC～末吉財部IC間の33の遺跡についての詳細分布調査を実施し、平成13年9月17日～10月26日までと、平成13年12月3日～12月25日の間に、遺跡の範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

上記の詳細調査に加え、既に合意されていた本線及び工事用道路部分、側道部分の確認調査も実施することとなり、関山西遺跡、関山遺跡、狩俣遺跡の3遺跡を平成13年10月1日～平成14年3月22日の間実施した。

平成14年4月には、鹿屋串良IC～志布志IC間について再度分布調査を実施し、遺跡面積を678,700㎡と報告した。

その後、日本道路公団の民営化と国土交通省所管の新直轄方式に基づく道路建設が確定し、12月に曾於弥五郎IC～末吉財部IC間の発掘調査協定書締結により、本格的な発掘調査を実施することとなった。

なお、日本道路公団からの再委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICから志布志ICまでの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡の調査は、確認調査を平成19年5月16日から7月3日まで行い、引き続き本調査を平成19年11月1日から平成20年3月19日に実施した。

椿山遺跡の調査は、確認調査を平成19年6月11日から7月2日まで行い、その後、本調査を平成20年9月1日から11月27日まで実施した。

柿木段遺跡の調査は、確認調査を平成19年7月4日から7月26日まで行い、その後、本調査を平成20年5月22日から平成21年3月19日まで実施したが、一部未買地が未調査で残されている。

第2節 調査の組織

【加治木堰遺跡・宮ノ本遺跡】

平成19年度	確認調査・本調査			
事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	宮原 景信
調査企画	〃	次長兼総務課長		平山 章
	〃	次長兼南の縄文調査室長		新東 晃一
	〃	調査第二課長		立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長		彌榮 久志
調査担当	〃	文化財主事		寺原 徹
	〃	〃		川元 禎久
事務担当	〃	総務係長		寄井田正秀
	〃	主事		五百路 真
調査指導		別府大学文学部教授		下村 智

【椿山遺跡・柿木段遺跡】

平成19年度	確認調査			
事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	宮原 景信
調査企画	〃	次長兼総務課長		平山 章
	〃	次長兼南の縄文調査室長		新東 晃一
	〃	調査第二課長		立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長		彌榮 久志
調査担当	〃	文化財主事		寺原 徹
	〃	〃		川元 禎久
事務担当	〃	総務係長		寄井田正秀
	〃	主事		五百路 真
平成20年度	本調査			
事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	宮原 景信
調査企画	〃	次長兼総務課長		平山 章
	〃	次長兼南の縄文調査室長		池畑 耕一

	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 第 二 課 長	彌 榮 久 志
	”	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中 村 耕 治
調査担当	”	文 化 財 主 事	遠 矢 勝 幸
	”	”	福 永 修 一
事務担当	”	総 務 係 長	紙 屋 伸 一
	”	主 査	五 百 路 真

【野方前段遺跡A地点】

平成19年度	確認調査・本調査		
事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	宮 原 景 信
調査企画	”	次 長 兼 総 務 課 長	平 山 章
	”	次長兼南の縄文調査室長	新 東 晃 一
	”	調 査 第 二 課 長	立 神 次 郎
	”	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌 榮 久 志
調査担当	”	文 化 財 主 事	平 木 場 秀 男
	”	文 化 財 研 究 員	木 内 敏 生
	”	文 化 財 調 査 員	佐 藤 真 人
	”	”	岩 永 勇 亮
事務担当	”	総 務 係 長	寄 井 田 正 秀
	”	主 事	五 百 路 真
平成21年度	報告書作成		
事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	山 下 吉 美
作成企画	”	次 長 兼 総 務 課 長	齊 藤 守 重
	”	次長兼南の縄文調査室長	青 崎 和 憲
	”	調 査 第 二 課 長	彌 榮 久 志
	”	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	長 野 真 一
作成担当	”	調 査 第 二 課 長	彌 榮 久 志
	”	文 化 財 主 事	遠 矢 勝 幸
	”	”	長 崎 慎 太 郎
	”	文 化 財 調 査 員	岩 永 勇 亮
事務担当	”	総 務 係 長	紙 屋 伸 一
	”	主 事	高 崎 智 博

報告書作成検討委員会 平成21年12月11日

山下所長ほか9名

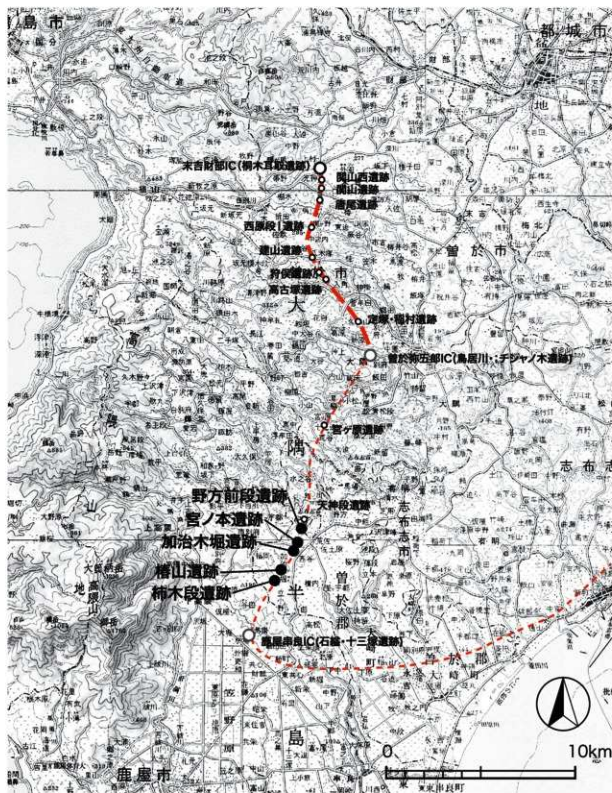
報告書作成指導委員会 平成21年12月2日

青崎次長ほか2名

企画担当 大久保浩二

作成指導 早稲田大学理工学部研究所客員准教授

山元 信夫



第1図 東九州道自動車道建設に伴う通跡

第3節 調査の経過（日誌抄）

加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡

加治木堀遺跡を主体とし、宮ノ本遺跡は（宮）で記述する。「トレンチ」を「T」で略す。

確認調査

平成19年5月

北側に確認トレンチ設定。アカホヤ1次から下の黒色土層まで掘り下げ終了。1 T VII層～IX層，2 T IV～VIa層，3 T III層，4 T II層掘り下げ。グリッド杭設置。（宮）確認T設定，VIa～IXまで完掘（1 T）東側と北側の土層断面写真撮影・実測。

平成19年6・7月

1 T VIII層出，2 T VI～IX層上面，土層断面実測。3 T VIa～VII層掘り下げ。4 T VIIa層・5 T IV～V層・6 T VIa～VIIa・7 T X層・8 T IV～VII層，9 T III～VI層，10 T II層，11 T II～III層，12 T II層掘り下げ。2 T～12 Tまでコンター図作成（S=1/250）。

本調査

平成19年11月

（C-7～9区）I～II層掘り下げ，（B・D-7～9区）II層掘り下げ，弥生土器多数出土。土坑1基検出（B・C-1～3区）表層剥ぎ。（B～D-8・9区）III層検出ビット精査。

平成19年12月

（B・C-3～5区）III層上面遺構検出，ビット完掘・コンター図作成，硬化面・古道跡検出。円形遺構検出，土坑実測。（B～D-7～9区）ビット完掘，コンター図・調査範囲図作成，III層一部検出。（D-19区）落とし穴4基・ビット検出，西壁土層断面実測。（C～E-16～20区）II～IIe層掘り下げ，土器（山ノ口）集中区検出。道跡状遺構検出（近世）。III層表土剥ぎ，P7検出。5 T横で鉄鍬出土。18～19日，下村智教授（別府大学）現地指導。

平成20年1月

（B・C-3区）II～III層検出，コンター・土坑位置図作成。（C～E-16～19）II層上部で溝状遺構検出，道跡（中世）検出，古道跡・溝状遺構実測。II～III層掘り下げ，弥生土器・石鍬・土坑1基検出，落とし穴2～5号半裁。

平成20年2月

（C・D-16～20区）III層検出，コンター図・落とし穴位置図作成。IIb直上細鍬跡検出，IIc層直上鉄鍬検出，IId層黒色のプラン検出，山ノ口式土器出土。IIe層上面で溝状遺構検出。IIa層硬化面・IIb層溝状遺構・3～6号半裁状況実測。2月15日空撮。

平成20年3月

（B～D-5・6区）II層掘り下げ。土坑平面実測。落とし穴7号床面検出，平面・逆茂木痕実測。（C・D-16～18区）III層上面コンター図作成，5号ミニT（50cm掘り）断面の確認，半裁，床面検出。（C-16・17区拡張部）III層一部検出，溝状遺構実測，山ノ口式土器・石鍬1点出土。

椿山遺跡・柿木段遺跡

椿山遺跡は（椿）で記述する。柿木段遺跡は（柿）で記述する。

確認調査

平成19年6月

(構) トレンチ設定, II層山ノ口式土器出土, コンター図作成。I TVI～VII層掘り下げ。

平成19年7月

(構) I TVII層掘り下げ, 土層断面写真撮影。北側ミニトレンチ掘り下げ。

(構) 1～4 T表土剥ぎ, 掘り下げ。1～4 T II～III層掘り下げ, I T溝状遺構検出。5 T I層～2次シラス掘り下げ・1～5 T配置図作成。6・8 T硬化面検出, 1・6～8 T II～V層掘り下げ。

本調査

平成20年5月

(構) II層掘り下げ, 表土剥ぎ。

平成20年6月

(構) (D～G-2～4区・G-5～7区) II層掘り下げ, 硬化面検出(古道跡)。(E～G-1～6区・D～E-1～3区) II層遺物取上げ。

平成20年7月

(構) (A～G-3区) 溝跡掘り下げ・実測。石槍出土。(D～G-1～6区) II層古道検出, II層掘り下げ, 硬化面検出。(F-4～6区) 溝跡完掘。溝状遺構実測。

平成20年8月

(構) (D～G-3～6区) II層掘り下げ, 古道跡硬化面検出, 畝跡検出。(E～G-4～6区) 溝跡掘り下げ。土坑掘り下げ。(D～F-2～3区) コンター図作成。

平成20年9月

(構) (F-2区) 土坑写真撮影, 掘り下げ実測, 溝状遺構の断面を含めた写真撮影。(D～G-1～5区) 状遺構実測。III層掘り下げ。(F-1区) 土坑No.3完掘。(構) 表土剥ぎ。

平成20年10月

(構) (D～G-2～6区) V層上面コンター図作成。V層上面遺構検出, 下層確認トレンチ完掘溝状遺構・III層掘り下げ, 北側T II～III層掘り下げ。

平成20年11月

(構) (A～C-13～16区) II層掘り下げ。(構) 北側トレンチVI層上部まで掘り下げ。(B～C-7～8区) コンター図作成。(A～C-1～7区) アカホヤ上面遺構検出, IV層上面掘り下げ, V層・VI層コンター図作成。(A～B-1～6区) III～IV層掘り下げ, 落とし穴検出。北東側土層断面実測。(構) (A-1～5区・A・B-4・5区) さつま層まで確認トレンチ。(A・B-1・4～5区・A～C-7区) アカホヤ層上面コンター図作成。落とし穴実測。椿山遺跡調査終了。

平成20年12月

(構) (A～C-13～16区) II層掘り下げ, 硬化面?検出。

平成21年1月

(構) (A～C-2～4区) II層掘り下げ。硬化面検出。(A～C-13～16区) 硬化面精査。(A～G-10～16区) 土器集中部掘り下げ。カマド状遺構掘り下げ, II層掘り下げ, 溝跡実測。

平成20年2月

(柿) (A～D-4～7区・A～E-11～16区) 溝跡レベル実測、掘り下げ、II層掘り下げ、古道跡実測。(C～D-2～11区) 溝跡検出・掘り下げ。

平成21年3月

(柿) (B-3区) 石斧デボ実測。(A～C-2～6区) III～IV層/V層上面・コンター図作成。(A～F-11～15区) III層コンター図作成、IV層上面精査。1号落とし穴完掘。(A-14区) カマド状遺構実測。荷出し準備、片付け、ベルトコンベアー撤去、レンタカー返却、環境整備。

野方前段遺跡A地点

確認調査

平成19年5月

グリッド設定、確認T設定、掘り下げ。T位置図作成。8・10T掘り下げ。

平成19年6月、7月

(7T・10TⅧ層・12TⅢ～IV層・13T・14TⅣ層・16TX～Ⅺ層・17T)掘り下げ。(15T)遺構配置図作成。(11T)Ⅴ層遺構検出。(8・9T)Ⅲa～Ⅲb層拡張部分の掘り下げ。

本調査

平成19年7月

(8・9・10T)Ⅲa～Ⅲb層拡張部分掘り下げ・遺構検出・コンター図作成。(16T)掘り下げ。(G～J-5～12区)Ⅲbc層掘り下げ・遺構検出・コンター図作成。

平成19年8月

(H～K-7区)溝3検出。(H・I-4～11区)土層断面実測・Ⅲ～IV層掘り下げ・遺構検出。(G～J-10～13区)Ⅳ～Ⅶ層掘り下げ・遺構検出。(H-5区)確認T掘り下げ。

平成19年9月

(H～K-3～13区)Ⅲ層～Ⅵ層掘り下げ・遺構検出・配置図作成、下層確認トレンチ掘り下げ。集石3号検出。コンター図作成、Ⅶ下層確認T・グリッドベルト・土坑掘り下げ。

平成19年10月

(G～K-3～13区)古道実測、Ⅲ～Ⅶ層掘り下げ、遺構検出、遺構実測・遺構半裁、遺構検出遺物取り上げ・コンター図作成、土坑実測。下層確認トレンチ掘り下げ(Ⅷ層迄)

平成19年11月

(H-6区)集石4号実測。(G～J-7～13区)Ⅵ層・ベルト・下層確認トレンチⅦ層掘り下げ、炭化土・土坑実測、遺物取り上げ、遺構配置図作成。(I-5区)集石実測。A地点調査終了。B地点及び天神段遺跡へ移動。

平成20年1月

野方前段遺跡、天神段遺跡空撮の為、Ⅷ層上面(サツマ)の掃除、空撮。野方前段遺跡B地点及び天神段遺跡の調査。

平成20年2月・3月

野方前段遺跡B地点及び天神段遺跡の調査。荷出し準備、片付け、ベルトコンベアー撤去、レンタカー返却、環境整備。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

加治木堀遺跡、宮ノ本遺跡、椿山遺跡、柿木段遺跡及び野方前段遺跡は、曾於郡大崎町野方及び立小野に所在する。大崎町は、鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し、東西に約8km、南北に約18km、総面積は100.82km²である。東側に志布志市、西側に鹿屋市、南側に肝属郡東串良町、北側は曾於市と接し、南部では黒潮の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は、九州山地の延長をなす東西の山地と、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から形成されている。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地質からなっている。西側の山地は、北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と、南部の大麓柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は、高隈山周辺に分布している新生代古第3紀の日南層群によって大隅半島の基盤をなしている。山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は、堆積後現在に至るまで大小多くの河川で開析され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が走り志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また何段かの河岸段丘も認められる。

大崎町の地形は、志布志湾に面した大崎地区と、内陸部に位置する野方地区の二つの地区が南北に連結する瓢箪状を呈する。南部は海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形である。北部は、標高150mから200mの丘陵地帯であり、北端部では谷間の多い起伏の激しい地形である。高隈山系などに端を発する菱田川、田原川、持留川の三つの川が南流し、志布志湾に注いでいる。南部は、この3河川によってシラス台地を開析された水田地帯がひろがっている。北部は、台地上に畑地が形成されている。地質は、シラス台地上に形成された黒色火山灰土壌が多く、低地部に位置する水田の一部では泥炭層をなしているところがある。

遺跡が所在する野方地区は、標高200mのシラス台地を菱田川の支流である大鳥川が浸食し、小台地群に分断された起伏の多い地形である。台地上は、畜産や畑作地として利用されている。また、谷間では小川や湧水が存在し、現在でも水田として利用されている。加治木堀遺跡は、台地中央部に位置し、宮ノ本遺跡、椿山遺跡、野方前段遺跡は台地縁辺部に位置し、柿木段遺跡は、台地との比高差約50mで貫入している谷部に位置する。

第2節 歴史的環境

加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡の所在する大崎町では、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡群の周辺は、これまで本格的な発掘調査がなされていないため詳細は不明であったが、近年の東九州自

動車道建設に伴い調査された遺跡などから、次第に様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

現在調査が進められている天神段遺跡では、野方前段遺跡と同じ台地上の北側に位置する。ここからはナイフ形石器文化と細石刃文化の石器製作跡及び石器類が検出・出土している。

縄文時代

近年、町内において、縄文時代の遺跡の発掘調査が増えつつある。金丸城跡からは石坂式土器・石鎌・凹石、二子塚A遺跡からは塞ノ神式土器・落とし穴状遺構2基、下堀遺跡からは土器・集石遺構13基、天神段遺跡からは前平式土器・桑ノ丸式土器・石坂式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器・石鎌・打製石斧・多数の集石遺構・連穴土坑・落とし穴状遺構といった縄文時代早期の遺構・遺物の発見が報じられている。

本遺跡と同じ野方地区にある立山B遺跡では、前期の曾畑式土器、中期の阿高式土器、晩期の黒川式土器が出土している。下堀遺跡では中期の指宿式土器、細山田段遺跡からは後期の西平式土器が出土している。

弥生時代

名勝「国の松原」の砂丘後背地に立地する沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年の町による発掘調査では、53軒の住居跡・約20基の土坑・約180基の柱穴が発見され、入来I式土器、入来II式土器、山ノ口I式土器、山ノ口II式土器、須玖式土器・鉄製品・軽石製加工品が出土している。内陸部の標高約50mの台地に立地する下堀遺跡からは、山ノ口式土器の他、須玖式土器を伴い直径8mの円形大型住居2基・掘立柱建物跡5基が検出されている。桜迫遺跡からは山ノ口式土器が出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し、特に河口付近当たる横瀬地域では甕棺破片が採集されている。

古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは、南九州では数少ない前方後円墳をはじめとした古墳群を有し、畿内との関連を窺わせる。

横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀後半頃）の大型前方後円墳で、隣接する肝属郡東串良町仁仁大塚古墳について県内第2の規模を誇る。平成2年の鹿児島大学と琉球大学の測量調査では、全長160m、墳長132m、前方部幅72m、前方部長68m、後円部径64m、くびれ部幅48mを測り、墳丘からは円筒埴輪片、象形埴輪片が出土している。昭和53年の大隅地区埋蔵文化財分布調査で実施した範囲確認調査では周濠跡も確認され、周濠跡からは、伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器も出土している。なお、濠の幅は12～23m、深さは約1.5mである。墳丘の高さについては、後円部が10.5m、前方部が11.5mであるが、後円部の頂上部に石室が露呈していることから、もともとの後円部は現在より高かったと考えられる。被葬者については明らかにされていないが、明治35年に盗掘を受け、その際に腐食した直刀や鎧、勾玉類が出土し、石室内は朱塗りであったと伝えられ、被葬者の実力を窺わせる。

神領古墳群では、前方後円墳4基、円墳8基で構成され、また、地下式横穴7基の存在が知られている。特に6号墳は全長43m、後円部径19m、高さ3m、前方部幅16m、高さ2mの前方後円墳で、後円部に竪穴石室がある。昭和37年に日光鏡・仿製獣帯鏡各1面が採集され、昭和43年の調査

では、石室は花崗岩質板石6枚を使用した組合せ石棺で、鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が確認された。

神領遺跡群の地下式横穴1号は、昭和35年に調査され、長方形で家形の玄室、妻入りの羨道部取り付け、鉄剣・イモガイ製貝釧・内向花文鏡などの副葬品が確認された。地下式横穴3・4号は、昭和55年に調査された。地下式横穴5号は、昭和62年に調査され、イモガイ製貝釧が出土した。地下式横穴6号は、平成2年に調査され、玄室内には南側に歯が数本、北側に大腿骨が残存しており、副葬品は確認できなかった。

町内では他に、高塚古墳に飯隈遺跡群・田中古墳群・後迫古墳群が知られ、地下式横穴墓に飯隈地下式横穴墓群・鷲塚地下式横穴墓群で知られ、他に、二子塚遺跡Aで住居跡・土師器・成川式土器、沢目遺跡では古墳時代初頭の住居跡や布留式土器をまわって作られた土師器、下堀遺跡で住居跡・溝状遺構・地下式横穴墓・鉄剣・鉄鎌が確認されている。

古代・中世

古代の遺跡としては、天神段遺跡で古代の掘立柱建物跡が確認されている。また、下堀遺跡では土師器と土坑が確認されている。

中世の遺跡はほとんどが山城であり、大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・梶谷城・遠見ヶ丘があげられる。金丸城跡は、平成11～12年に調査され、溝状遺構・土坑・竜泉窯系及び同安窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前系揃鉢天目碗などが確認されている。

また、近年の発掘調査から、下堀遺跡では、溝状遺構・畝跡・青磁・青花・中国陶器などが確認されている。天神段遺跡では、掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓・土坑・土師器・須恵器・青磁・白磁・天目碗・鉄製品・青銅製品・鉄滓・砥石・滑石製石鍋片などが確認されている。中でも土坑墓1号からは、同安窯系青磁6点・青磁1点・青白磁1点・銅鏡1点・滑石製石鍋2点・鉄製品・木製品・土師器などの副葬品が確認されている。

近世

金丸城跡では、掘立柱建物跡・焼土を伴う土坑・軽石集積区・肥前系染付・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓などが確認されている。天神段遺跡では、安永ボラ（1779年）を埋土とする畝状遺構・薩摩焼などが確認されている。

近世の野方地区は、寛永年間（1624～1643）に薩摩藩の私領主（一門家）である加治木島津家の領地（持切在）として開墾された。一方、荒佐野の照日神社には、大坂夏の陣後の元禄2年（1689）に摂津・河内・和泉から薩摩藩へ移住し、荒佐野を開拓した人々の記念碑がある。荒佐野の氏神として移住の際に勧進された伊勢神社は、明治期に旧野方村の村社であった照日神社に合祀され、現在の照日神社となった。字名の加治木堀の由来については、荒佐衆と加治木衆の領地境界を示す堀があったことから、名づけられたといわれている。

（参考文献）

- 教仁郷断二 1951 「大崎町史」大崎町 1975 「大崎町史（明治百年）」
大崎町教育委員会 2001 「立山B遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
大崎町教育委員会 2005 「金丸城跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
大崎町教育委員会 2005 「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)



第2図 周辺遺跡図



周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺物等	備考
1	70 5	横内A	鹿児島県曾於郡大崎町持留横内	散布地	畑地	縄文(後)	台地	市来式・指宿式・半磨製石斧	
2	70 7	加治木堀	鹿児島県曾於郡大崎町野方加治木堀	散布地	畑地	縄文・弥生・中世	台地	土器片・山之口式・鉄鏝	本報告書 平成19年発掘調査
3	70 10	原別府	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地	畑地	縄文(後)	台地	土器片・打製石斧	
4	70 14	荒佐野	鹿児島県曾於郡大崎町野方荒佐野	散布地	畑地	弥生(中)	台地	土器片・磨製石斧	
5	70 23	横内B	鹿児島県曾於郡大崎町持留横内	散布地		弥生(中・後)	台地	後期半磨製石斧	
6	70 30	二松	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地		弥生・歴史	台地		
7	70 42	椿井原跡	鹿児島県曾於郡大崎町野方	城館跡	畑地	中世	台地		城跡の正確な所在は不明・推定である
8	70 45	倉元	鹿児島県曾於郡大崎町野方倉元	散布地			台地	土器片	平成3年農政分布調査
9	70 54	岩井場段	鹿児島県曾於郡大崎町野方中段	散布地		縄文・弥生	台地		平成8年農政分布調査
10	70 62	天神段	鹿児島県曾於郡大崎町野方天神段	散布地		縄文	台地	貝殻・燧石・前平式・土師器・白磁	平成9年農政分布調査 平成19～21年発掘調査
11	70 63	野方前段	鹿児島県曾於郡大崎町野方前段	散布地		縄文・古墳	台地	墓ノ神式・黒川式・吉ヶ崎式・土師器	本報告書 平成19～20年発掘調査
12	70 64	内ヶ迫	鹿児島県曾於郡大崎町野方内ヶ迫	散布地		古墳	台地	成川式	平成9年農政分布調査
13	70 65	瀬ノ堀A	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀・楡山・又白流	散布地		縄文	台地	燧石・土器片・成川式	平成9年農政分布調査
14	70 66	瀬ノ堀B	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地			台地		平成9年農政分布調査
15	70 91	富ノ本	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地		弥生	台地		本報告書 平成19年発掘調査
16	70 107	岩井場	鹿児島県曾於郡大崎町野方2572-2外	散布地		古墳	台地	土器	平成12年農政分布調査
17	70 108	亀形	鹿児島県曾於郡大崎町野方2522-1外	散布地		弥生	台地	土器	平成12年農政分布調査
18	70 109	楡山	鹿児島県曾於郡大崎町野方3179-5	散布地		縄文・弥生・古代	台地	岩崎式・吉ヶ崎式	本報告書 平成19～20年発掘調査
19	70 118	楡山	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地		古墳	台地		
20	70 119	松尾原跡	鹿児島県曾於郡大崎町野方	城館跡		中世	台地		城跡の正確な所在は不明・推定である。
21	70 120	椿井原跡	鹿児島県曾於郡大崎町野方	城館跡		中世	台地		城跡の正確な所在は不明・推定である。
22	12 151	大牧	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地		古代			平成19年分布調査
23	12 152	樋ノ口1	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地		古墳・古代			平成19年分布調査
24	64 1	引地	鹿児島県鹿屋市榑北町下百引引地	散布地		縄文(早)	丘陵	墓ノ神式	昭和56年度分布調査
25	64 2	徳光ヶ丘	鹿児島県鹿屋市榑北町下百引東原別府	散布地		縄文(前・後・晩)	台地	春日式・岩崎式・草野式・燧石・夜白式	昭和56年度分布調査
26		榑木段	鹿児島県曾於郡大崎町立小野榑木段	散布地		縄文・古代・中世	低地	入佐式・石斧・土師器・須恵器・鉄鏝	本報告書 平成19～21年発掘調査

加治木堀遺跡

宮ノ本遺跡

第Ⅲ章 各遺跡の概要

第1節 加治木堀遺跡，宮ノ本遺跡

1 発掘調査の方法及び層位

加治木堀遺跡は、標高約200mの台地の中央部で、宮ノ本遺跡は、加治木堀遺跡と渠道をはさんで隣接する台地の縁辺部にあたる。調査区(グリッド)は、センターライン上の「STA67+20」と「STA67+60」を結ぶ直線を基に設定した。加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡は総延長が700mに及ぶため、20m間隔のグリッドとし、南側から北側に向かって1, 2, 3…、西側から東側に向かってA, B, C…とした。

確認調査の後、加治木堀遺跡の本調査を平成19年11月1日から平成20年3月19日(実働83日)まで実施した。調査は、弥生時代の遺物が出土した範囲(4,500m²)については、表土を重機で除去し、その後人力による掘削を行った。

層位については、II層は黒褐色土を主とし、この中に黄橙色のバミスがみられ、その直下のやや茶褐色の層(IIc層)及びその下の黒褐色土(II d層)から弥生土器が出土したが、それに伴う遺構は検出していない。III層は桜島起源のP7(約4,200年前)火山灰層に比定され、硬質の土壌で層厚は10cm程である。なお、後述する落とし穴はこの火山灰層を掘削して造営されている。V層は池田降下軽石(約5,500年前)で、VI層の直上に散在的に分布する。VI層はアカホヤ火山灰層(約6,300年前)で、VIa層と一次堆積のVIb層に分層できる。VII層中には、桜島起源のP13(約9,500年前)が一部ブロック状に集中し、その上部にも散在する。IX層は桜島起源の薩摩火山灰層のP14(約11,500年前)山灰層である。X層は暗茶褐色の粘質土層で、遺物の出土はみられない。XI層より下位は、始良カルデラ起源のAT火山灰の二次堆積と考えられる土層である。重機による深堀調査では、ATの一次堆積層の間に、桜島起源のP15、P17の軽石が点在するのが確認された。



第1図 地形図及びグリッド配置図

I層	表土	P 2 (桜島起源) の白色軽石混在
IIa層	黒褐色土層	中世の古遺跡検出
IIb層	茶褐色土層	黄褐色パミス (起源不明) 混在
IIc層	黒褐色土層	弥生時代の遺物包含層 (やや茶褐色)
IId層	黒褐色土層	弥生時代の遺物包含層
IIe層	黒褐色土層	
III層	暗黄褐色土層	P 7 (桜島起源), 落し穴検出
IV層	黒褐色土層	
V層	黄褐色パミス混土層	池田降下軽石混
VIa層	暗橙褐色土層	アカホヤ (鬼界カルデラ起源) 二次
VIb層	橙褐色パミス混土層	アカホヤ一次
VIIa層	黒褐色硬質土層	P 13 (桜島起源) パミス散在
VIIb層	暗黄褐色硬質土層	P 13パミス多い
VIII層	淡黄褐色土層	
IXa層	黄褐色硬質土層	P 14, 薩摩火山灰層 (桜島起源) 二次
IXb層	黄褐色砂質土層	P 14, 薩摩火山灰層一次
X層	暗茶褐色粘質土層	いわゆるチョコ層
XI層	暗黄褐色砂質土層	

2 確認調査の状況

加治木堀遺跡では、グリッドを基準とした確認トレンチ (50m×2mを1か所, 他は10m×2m) を13か所設定した。調査面積は340㎡, 調査延面積は650㎡である。

宮ノ本遺跡では、L字形のトレンチ (10m×10m×2m) を1か所設定し、4mの掘下げを実施した。調査面積は40㎡, 調査延面積は75㎡である。

調査は、両遺跡とも重機で雑草・雑木の除去を行ったあと、表土を除去し、その後人力による掘削を行っている。

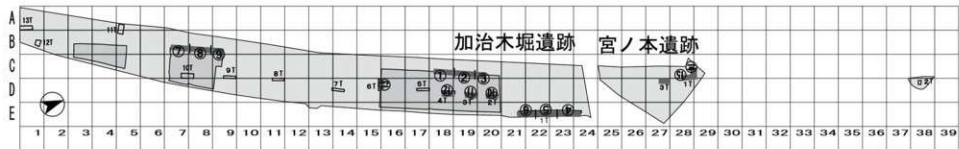
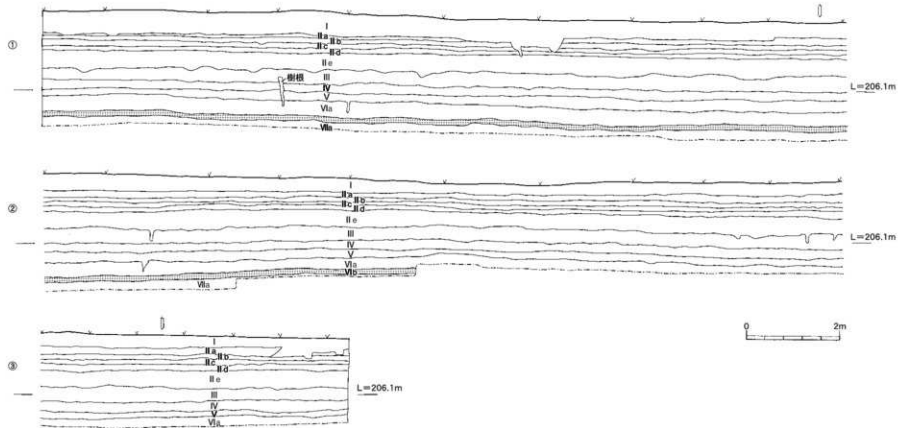
加治木堀遺跡では、縄文時代中期と判断できる落とし穴が、P 7を含むIII層の直上で2基検出された。うち、1基は円形で直径160cm, 深さ182cmを計測した。IIe層の上部からは、弥生時代中期後半の山ノ口式土器が出土した。

一方、宮ノ本遺跡では遺構・遺物は検出されなかった。

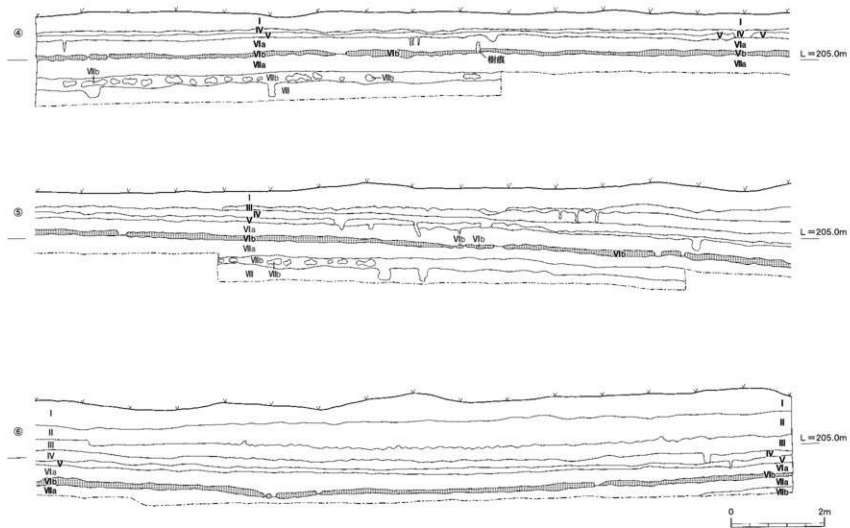
第1表 確認トレンチ一覧

	層	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	XI層	大きさ	面積 (㎡)
		P 2混在	中世弥生	P 7		池田降下軽石	アカホヤ	P 13		P 14				
ト レ ン チ 番 号	1 T	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	5.0 × 4.0	20
	2 T	×	×	×	○	×	×	×	×	×	—	—	5.0 × 4.0	20
	3 T	×	×	◎	×	×	×	×	—	—	—	—	5.0 × 4.0	20
	4 T	×	×	◎	×	×	×	×	—	—	—	—	5.0 × 4.0	20
	5 T	×	×	○	×	×	—	—	—	—	—	—	4.0 × 3.0	12
	6 T	×	×	×	×	×	×	×	—	—	—	—	5.0 × 4.0	20
	7 T	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	8.0 × 5.0	40
	8 T	×	×	×	×	×	×	×	—	—	—	—	5.0 × 4.0	20
	9 T	×	×	×	×	×	×	×	—	—	—	—	5.0 × 4.0	20
	10 T	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.0 × 4.0	20
	11 T	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	5.0 × 4.0	20
	12 T	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.0 × 3.0	18
	13 T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	8.0 × 2.0	16

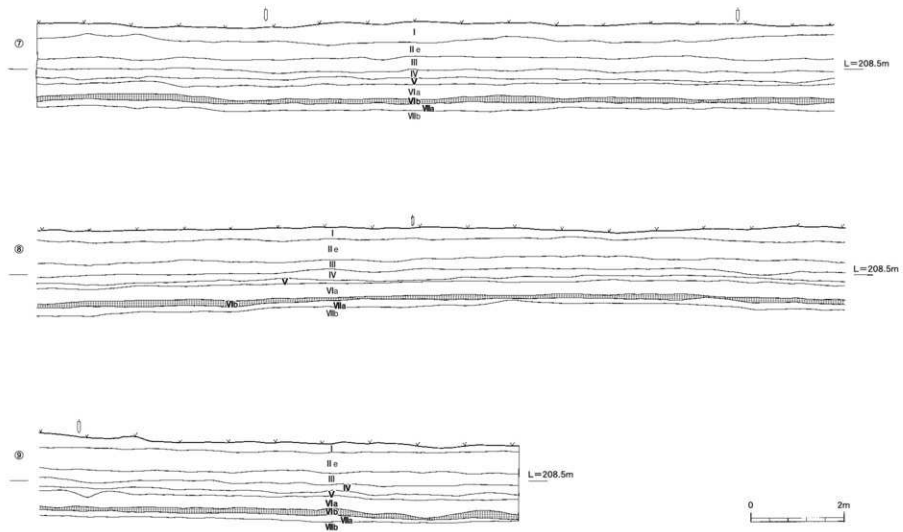
◎: 遺構検出 ○: 遺物出土 ×: 出土なし —: 未調査



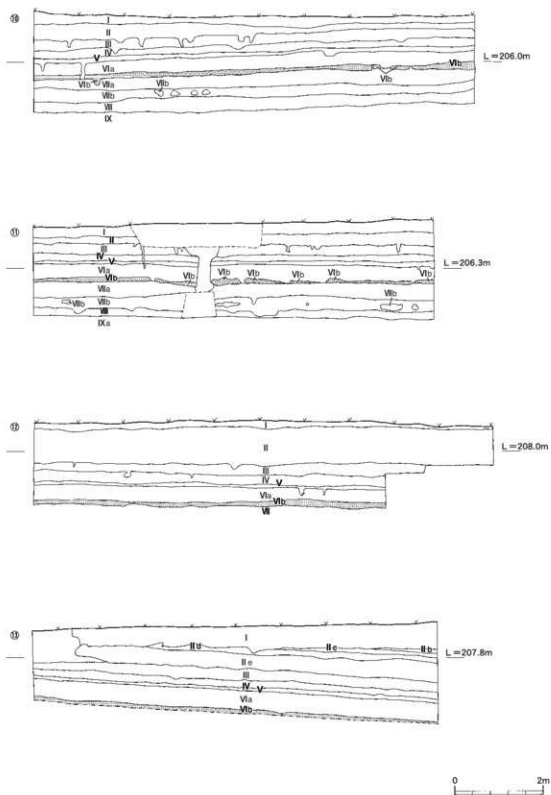
第2図 加治木堀遺跡土層断面図1



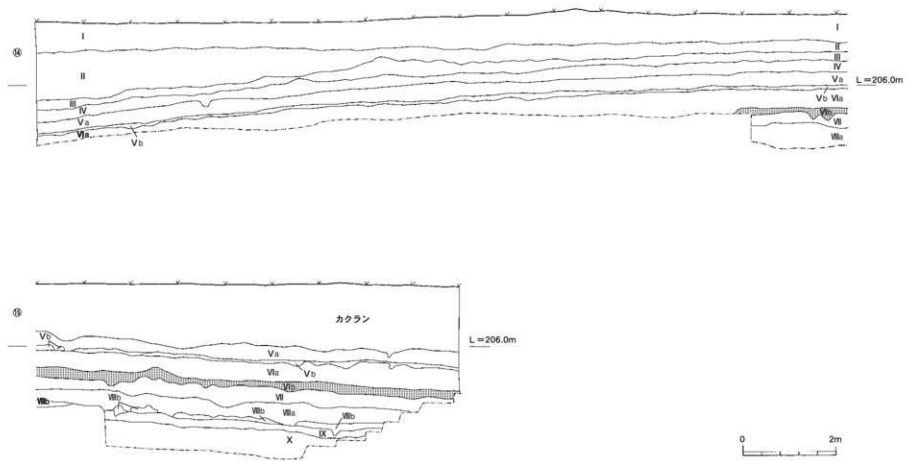
第3図 加治木堰遺跡土層断面図2



第4図 加治木塚遺跡土層断面図3



第 5 図 加治木塚遺跡土層断面図 4



第6図 宮ノ本遺跡土層断面図

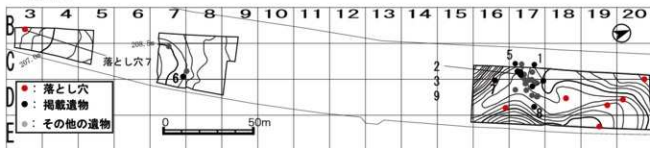
3 縄文時代

IIc～IId層を包含層とする。本遺跡では縄文時代中期の遺構・遺物が検出されている。落とし穴7基が検出され、土器4点と石器6点を図化した。

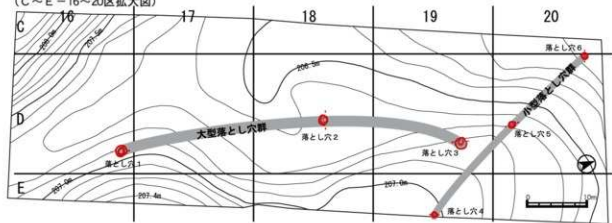
(1) 遺構

7基の落とし穴が検出されており、中でも6基がIII層で検出されている。このIII層はP7バミス堆積層である。したがって、落とし穴の設営時期はこの層の堆積以降と判断でき、縄文時代中期以降に作られたと判断される。落とし穴の平面形状は全て円形であり、直径1～1.2mと、直径1.7～2mの二群に分けられ、ここでは便宜上、大型落とし穴群と小型落とし穴群と呼ぶことにする。この二群はそれぞれが北北東方向と、北北西方向に一列に並んで検出されている。また、7号(第14図)のみが離れた場所で単独で検出されているが、これもその形状から小型に分類される。

(全体図)



(C～E-16～20区拡大図)



第7図 縄文時代遺構配置図

ア 大型落とし穴群(1号～3号)

1号落とし穴(第8図)

D-16区のIII層で検出された。検出面での直径は188cmでほぼ円形を呈するが、検出面より10cmほど掘り下げたところで楕れ、そこから若干袋状を呈しながら西北西方向に長軸をもつ長楕円形になり、底部にいくにしたがって円形へと戻っていく形を呈している。袋状になった部分から下位はバケツ状の断面になり、底面は直径77cmの円形の平坦面となっている。小ピットは確認されていない。検出面から底面までの深さは192cmであり、IXa層の薩摩火山灰の2次堆積面に達している。埋土は基本的には黒褐色土であり、上部にはP7軽石が、下部にはアカホヤ火山灰やそれに伴う軽石が混入している。

2号落とし穴(第9図)

D-18区のⅢ層で検出された。北側の一部はトレンチによる確認調査の時点で削平されている。残存部で確認できる直径は167cmで円形を呈すると考えられる。1号と同様に検出面より10cmほど掘り下げたところで段を形成しており、そこから緩やかにすばまりながら、検出面より150~160cmのところではほぼ垂直な掘り込みに変わり、角部を形成しながら長径80cm、短径64cmの楕円形の平坦な底面となる。底面に小ピットは確認されていない。検出面から底面までの深さは206cmであり、IXa層の薩摩火山灰の2次堆積面に達している。

3号落とし穴(第10図)

D-19区のⅢ層で検出された。検出面での直径は190cmでほぼ円形を呈している。検出面より50cmまでは斜めに掘り込まれ、そこからはほぼ垂直に、底面付近でわずかにすばまる形状をしている。底面は検出面からすると北西方向に40cmほどその中心がずれて形成されており、小ピットは確認されていない。検出面から底面までの深さは186cmであり、IX層の薩摩火山灰の2次堆積層に達している。

イ 小型落とし穴(4号~7号)

4号落とし穴(第11図)

E-19区のV層で検出された。検出面での直径は96cmでほぼ円形を呈している。検出面より40cmほどのところまではほぼ垂直に掘り込まれ、そこから30cmほどは斜めに掘り込まれ、さらに垂直な掘り込みに変わり、底部付近ですばまる形状をしている。検出面から底面までの深さは122cmであり、Ⅷ層の途中まで掘り込まれている。底面には中心よりも南側に10cmほどずれた位置で直径15cm、深さ20cmの小ピットが1か所で検出された。

5号落とし穴(第12図)

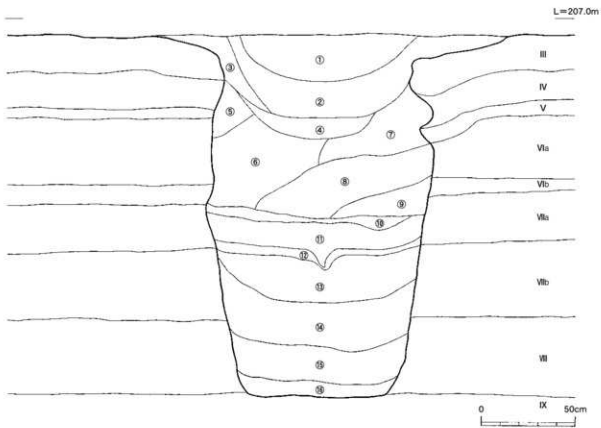
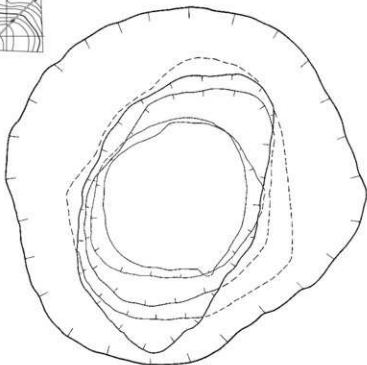
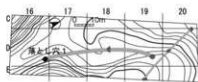
D-20区のⅢ層で検出された。検出面での直径は110cmでほぼ円形を呈しているが、北側に一部飛び出している部分がみられる。検出面より約10~15cmでラップ状に開くところで段が形成されており、そこからは底部までわずかに内側に入り込みながら掘り込まれており、角部を形成しながら直径約55cmの円形の平坦な底面となる。検出面からの深さは172cmであり、中心部より西側に20cmほどのところに直径20cm、深さ58cmの小ピットが1か所で検出された。小ピットはXI層の上面まで達している。また、土層断面の水平位置で言うと、IXa層の半ほどより少し高いレベルから小ピットにかけて、長さ74cmの逆茂木痕と考えられる痕跡が確認されている。

6号落とし穴(第13図)

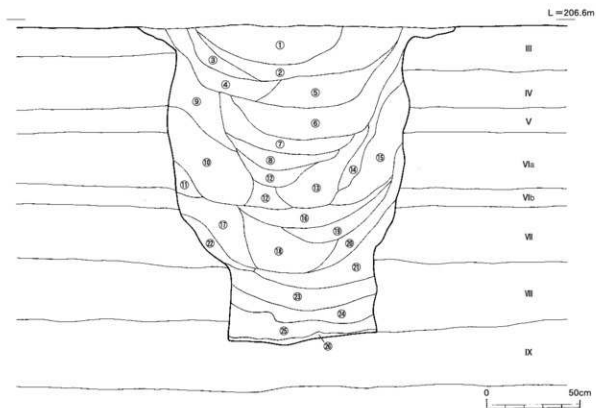
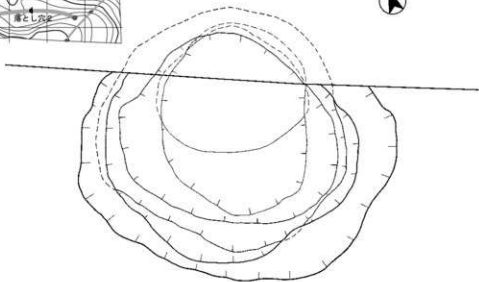
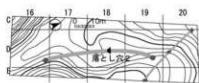
C・D-20区の境界においてⅢ層で検出された。検出面での直径は110~120cmでほぼ円形を呈している。検出面から4cmほどのところで段が形成されており、そこからはU字状に底面まで掘り込まれている。検出面からの深さは172cmで、底面に小ピットは確認されていない。

7号落とし穴(第14図)

B-3区のⅢ層で検出された。検出面での直径は96~106cmでほぼ円形を呈している。検出面から10cmほどのところで段が形成されており、そこからは一部でさらに段が形成されるが、ほぼ垂直に掘り込まれ、角部を形成しながら直径53cmの底面に至る。検出面からの深さは142cmで、中心から北東に10cmほどのところに、直径18cmほどの小ピットが1か所で確認されている。



第8図 1号落とし穴



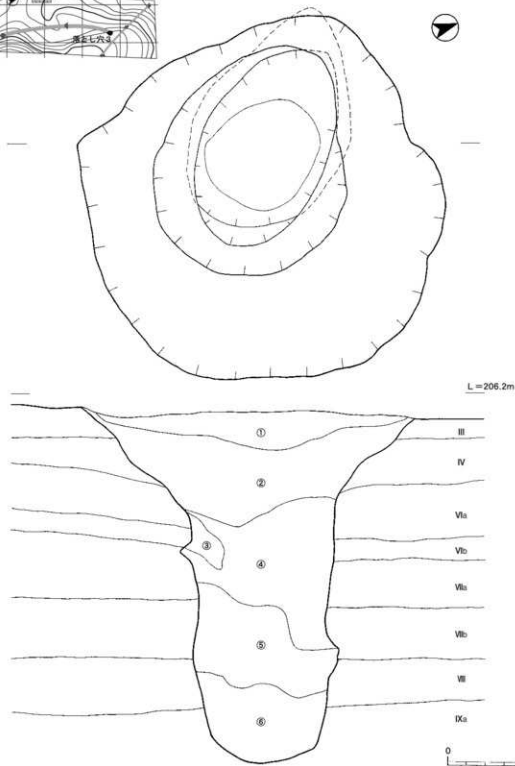
第9図 2号落とし穴

第2表 1号落とし穴 埋土観察表

埋土	色調	特徴
①	黒褐色土	砂質土0.1~0.5mm大の小バミスが混入。
②	黒褐色土	やや硬質土。5mm大の黄橙色のバミスがまばらに混入。
③	黒褐色土	やや硬質の土。P7バミス混入。
④	黒褐色土	5mm大のやや赤味がかかったバミスが数個混入。ややもろい。
⑤	黒褐色土	2~3mm大の黄橙バミスまばらに混入。②・⑥・⑦よりバミスの混入密度が低い。
⑥	黄黒褐色土	硬質土。7~8mm大の黄橙色バミスが多量に混入。
⑦	黒褐色土	7~8mm大の黄橙色バミスがまばらに混入。⑥よりは量が少ない。
⑧	黒褐色土	7~8mm, 1mm大の黄橙色バミスが少量混入。
⑨	灰褐色土	砂質土。アカホヤと近似した7~8mm大のバミスがまばらに混入。
⑩	灰黒褐色土	1cm大のバミスがまばらに混入。
⑪	緑黒褐色土	1cm大のアカホヤバミスが多量に混入。
⑫	黄橙色土	黒褐色土の粒子が少量混入。ややもろい。
⑬	赤褐色土	1~3cm大のアカホヤのバミスが大量に混入。黒褐色土もわずかに混入。
⑭		1~6cm大のアカホヤバミスが大量に混入。黒褐色土と筋状堆積。
⑮	緑黒褐色土	弱粘質土。まだら状にアカホヤが混入。
⑯	灰褐色土	硬質土。

第3表 2号落とし穴 埋土観察表

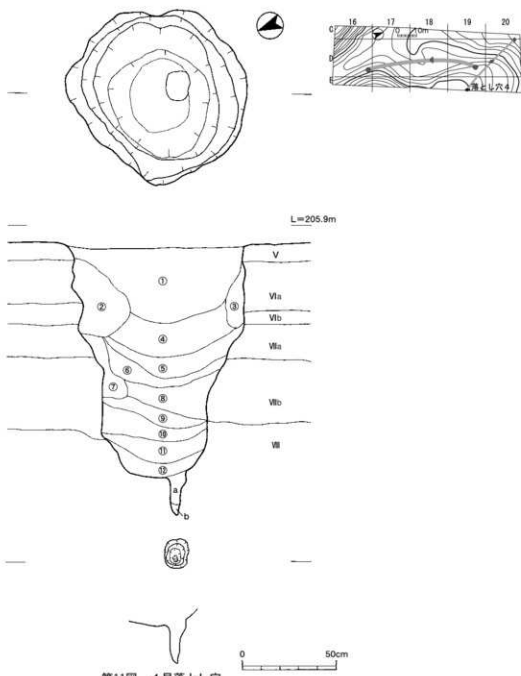
埋土	色調	特徴
①	黒褐色土	硬質砂質土。まばらに黄橙の色のバミス(1mm)混入。
②	黒褐色土	弱粘質土。やや白っぽい粒子と黄橙色のバミス(0.1mm程度)が混在。
③	黒褐色土	②と土質は似ているが、粒子の混入の密度は低い。
④	黒褐色土	弱粘質土。2~4mm大の黄橙色のバミスがまばらに混入。
⑤	黒褐色土	やや硬質土。1~4mm大の黄橙色のバミスが混入。全体的に黄色。
⑥	黒褐色土	硬質土。2~5mm大の黄橙色のバミスが密集して混入。⑤よりさらに黄色い。
⑦	黒褐色土	やや硬質土。1~3mm大の黄橙色のバミスがまばらに混入。
⑧	黒褐色土	弱粘質土。⑦⑧にはさまれ黒っぽさが目立つ。
⑨	黒褐色土	アカホヤに似たバミスとP7に似たバミスが混入。上部から流入。
⑩	黒褐色土	⑨と同様だがややバミスが大きい(3~7mm大)
⑪	暗黄橙色土	壁面のアカホヤが混入し、にじんだ様な黄橙色を呈する部分がある。
⑫	赤褐色土	弱粘質土。全体的にやや赤い。2~7mm大のアカホヤのバミス混入。
⑬	黄橙色土	5~7mm大のP11黄橙色バミスが混入。
⑭	黄橙色土	2~5mm大の黄橙色バミスが密集し、全体的に黄色。
⑮	黄橙色土	硬質土。3~5mm大と2mm大の黄橙色バミスが密集し⑮よりも黄色が強い。
⑯	赤褐色土	弱粘質土。5mm大のアカホヤバミスがまばらに混入し、全体的にやや赤い。
⑰	黒褐色土	やや硬質土。2~3mm大のP7バミスを多く含む、壁面近くに1cm大のアカホヤ。
⑱	黒褐色土	弱粘質土。1cm大と2mm大のアカホヤバミスがまばらに混入。
⑲		1cm大のP11バミス混入。アカホヤのバミスが層に沿うように筋状に堆積。
⑳	赤褐色土	硬質土。P11バミスが密集。やや赤味がかって見える。
㉑	黒褐色土	弱粘質土。黒褐色が強い。
㉒	黒褐色土	弱粘質土。アカホヤ層が筋状に流入。
㉓	暗黄橙色土	多くのバミスが混入。アカホヤの筋状堆積が最も多い。
㉔	黒褐色土	まれに5mm大のバミスが混入。水分も多く含みもろい。
㉕	黒褐色土	やや硬質土。24と近似、バミスの密度はうすく筋状をなさない。
㉖	黒褐色土	粘質土。



第10図 3号落とし穴

第4表 3号落とし穴 埋土観察表

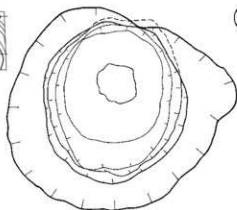
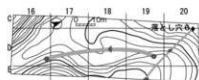
埋土	色調	特徴
①	黒褐色土	弱砂質土。黒色バミスは混ざっていない。
②	黒褐色土	硬質土。III層該当バミス(3~8mm大)混入。
③	黒褐色土	弱粘質土。III層該当バミス(2~3mm大)混入。
④	黒褐色土	弱粘質土。バミスはごく少量。
⑤	暗橙黒褐色土	硬質土。黄橙バミス多、一部ブロックをなす。
⑥	黒褐色土	弱粘質土。少量のバミスを含みやや茶色。



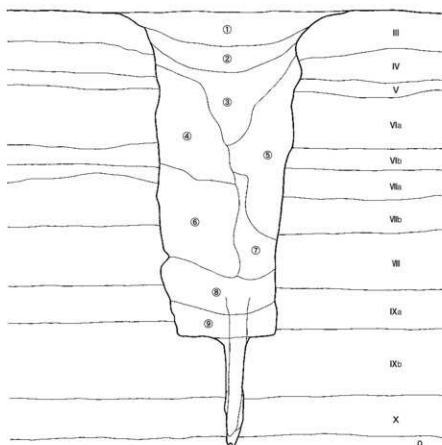
第11図 4号落とし穴

第5表 4号落とし穴 埋土観察表

埋土	色調	特徴
①	黒褐色土	弱粘質土。1～5mm大のバミス（アカホヤ）が全体的に混入しやや淡い黄橙色。
②	黒褐色土	やや硬質の砂質土。3～5mm大の黄橙色のバミスが混入。
③	黒褐色土	2mm大の黄橙色のバミスが混入。
④	黒褐色土	硬質土。混入バミスは2～3mm大でまばら。
⑤	黒褐色土	軟質土。2mm大の黄橙色バミス（アカホヤ）が少量まばらに混入。
⑥	黒褐色土	粘質土。1～2mm大の黄橙色バミスがごく少量見られる。
⑦	黒褐色土	0.5～1cm大のアカホヤバミスが集中。1～3mm大のバミスがまばらに混入。
⑧	黒褐色土	弱砂質土。5～7mm大のバミスが数個混入。
⑨	黒褐色土	弱砂質土。バミスはほとんど混入していない。
⑩	淡黄褐色土	弱砂質土。バミスはほとんど混入していない。
⑪	黄褐色土	弱砂質土。下部に1～2mm大の黄橙色バミスが集中。
⑫	黒褐色土	軟質土。黄橙色のバミス（2～3mm大）がまばらに混入する。



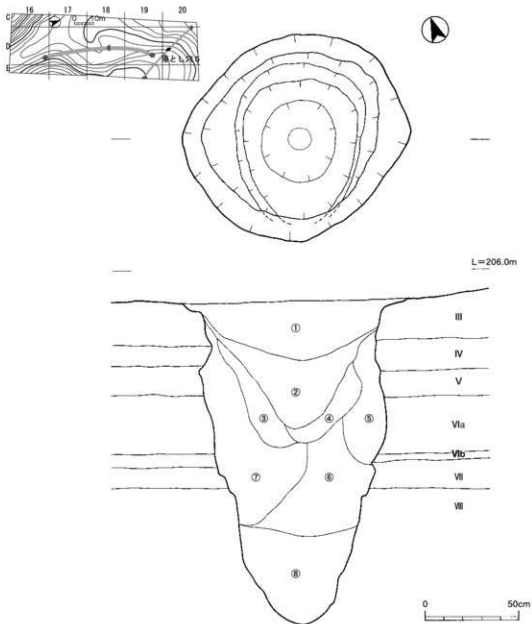
L=206.7m



第12図 5号落とし穴

第6表 5号落とし穴 埋土観察表

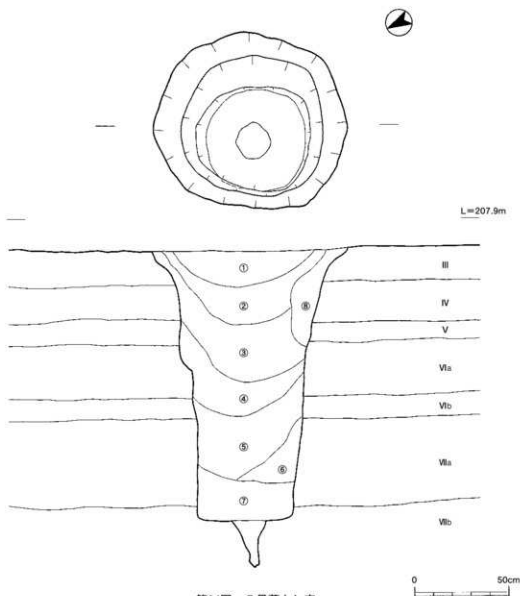
埋土	色調	特徴
①	黒褐色土	軟質土。黄橙色のパミス(2~5mm)が少量混入。
②	黒褐色土	弱硬質土。パミスがほとんど混入していない。
③	黒褐色土	軟質土。P7黄色パミスがまばらに混入。①と似ている。
④	黒褐色土	硬質土。縁にP7パミス, 中央にアカホヤパミスが混入。
⑤	黒褐色土	軟質土。中央部にパミスがまばら。
⑥	黒褐色土	弱硬質土。やや赤味がかっている。全体的にP11パミス(2~5mm大)が混入。
⑦	黒褐色土	弱粘質土。淡い赤橙色をしたパミス(1~2mm大)が少量混入。
⑧	黒褐色土	パミスがほとんど混入していない。
⑨		粘質土。下部に薩摩火山灰が浮いたように混入している部分がある。



第13図 6号落とし穴

第7表 6号落とし穴 埋土観察表

埋土	色調	特徴
①	黒褐色土	1~2mm大のP7パミスが混入。
②	黒褐色土	粘質土。
③	黒褐色土	弱砂質土。3~5mm大のP7パミスがまばらに混入。
④	黒褐色土	5~2mm大の黄橙色パミスが集中。赤褐色のパミスがまだらに混入。
⑤	黄黒褐色土	弱硬質土。2~5mm大の黄橙色のパミス(P7)が散在。
⑥	橙黒褐色土	2~7mm大の赤色パミス、黄橙色パミス散在。下層の一部にアカホヤが混入。
⑦	橙黒褐色土	弱硬質土。P7パミスとアカホヤパミスが混入。
⑧	赤黒褐色土	軟質土。アカホヤパミス(0.5~1cm大)がまばらに混入。



第14図 7号落とし穴

第8表 7号落とし穴 埋土観察表

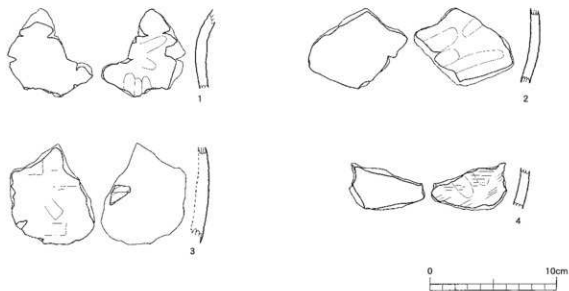
埋土	色調	特徴
①	黒褐色土	硬質土。パミスの混入はほとんど見られない。
②	黒褐色土	砂質土。2mm前後のパミスがまれに混入。
③	灰褐色土	3～5mm大の黄橙色のパミスがまばらに混入。
④	黒褐色土	4～7mm大のパミスがやや密に混入。
⑤	赤褐色土	粘質土。1～5mm大のアカホヤパミスが密に混入。
⑥	黒褐色土	粘質土。2cm大のアカホヤと1～2mm程度の黄橙色パミスが混入。
⑦	黄橙褐色土	2～7mm程大のアカホヤのパミスが密に混入。

(2) 遺物

土器 (第15図 1~4)

1は頸部から口縁部へ至る部位と判断され、外反する形状が読み取れる。外面は風化が著しく、器面調整の観察は困難である。なお、内面に篋状工具による縦位の調整痕がみられる。色調は内外面とも明茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含むが細石もみられる。輪積の痕跡が観察でき、接合面の前後が肥厚して残されている。2は球状の形状から、胴部と判断される。外面は風化が著しく、内面に篋状工具による横位の調整痕がみられる。色調は内外面とも茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含むが細石もみられる。2同様輪積の痕跡が認められる。3も球状の胴部である。器面は外面が風化を受け、内面は剥落し調整痕は観察できない。色調は内外面とも黒茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含むが細石もみられる。4は球状の胴部である。器面は外面に風化を受けた細かい凹凸があり、内面に篋状工具による横位の調整痕と、指圧痕がある。色調は内外面とも暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含む。

この1~4は、焼成がやや弱く、風化痕や胎土からみて同一個体と思われる。なお、土器の形式については、特定できないが、時期は縄文中期と思われる。



第15図 縄文時代中期 土器

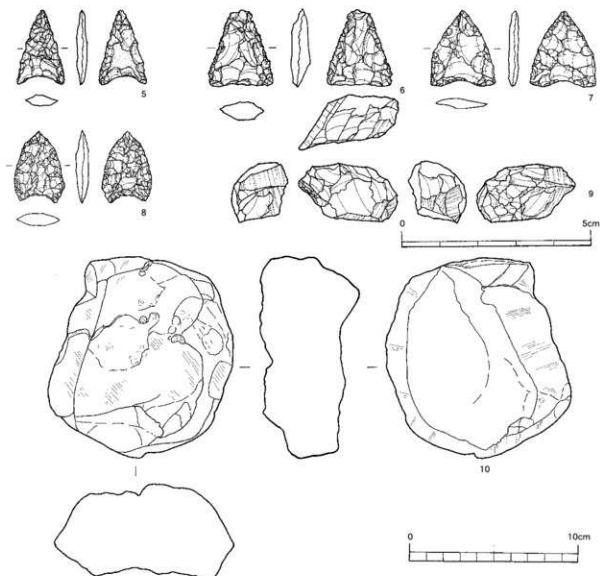
第9表 縄文土器観察表

編年番号	番号	層位	出土区	部位	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土				焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	類	遺物番号	備考
							石英	長石	角閃石	その他						
15	1	IIc, II d	C, D-17, D, E-16, 17	胴	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		やや弱い	縦位の篋状 施文具痕	風化。 凹凸あり	618, 651, 601		
	2	II d	C-17	胴	茶褐色	茶褐色	○	○	○		やや弱い	横位の篋状 施文具痕	風化。 凹凸あり	641, 642		
	3	II d	C-17	胴	黒茶褐色	黒茶褐色	○	○	○		やや弱い	剥離痕	風化。 凹凸あり	638		
	4	II c	D, E-16, 17	胴	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		やや弱い	横位の篋状 施文具痕、 指圧痕	風化。 凹凸あり	一括		

石器 (第16図 5~10)

5は二等辺三角形を呈し、やや抉りのある平基式の石鏃である。石材は大分県姫島産の黒曜石と思われる。片面には自然面が残り、側縁部の整形剥離は両面方向から行い調整している。6は二等辺三角形を呈した平基式の石鏃である。石材は頁岩と思われる。側縁部は小剥離で調整している。7は側縁部が丸みを持ち、やや抉りのある凹式の石鏃である。薄手の剥片を使用している。石材は頁岩である。8は丸みのある五角形を呈し、やや抉りのある石鏃で、石材は黒曜石を使用している。縁部は丁寧な剥離で調整している。9は水晶製品である。水晶を斜めに分割し、上部頂面に打撃痕が残ることから、楔形石器と判断した。

10は落とし穴状遺構の底から出土したもので、表面が剥離された円礫、敲石と磨石の破損品で、石材は凝灰岩である。



第16図 縄文時代中期 石器

第10表 縄文石器観察表

押印 番号	番号	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上 番号	備考
						cm	cm	cm	g		
16	5	石鏃	C-17	IIe	黒曜石	2.00	1.25	0.30	0.48	686	
	6	石鏃	10T	II	頁岩	2.00	1.70	0.50	1.47	114	
	7	石鏃	D-16	IIe	頁岩	2.00	1.75	0.20	0.80	617	
	8	石鏃		IIc	黒曜石	1.90	1.35	0.35	0.68	606	
	9	石鏃	C-17	II	水晶	1.60	2.60	1.55	5.53	621	
	10	敲石				12.00	10.60	5.75	1025.00		落とし穴5内

4 弥生時代

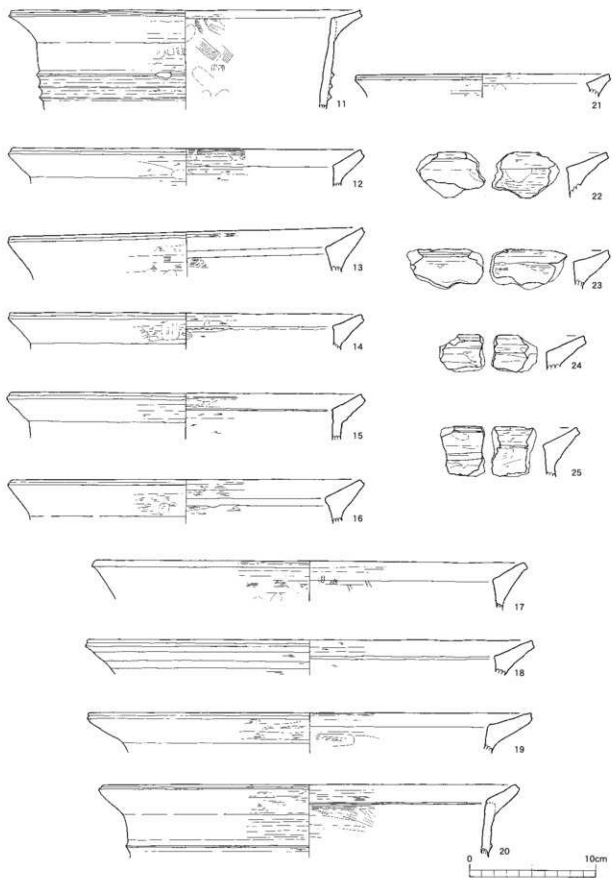
IIc～II d層を包含層とする。遺構は検出されていない。遺物は40点を図化した。

(1) 遺物

土器（第17図・第18図・第19図 11～50）

11～25は甕形土器である。この甕形土器は基本的に「く」の字口縁部をもち、11と20に見るように胴部に三角断面突帯を施している。胎土には石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。

11は鋭角な「く」字状口縁をもち、口唇部にV字状の溝を施し、口縁部の内面は平坦面で頸部への繋ぎは角張っている。胴部には3本の三角断面突帯がみられる。器面調整は篋状施工具による丁寧なナデである。色調は、外面で灰茶褐色に黒斑がみられる。内面は灰茶褐色に一部黒斑がみられる。口縁部の外面には煤が付着していることから、煮炊きに使用されていることがわかる。胎土は茶褐色で、胴部の器壁は薄い。12は口縁部の内面が中に舌状に張り出したもので、口縁部の「く」の角度は鈍角である。器面調整はヘラナデで、色調は茶褐色に暗褐色がみられる。なお、外面に煤が付着している。13は口縁部に厚みがある。色調は内外面とも暗赤茶褐色であり、外面に黒斑がみられる。14は内側に舌状の張り出しがみられる。器面はヘラナデである。色調は茶褐色である。15は口縁部の厚みが無く、色調は赤茶褐色で内面に黒斑がみられる。なお、外面には煤が付着している。16は口唇部の厚みがある。内側へ舌状の張り出しが大きい。17は口唇部で溝の下部に垂れ下りの粘土部がみられる。器面調整は横位のヘラナデで、色調は内面が茶褐色、外面が暗茶褐色である。18は口縁部の外側に輪積の痕跡が残り、内面は平坦面をヘラナデ調整で作っている。色調は内面が茶褐色に黒斑、外面は茶褐色である。19は口唇部がやや立ち上がり口縁部が受け皿状になっている。器面調整はヘラナデで、色調は内面で暗褐色、外面で黒色である。20も口縁部が受け皿状に作られ、横位のヘラナデ調整を施している。色調は内面で暗茶褐色、外面で黒茶褐色である。21は小型のもので、口縁部が短く断面三角形に作られている。器面調整はヘラナデで、色調は茶褐色である。ここまでは何とか直径が出るものであるが、22～25は直径の出ないものの中から特徴のあるものである。22は角々がしっかり作られている。調整はヘラナデで、色調は茶褐色である。23は口縁部が受け皿状である。調整はヘラナデで、色調は暗茶褐色である。24は口縁部がやや長い。器面調整はヘラナデで、色調は赤茶褐色である。25は口縁部が深い受け皿状である。器面調整はヘラナデで、色調は暗茶褐色である。



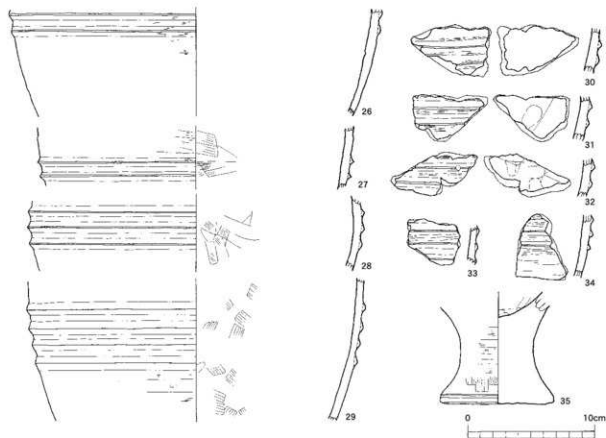
第17図 弥生時代中期 土器 1

26～34は甕形土器の突帯文のある胴部である。器面調整はヘラナデで、胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。焼成は硬質で良い。

26は2本の三角断面突帯を施した胴部で、色調は両面とも茶褐色である。27は2本の三角断面突帯を施した胴部から頸部で、色調は両面とも黒茶褐色である。28は3本の三角断面突帯を施した胴部で、色調は内面が暗茶褐色外面が茶褐色で煤が付着し黒色部もみられる。29は4本の三角断面突帯を施した胴部で、色調は内面が茶褐色で外面が赤茶褐色である。30は3本が確認される三角断面突帯を施した胴部で、色調は両面とも茶褐色である。31は2本の三角断面突帯を施した胴部で、色調は両面とも茶褐色である。32は2本の三角断面突帯を施した胴部で、色調は内面が赤茶褐色で、外面が茶褐色である。33は2本の三角断面突帯を施した胴部で、色調は両面とも暗赤茶褐色である。34は3本の三角断面突帯を施した胴部で、色調は両面とも灰茶褐色で、外面に黒斑がみられる。

35は背の高い充実高台の底部である。器形は筒部中位で細く絞込み底面では広がる。文様は底面の縁上部には沈線が施されている。器面調整はヘラナデで、胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。焼成は硬質で良い。色調は内面が黒褐色で、外面が茶褐色である。焼成は良い。36～44は壺形土器である。器面調整は研磨で、胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。焼成は良い。

36は内向する頸部に近い部分で、三角断面突帯が3本貼り付けられている。色調は両面とも茶褐色である。37は胴部で、三角断面突帯が3本貼り付けている。色調は内面が灰褐色で外面が茶褐色

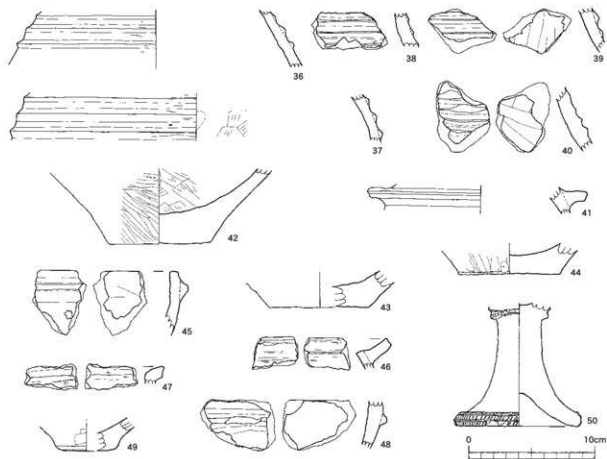


第18図 弥生時代中期 土器2

である。38は内向する頸部に近い部分で、三角断面突帯が3本貼り付けられている。色調は内面が茶褐色で外面は赤茶褐色である。39は内向する頸部に近い部分で、三角断面突帯が2本貼り付けられている。色調は内面が茶褐色で外面は黒赤茶褐色である。40は内向する頸部に近い部分で、三角断面突帯を3本貼り付けられている。色調は内面が灰茶褐色で外面は茶褐色である。41は二重口縁部の一部で、口縁部に回る下部の鐮状の部分と思われる。色調は暗茶褐色である。38は平底の底部である。外器面は篋による研磨で斜めに施されている。内面は粗いヘラナデで凹凸が残る。色調は外面が暗赤茶褐色であるが一部に黒斑がみられる。内面は暗茶褐色である。39は平底の底部である。内外面は風化で凹凸が残る。色調は外面が暗赤茶褐色に黒斑がみられる。40は平底の底部である。外面はヘラナデで、内面は粗いヘラナデで凹凸が残る。色調は外面が茶褐色で、内面が暗茶褐色である。

45～49は鉢形土器である。器面調整はヘラナデで、胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。焼成は良い。

45は口縁部が直に立ち上がる器形で、口縁部近くに断面M字突帯を施している。色調は両面とも赤茶褐色である。46は受け口状の口縁部で、色調は両面とも赤茶褐色である。47はL字状の口縁部で、色調は両面とも赤茶褐色である。48は胴部付近に断面四角状突帯を廻らしている。色調は両面とも茶褐色である。49は平底の底部である。色調は両面とも赤茶褐色である。



第19図 弥生時代中期 土器 3

50は高坏の脚部である。坏部と脚部の境と脚部の縁に刻み目突帯を施している。境部のものは一条の刻み目突帯で、縁部は上部に刻み目突帯を一条施し、1本の細い沈線の上段と下段に斜状気味に刻み目を施している。色調は茶褐色で裾部の一部に黒斑がみられる。器面は風化が進み凹凸がみられる。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。

第11表 弥生土器観察表

編号 番号	器形	出土区	部位	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土				焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	期	遺物番号	備考
						石英	長石	角閃石	その他						
17	11	IIc, IIe	D, E-16, 17	口縁 ~刻	灰茶褐色 (黒斑)	灰茶褐色 (黒斑)	○	○	○		良	篋状施文具による丁寧な削りで 三内無面突起	篋状施文具による丁寧な削りで、 三内無面突起	524 532 535 一括	山ノ口式、 底有り 口径27.2cm
	12	II	C-7	口縁	茶褐色	暗褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	525 389 461	底有り 口径22.0cm
	13	II	C-7	口縁	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	270	口径22.0cm
	14	II	10T C-7	口縁	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	413 293	口径27.6cm
	15	II	C-7	口縁	赤茶褐色 (黒斑)	赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	269 278 285 304	底有り口径 27.6cm
	16	II	C-7	口縁	暗赤褐色	暗赤褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	240	口径22.0cm
	17	II	C-7	口縁	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		良	横位ヘラナデ	横位ヘラナデ	402	口径29.0cm
	18	II	C-7	口縁	茶褐色 (黒斑)	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	輪研み痕	192	口径33.3cm
	19	II e	?	口縁	暗褐色	黒色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	512	口径28.0cm
	20	II e	D, E-16, 17	口縁	暗赤褐色	黒茶褐色	○	○	○		良	横位ヘラナデ	横位ヘラナデ	538 541 一括	口径28.0cm
	21	II	C-7	口縁	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	305 443	口径22.0cm
	22	II	C-8	口縁	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	481	
	23	II	10T, C, D-7	口縁	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	106	
	24	II	D-7	口縁	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	156	
	25	II	C-19	口縁	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	480	
	26	II	10T, C, D-7	胴	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	56 103 128 132 139 231	山ノ口式 胴径24.6cm
	27	II	C-7	胴	暗茶褐色	黒茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	66 299 315 355	胴径24.0cm
	28	II	C-7	胴	暗茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	169 189 226	底有り 胴径24.8cm
	29	II	10T	胴	茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	63 64 304 372 273 356 553 一括	胴径24.6cm
	30	II	C-7	胴	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	163 186	
31	II	C-8	胴	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	331	底径9cm	
32	II	C-9	胴	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	275 284		
33	II	C-10	胴	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	214 224		
34	II	C-11	胴	灰茶褐色	灰茶褐色 (黒斑)	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	408		
35	II e		底	黒褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 縁に沈線	573	底径9cm	
19	36	IIc, IIe	D, E-16, 17	胴部 付文	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	研削	539 一括	
	37	II	C-4	胴	灰褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	502	
	38	II	B-8	胴部 付文	茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	437	
	39	II e		胴部 付文	茶褐色	黒赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	506	
	40	II	C-8	胴部 付文	灰茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	175	
	41	II c	D, E-16, 17	口縁	暗赤褐色	暗赤褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ, 三色無面突起	一括	
	42	II e		底		暗赤茶褐色 (黒斑)	○	○	○		良	粗いヘラナデ	ヘラ研削	514	底径3.1cm
	43	II	C-7	底	に広い黄粒	暗赤茶褐色 (黒斑)	○	○	○		良	風化、 凹凸あり	風化、 凹凸あり	320	底径0.9cm
	44	II	B-7	底	暗赤褐色	茶褐色	○	○	○		良	粗いヘラナデ、 凹凸あり	ヘラナデ	449	底径1.1cm
	45	表土	B, C-5, 6	口縁	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	断面M字突帯	一括	
	46	II	C-7	口縁	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	断面M字突帯	183	
	47	II	B-7	口縁	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	断面M字突帯	450	
	48	表土		胴	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	断面H内突帯		
	49	II	D-8	底	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		良	ヘラナデ	ヘラナデ	489	底径4.2cm
	50	II e	B-19	脚	茶褐色	茶褐色 (黒斑)	○	○	○		良	風化、 凹凸あり	風化、 凹凸あり	573	底径10.1cm

5 古墳時代

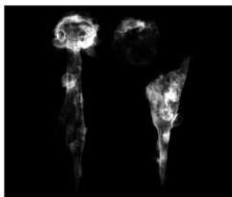
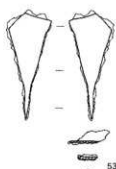
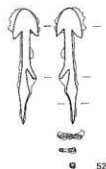
IIc層を包含層とする。遺構は検出されていない。遺物は3点を図化した。

土器 (第20図 51)

51は甕形土器の底部である。色調は両面とも茶褐色で内面に黒色部が残る。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。器面調整はヘラナデである。

鉄製品 (第20図 52・53)

52は二段反し鐵で先頭部に両反しがあり、下段に片逆刺のある鐵鐵である。先端部は欠損しているが断面は平坦で、矢柄部は方形断面である。53は現状では菱形を呈しているが、先端が腐食や欠損で判断がつかない。可能性としては刃部が平坦か凸形の圭頭鐵鐵とおもわれる。断面は平坦で、矢柄部は方角断面である。

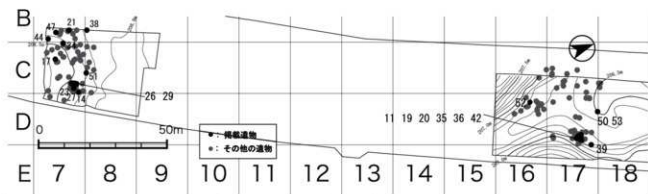


第20図 古墳時代 遺物

第12表 古墳時代 遺物観察表

採回 番号	番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	類	遺物番号	備考
					(内面)	(外面)	石英	長石	角閃石	その他						
20	51		C-7, C-8	胴~ 底	茶褐色	茶褐色	○	○	○		真	ヘラナデ	ヘラナデ		301, 427	底径6.0cm

採回 番号	番号	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上 番号	備考
						cm	cm	cm	g		
20)	52	鉄鐵	D-16	IIc	鉄	9, 10	2, 40	0, 30	8, 57	622	
	53	鉄鐵	D-16	IIe	鉄	8, 80	3, 60	0, 50	15, 32		573に伴う



第21図 弥生・古墳時代 遺物出土状況

6 古代、中・近世

遺構は、古代から中世の溝状遺構・古道跡・畝状遺構・土坑が検出されている。遺物は土師器、軽石製品が出土している。

(1) 遺構

北側のCD-16～20区で溝状遺構2条，古道跡12条，畝状遺構43条が検出されている。南側のBC-3～4区で古道跡7条，土坑1基が検出されている。

溝状遺構（第22図 溝1～7）

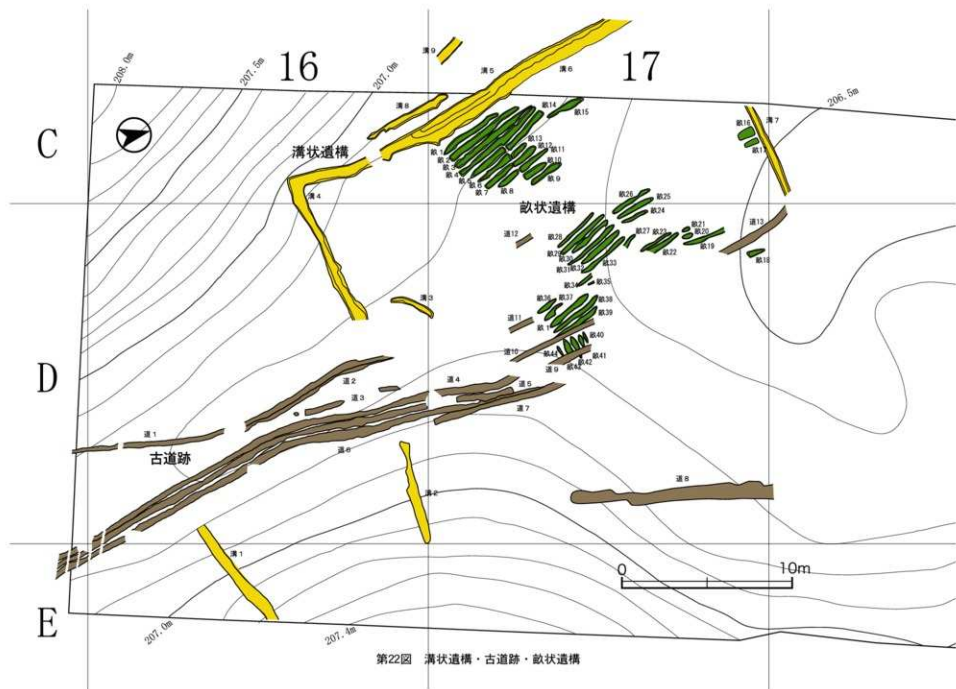
CD-16～18区で検出されている。溝4～7は，平坦な低地端部で26×13mの長方形の一部を残す形で検出されている。検出状況から長方形と判断した。検出面での幅は60～80cm，深さは4～10cmである。断面形は箱型である。CD-16～20区の原地形は北側の平坦な低地から南側に谷底状に緩斜面が走り，その東西は傾斜面を形成している。北側の低地を方形に囲むように溝状遺構が廻り，その内側には連続する短い畝状遺構が検出されている。形状及び畝状遺構の検出状況から，区画溝であったと考えられる。また，溝1・2の2条は東西軸で，谷底状の地形に直交する形で検出されている。

古道跡（第22図 道1～13，第23図 道14～20）

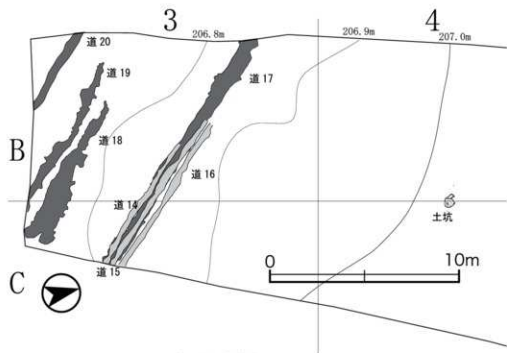
厚みが2～4cmの硬化面を伴い，2か所から検出されている。DE-16～18区では，南から北方向に谷底上を降るように，道1～7が南北軸で検出されている。同じく南北軸である溝状遺構の東側から繋ぐような形態である。道1～7の延長線上で，道9～13が検出されている。BC-3区では，道14～20がコンターラインと平行に東西に横断する形で，検出されている。道14～16は道17の直上で検出されている。また，道14～16の幅が30cm程であるのに対して，道17～20の幅は，50cm程と違いがみられる。

畝状遺構（第22図 畝1～44）

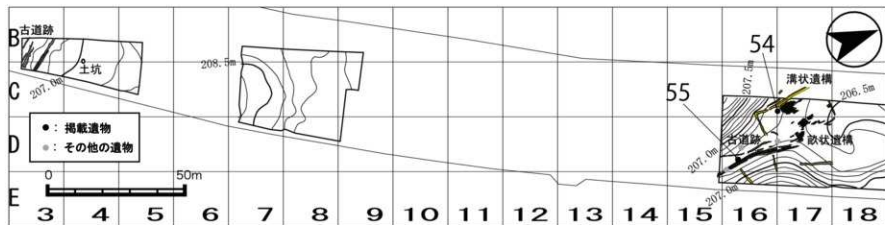
CD-17区で検出されている。長さは2～6mで，4m弱のものが多し。検出面での幅は20～40cm，深さは4～6cmである。断面形は隅丸の箱型である。畝1～39は，ほぼ南北軸であり，うち38条は同じく南北軸である溝状遺構に囲まれた区画内から検出されている。畝16と17は，溝7に切られる形で検出されている。畝40～44の5条は区画外から，ほぼ東西軸で検出されている。



第22図 溝状遺構・古道跡・畝状遺構



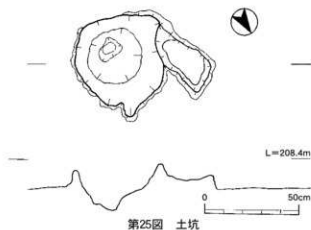
第23図 古道跡



第24図 古代・中世 遺構配置図

土坑 (第25図)

B・C-4区で検出された。検出面はIIa層である。埋土は、やや灰褐色で光沢のある硬化した黒褐色土である。赤色土も少量みられるが、炭化物・焼土とも見られなかった。

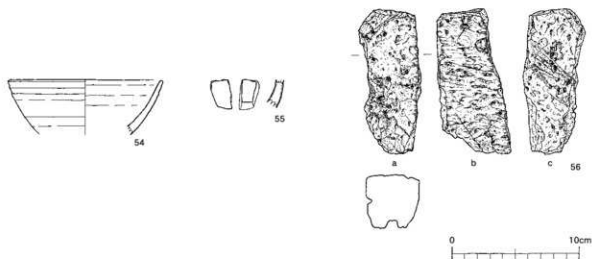


(2) 遺物

遺物 (第26図 54~56)

54は白磁で、12cmの口径をなしている。55は青磁で、胴部下半と思われる。

56は軽石製品の一部である。調整は左右両面にある。a面は被熱がみられ、黄色及び茶褐色を呈する。b面は割れた状態で、面取りが雑である。c面は面取りの後の凹みが3条みられる。主な使用面はa面であると考えられる。



第26図 中世 遺物

第13表 中世 遺物観察表

神岡 番号	番号	層位	出土区	部位	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土				焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	粗	遺物番号	備考
							石英	長石	角閃石	その他						
25	54	II a	D-6	口径~胴	黄灰	灰					良				630	白磁, 口径 12.3cm
	55	古道跡	B-3	胴	オリーブ灰	オリーブ灰					良				608	青磁
神岡 番号	番号	器種	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	取上 番号	備考					
25	56	軽石製品			軽石	12,00	10,60	5,75	80,00	136						

6 まとめ

縄文時代

遺構は、落とし穴7基で、円形の大型と小型がある。

1～3号は大型で上位はラップ状に開き、下位は円筒状に掘り込まれている。4～6号は1～3号と比べると、若干小型であるが、上位がラップ状を呈し、下位は筒状を呈していて基本的には同一である。一方、4号、5号、7号の底面には、1本ずつの小ビットが確認され、逆茂木痕の可能性も残されている。地形的には傾斜面を使い大型及び小型それぞれの3基が2列南北方向に設置されている。桜島起源のP7(約4200BPY)が埋土の上部に混入していることから、縄文時代中期以降と判断している。

土器は小破片であり、量も限定され、また、文様も特定できないことから、明確な帰属はできない。ただ、出土位置が、P7の散布レベルより上位であることから、縄文時代中期以降と判断することは可能である。石器は4号落とし穴に礫石器が1点出土しているほか、石鏃が包含層中から出土している。

第14表 縄文時代 落とし穴観察表

	出土区	検出面	平面形状	直径	検出面からの深さ	底面形状	小ビット
1号落とし穴	D-16	Ⅲ層	円形	188	192	円形平坦	なし
2号落とし穴	D-18	Ⅲ層	円形	167	206	楕円平坦	なし
3号落とし穴	D-19	Ⅲ層	円形	190	186	半球状	なし
4号落とし穴	E-19	V層	円形	96	122	半球状	1基
5号落とし穴	D-20	Ⅲ層	円形	110	172	円形平坦	1基
6号落とし穴	C・D-20	Ⅲ層	円形	110～120	172	半球状	なし
7号落とし穴	B-3	Ⅲ層	円形	96～106	142	円形平坦	1基

単位：cm

弥生時代

遺構は検出されていないが、山ノ口式土器の甕形土器、壺形土器、高環が出土している。出土量は少なく、出土範囲も限定される。なお、推定復元に図化した甕形土器の口径が同一なものが存在することから、個体数の絞り込みは可能である。

古墳時代

成川式土器の甕形土器と、鉄鏃が出土している。

古代・中世

遺構は、北側調査区で溝状遺構が長方形に囲み、その中に畝跡が検出されている。また、それに繋ぐように数条の古道が重なり、畝の形態の一部が検出されている。なお、この古道からは青磁片が出土している。南側調査区では、東西に横断する古道が7条検出されている。

椿 山 遺 跡

第2節 椿山遺跡

1 発掘調査の方法

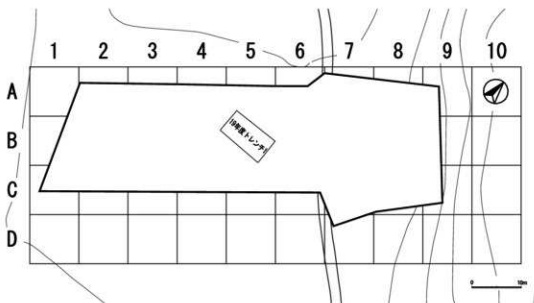
椿山遺跡は、標高約200mの馬の背状の台地上に立地し、宮ノ本遺跡、加治木堀遺跡の南側に位置する。

確認調査は平成19年6月11日から7月2日（実働10日）まで実施した。調査対象面積が1,520㎡と比較的狭いため、確認トレンチ（10×4 m）を1か所設定した。調査面積は40㎡、調査延面積は75㎡である。調査は重機で表土を除去し、その後人力による掘削を行った。調査の結果、IV層から弥生時代中期の遺物が出土し、トレンチ内の一部に集中して確認された。

椿山遺跡の本調査は平成20年9月1日から平成20年11月27日（実働46日）まで実施した。

調査区（グリッド）はセンターライン上の「STA59+20」と「STA59+60」を結ぶ直線をもとに設定した。10m間隔のグリッドとし、南側から北側に向かって1, 2, 3…、西側から東側に向かってA, B, C…とした。本遺跡の調査表面積及び延べ面積は、1,288㎡である。

調査の結果、縄文時代後期の落とし穴I基を検出し、Va層から縄文時代後期、IV層からは弥生時代中期の土器、Ⅲ層上面では古代以降の溝状遺構と道跡を検出している。また、Ⅶ層（アカホヤ火山灰層）より下位の層については確認トレンチによる調査を行い、その結果から全面調査を行っていない。



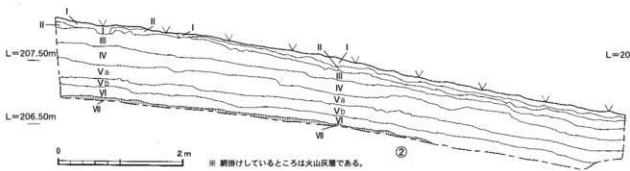
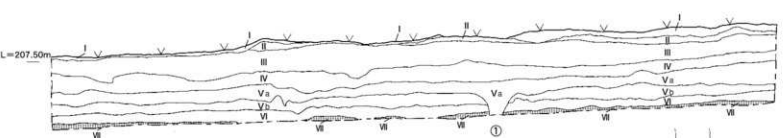
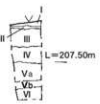
第1図 確認トレンチ及びグリッド配置図

2 層位

層位については、I層（表土）を剥ぐと斜面状の地形では安永ボラに比定される白色軽石が残されているが、平坦地ではⅡ層やⅢ層が次落し、IV層やV層が現れるところもある。主な遺物包含層はIV層（明黒褐色土）で弥生時代の遺物が包含され、Va層が縄文時代後期の遺物包含層である。以下に本遺跡で確認された各層について順に述べる。

VVVV	
I層	表土
II層	白色軽石 安永時代(1779年)
III層	黒色土
IV層	明黒褐色土 弥生時代の遺物を含む
Va層	黒茶褐色土 縄文時代前期の遺物を含む
Vb層	茶褐色土 佐島起層のP7と呼ばれる火山灰層を含む(約4200年前)、硬質の土層で厚さ10cm程度である。
VI層	黒褐色土 やや粘質のある土層
VII層	黄褐色火山灰土 逆斜り方赤や火山灰層、黄褐色土層の下部にわたって火山灰土、土はほとんど見られなかった。
VIII層	黒褐色土
IX層	黒褐色土 粘質の粘土を含む。
X層	褐色土 佐島起層のP18を含む
XI層	黄褐色土 /穴などのみしれこ。
XII層	黄色火山灰土 佐島起層の逆層火山灰層もしくはP14と呼ばれる火山灰層
XIII層	黒褐色土 粘質のある土層、いわゆるチヨコ層とよばれる。
XIV層	黄褐色土 粘質のある土層
XV層	茶褐色土 粘質の軽石が混じる粘質のある土層
XVI層	明褐色土 粘質の土層、佐島起層のP19を含む
XVII層	褐色土 粘質の土層、P18やP15やP17の赤色土層より粘が大さい、5~10cm穴が掘りこえる。
XVIII層	明黄褐色土 佐島起層のP17を含む。
XIX層	黄褐色土 粘質のある砂質の土層、シラスの上位層

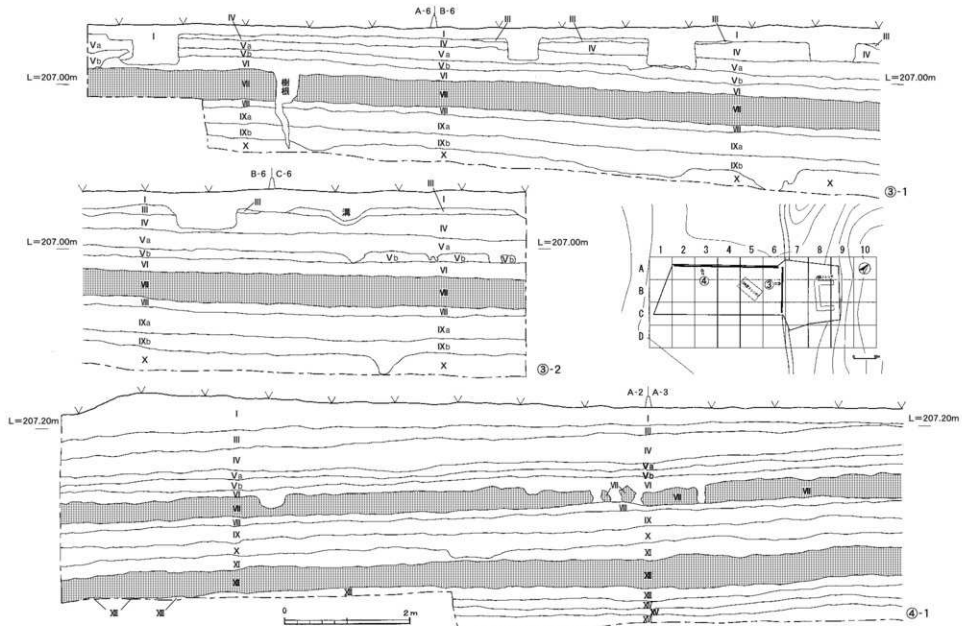
※ 裏面付けしてあるところは遺物を含む層である。



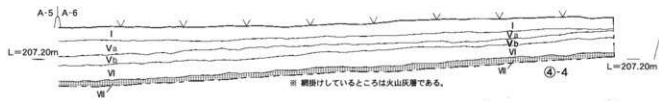
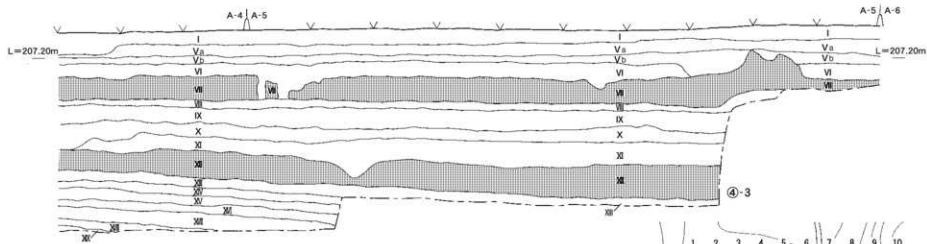
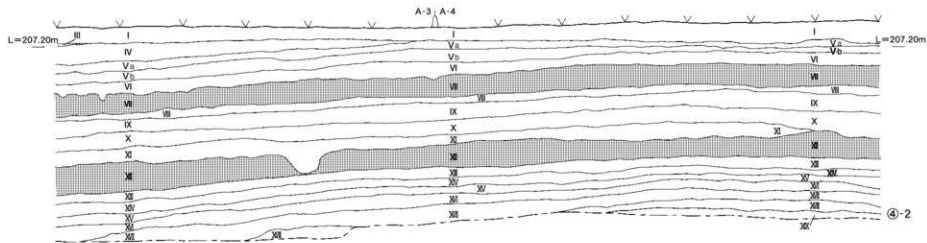
※ 裏面付けしてあるところは火山灰層である。

第3図 土層断面図(1)

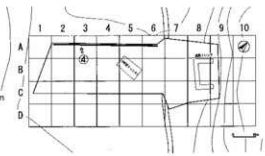
第2図 樽山遺跡土層図



第4図 土層断面図(2)



※ 網掛けしているところは火山灰層である。



第5図 土層断面図(3)

3 縄文時代・弥生時代の調査

(1) 概要

確認調査でIV層に弥生時代の遺物が包含されることは判明しており、下位層から落とし穴状遺構1基、Vb層から土坑1基検出された。遺物はIV層から弥生時代の土器が、Va層から縄文時代後期該当の土器が出土した。

(2) 遺構

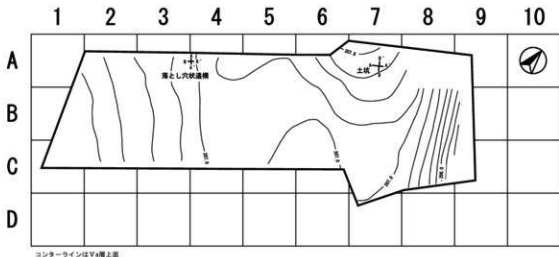
落とし穴状遺構は、調査区のA-3～4区で検出し、土坑はA-7区で検出されている。いずれも遺構内の埋土の状況から、縄文時代中期・後期に該当する遺構と判断する。

ア 落とし穴状遺構（第8図）

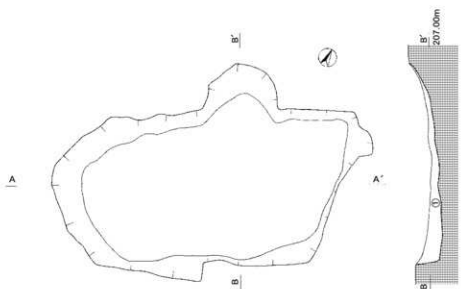
A-3～4区のⅧ層で検出された。平面プランは長径95cm、短径90cmの円形で、検出面から床面までは133cmである。掘り込み形状は円筒形状で、底面は平坦面をなして円形である。底面の中央から北西よりに、直径8cm、深さ55cmの小ピットを1ヶ所確認し、垂直よりほんの少し南東側に傾いて掘りこまれ、この小ピットはこれまでの調査成果も含め、逆茂木痕と想定している。遺構の最上部を桜島起源のP7を埋土することから縄文時代中期に比定できると判断している。

イ 土坑（第7図）

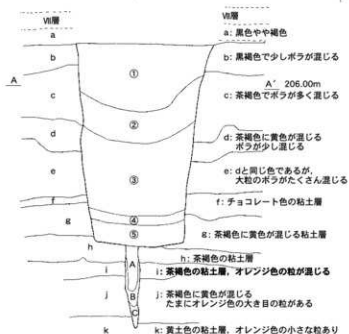
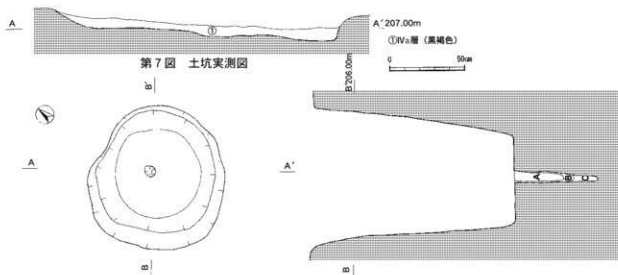
A-7区のVb層で検出された。平面プランは長径210cm、短径145cmの不定形で、検出面からの深さは18cmと浅い。底面は西側が高く東側に低い傾斜を持ち不定形である。埋土はVa層（縄文時代後期の遺物包含層）である。周りには桜島起源のP7が部分的にはっきり見られ、床面には同噴出物P7が混ざり固められている。検出面と埋土の関係から、縄文時代中期・後期に該当すると思われる。



第6図 縄文時代 遺構配置図



第7図 土坑実測図



第8図 落とし穴状遺構実測図

- ① P 7の粒が多めに混じる。ところどころ大きな粒も見られる茶褐色土。
- ② ①の層よりもP 7の粒が少なく、黒褐色土。
- ③ 茶褐色の土であるがP 7は見られない。まだらに黒色が強い部分もある。
- ④ 明褐色の土
- ⑤ 黒色の強い褐色の土

A 茶褐色と黒色の土が混じる。底の一部は黒色の割合が高い。上部の一部は黒色はやや薄く灰色に近い。またやや硬い。

B 茶褐色の土であり、両側のVII層やVIII層と比べぼろぼろとくずれる。

C 両脇の土 (VII層) と同じ褐色の土だが、緑がきれいな茶色の線で区切られている。押すと柔らかく、明らかにVIII層と違う土である。内部の土の色は灰色が混じる。緑の茶色の線は距離を近くにして見ると二重層になっているところがある。一部、木の皮っぽく見えるものが付着していた。

0 50cm

(3) 遺物

縄文時代土器（第9～10図1～7）

縄文時代中期及び後期の土器が出土している。1, 2は中期で, 3～7は後期に比定できる。

1は口唇部が欠損しているが, 胴部から直直し, やや内向する口縁部を持ち, 広い平底の深鉢形土器である。外面の器面調整は貝殻条痕で胴部上半が横位, 下半は縦位に施されている。文様は口縁部から胴部にかけて, 凹線文が渦巻き状と三角状に施されている。内面の器面調整は上部が横位と縦位で, 下部は横位に貝殻条痕が施されている。底面には網代痕が見られる。また, 特徴として, 土器製作時に外面の凹線文を施すときに, その施文の反作用で内面が凸状に突出することである。外面で丁寧に条痕仕上げが認められるが, 内面は輪積みの接合が肥厚したまま残されることからいびつな形状となっている。2は凹線文を横位に施した深鉢形土器で, 器面は丁寧にヘラナデ調整である。3は沈線文を横位に施した深鉢形土器で, 一部, 斜位の沈線が重なっている。器面はヘラナデ調整である。4は沈線文を横位と縦位にクランク状に施した深鉢形土器で, 器面はヘラナデ調整である。5は条痕を横位に施した内向する深鉢形土器である。6は貝殻条痕を横位に施した深鉢形土器の胴部である。7は底面が比較的狭い深鉢形土器の平底で, 器面は丁寧にヘラナデ調整を上下に施している。

石器（第11図 8～9）

8は表土で採集されたもので, 摘み部が欠損した横型石匙である。石材はたんぱく石で, 形態は横割ぎの剥片を三角形にしたもので, 中央部が厚い。刃部は交互剥離で形成し, 一部は欠損している。9はVa層から出土したもので層位的には縄文時代中期以降の石鏃である。形状は五角形で, 石材は不純物の少ない黒曜石である。刃部は丁寧に剥離で形成している。

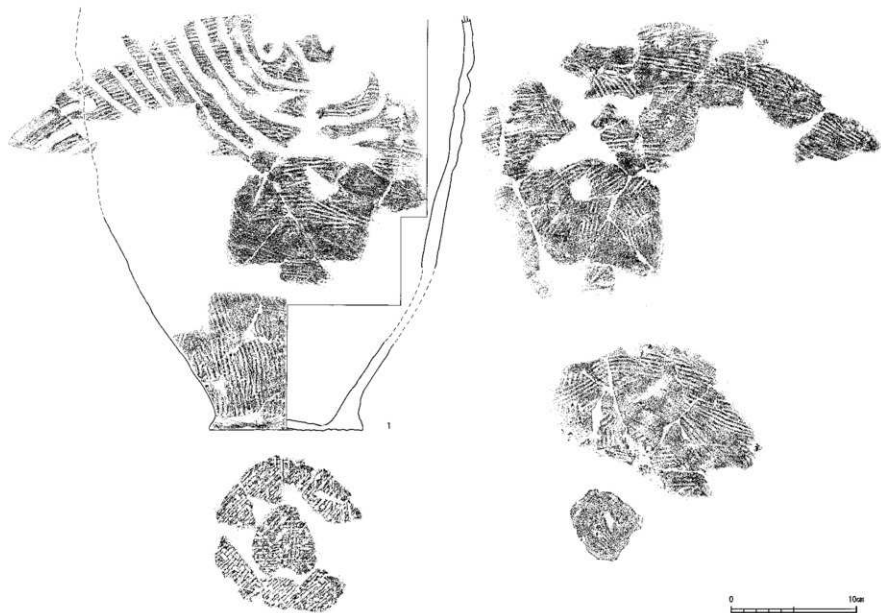
弥生時代土器（第10図 10～11）

10はL字口縁部と充実高台を持った甕形土器である。口縁部はやや厚く丸みを形成したもので, 口縁部外面に浅い沈線が施している。肩部に3本の断面三角突帯を横位に施し, 底部は細く締まり, 底面にかけて広がる平底である。縁部には沈線が施されている。口径29.0cm, 高さ32.6cm, 底部径8.1cmである。弥生時代中期前半のものと思われる。11は平底の底部で, 器形は壺形土器である。胎土は細かい粘土と赤石混じりである。なおこの種の胎土は, 宮崎平野南部から都城盆地に分布することが知られている。器面調整はヘラナデである。焼成度は軟らかい。時期の特定はできていない。

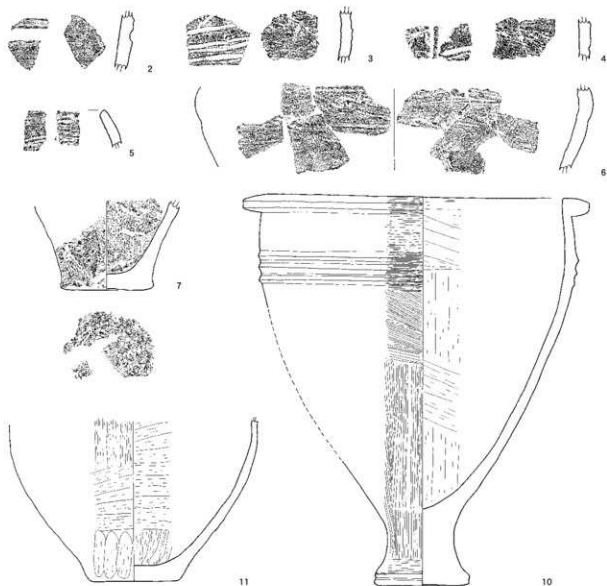
第1表 榑山遺跡土器観察表

榑山遺跡 番号	掲載 番号	層位	部位	出土区	色調		胎土				焼成	遺物番号	備考
					内	外	石英	長石	黒色鉱物	その他			
9	1	Va	完形	B-2	明赤褐	明赤褐	○	○	○	ウ	良	22 23 29 39 43 46 50 70	
	2	Va	胴部	C-2	暗茶褐	黒褐	○	○	○	火, 赤	良	4	スス付着
	3	Va	胴部	A-2	にぶい黄褐 黒	暗茶褐	○	○	○	火	良	134	スス付着
	4	Va	胴部	A-2	にぶい黄褐 黒	にぶい黄褐	○	○	○	火	良	133	
	5	Va	口縁	A-2	黄灰	橙	○	○	○	火	良	140	
	6	Va	胴部	B-3	黒褐	にぶい褐	○	○	○	火, 赤	良	70 72 73	
	7	Va	胴～底	C-2	橙 黒	明赤褐	○	○	○	赤	良	一括	
	10	III, IV	完形	1T B-5	明赤褐	赤褐	○	○	○	ウ	良	16 27 28 112 115 117 128	スス付着
	11	III	胴～底	B-7	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	火, 赤	良	144	

※ 胎土について 石英はクリスタル光沢, ところどころとした表面のもの, 長石は透明でヒビ, 面に入ったもの・ナガラガラス・光沢のある白色のもの, 内角石と輝石をまとめて黒色鉱物とした。
その他は, ウ→黄母, 火→火山ガラス, ナ→ナタン鉄鉱, 黒→磁鉄鉱, 赤→赤色小礫, 灰→灰色小礫



第9圖 縄文時代 土器



第10図 縄文時代・弥生時代 土器



第11図 縄文時代 石器

第2表 樽山遺跡石器観察表

挿図 番号	番号	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上 番号	備考
						cm	cm	cm	g		
10	8	石匙	—	表採	たんばく石	2.30	3.55	0.90	5.97	—	
	9	打製石鏃	C-6	V a	黒曜石	1.95	1.25	0.35	0.75	130	

4 古代以降の調査

(1) 概要

古代以降の遺構は、Ⅲ層上面を中心に溝状遺構2本と道跡2条を検出している。遺構内には遺物等は含まれていなかった。

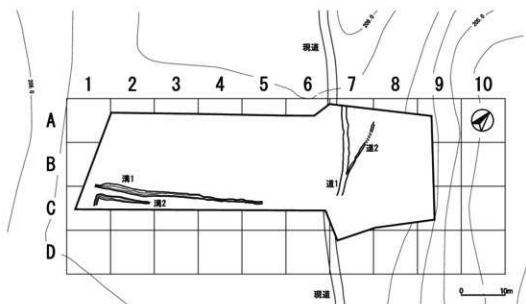
(2) 遺構

ア 溝状遺構

溝状遺構はB～C-1～5区で2本検出される。溝1はB～C-1区からC-5区まで伸び、幅は25～150cm、深さ15～30cmで東西方向に57m伸びている。レベルは西から東に向けて上がっていく。東側は浅く幅狭になるが、これは、Ⅲ層自体が削平を受けて、溝も削平を受けている可能性がある。溝内の埋土は共通して、上層が黒色の土で粘り気のある粘土質で少し砂が混じっており、中層が少し茶褐色の粒が混じり、底面に近い下層は黒色の土に茶褐色の粘土質が混じる状態である。溝2はC-1区～C-2区まで伸び、幅は40～75cm、深さ2～11cmで浅い。また、C-1区付近で南方向に屈曲している。

イ 道跡

道跡はA～C-7区のⅢ層上面で2条検出される。Ⅲ層は表土から浅く、場所によっては検出されないところもあるので、本来残っていたはずの遺構が途切れている可能性がある。道1は幅75cmで現道に並行するように30mほど伸びる。現道とのレベル差が10～20cmなので、遺構はそれほど古くないと思われる。道2は道1の下部から北方向に20m伸びる。道幅は30cmと狭い。



第12図 溝状遺構・道跡配置図

5 まとめ

椿山遺跡の遺物総点数は177点である。出土地点は数か所に集中しており、時代も縄文時代と弥生時代に特定される。遺構については、1基検出した落とし穴状遺構の残存状況が極めて良好で、調査範囲外にも分布する可能性も高い。調査から得られた資料からは、生活跡としての色彩は少なく、落とし穴の存在も含め、狩場として機能した可能性が高い。

柿木段遺跡

第3節 柿木段遺跡

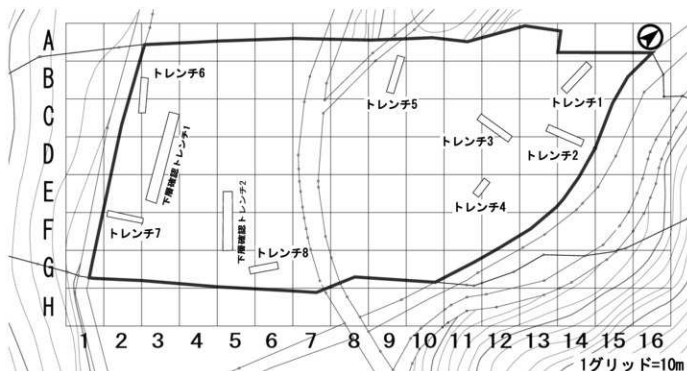
1 発掘調査の方法及び層位

(1) 発掘調査の方法

柿木段遺跡は標高150mの小さな谷の窪地とその下部にある標高145mのやや広い谷の平坦部からなる。平成13年度に試掘調査を実施している。確認調査は平成19年7月4日から7月27日（実動15日）まで実施し、確認トレンチ（10m×2m）を8か所設定した。調査面積は160㎡、調査延面積300㎡である。調査は、重機で雑草・雑木の除去を行ったあと、表土を除去し、その後人力による掘削を行った。その結果、縄文時代後期末から晩期にかけての土器や石器と古代の土師器・須恵器が出土した。

本調査は、平成20年5月22日～平成21年3月19日までの約10ヶ月間（実働155日間）実施した。調査区（グリッド）はセンターライン上の「STA41+20」と「STA41+60」を結ぶ直線をもとに設定した。10m間隔のグリッドとし、西側から東側に向かって1, 2, 3…、北側から南側に向かってA, B, C…とした。本遺跡の調査表面積は4,901㎡、調査延面積は7,350㎡である。

旧地は主に畑であり、調査は重機による表土除去から開始し、表土は農地改善事業による造成土、II層は周辺台地及び上流からの流入土で形成され、その流入土間に中世及び古代の遺物が出土している。このことは、遺跡が谷状地形にあるため、台地上から流れ込んだ土砂等が厚く堆積していることに起因する。表土から遺物包含層まで浅いところで100cm程度、深いところでは200cmを超え、古代・中世の遺物はII層からIII層で、弥生時代から縄文時代晩期の遺物はIII層下部からIV層中に出土している。また、VI層より下位の層については数箇所の確認トレンチによる結果に基づき、調査は行っていない。



第1図 確認トレンチ及びグリッド配置図

(2) 層位

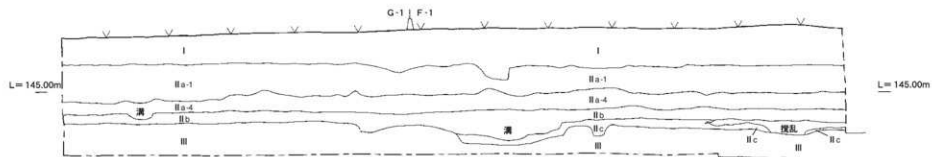
柿木段遺跡の層位は、北東に位置する椿山遺跡、南に位置する石縷・十三塚遺跡の層位とは若干異なる。椿山遺跡以北では桜島起源のP7は少し見られるが、柿木段遺跡では見られない。また、石縷・十三塚遺跡と比べ、II層が厚く堆積しており、場所によっては2mを超えている。当初、細かく分層を試みたが、ところどころ分層不可能なところもある。場所によっては、変わり目を判断するところが難しい。以下に、柿木段遺跡で確認された各層について順に述べる。

V V V

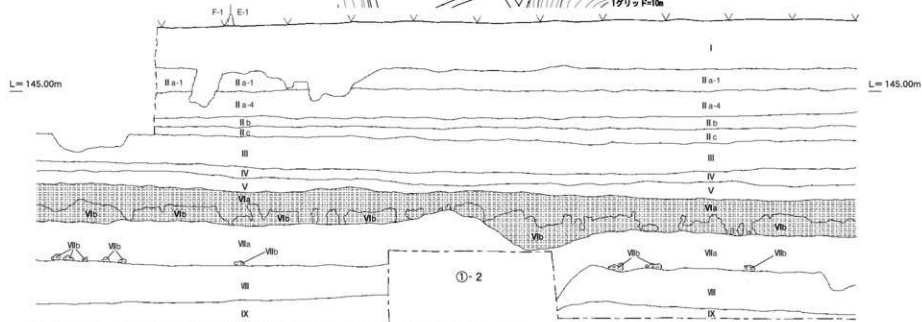
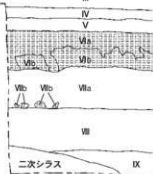
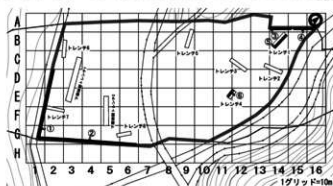
I 層	暗褐色土 現表土
IIa-1層	暗茶褐色土 やや硬質である。白軽石が混じる。
IIa-2層	暗灰褐色土 白軽石は少量。1～1.5cmのものはところどころ見られる。場所により分層不可能なところもある。
IIa-3層	黒褐色土 弱粘質の土層。場所により検出できないところもある。(場所によりIIa-1～IIa-4まで「IIa層」とまとめて土層断面を実測してるところもある)
IIa-4層	暗黄茶褐色土 やや黄味がかかった茶色の土層。本遺跡において主に中世の包含層である。
IIb 層	暗黄褐色土 砂質の土層。黒に近い。白軽石は少量。
IIc 層	黒褐色土 本遺跡において主に古代の遺物包含層である。古道「硬化面」や溝跡はこの層かIIb層で検出されている。IIb層に比べ黒色が強い。
III 層	暗茶褐色土 本遺跡において主に弥生時代～古代の遺物包含層である。砂質の混じる土層。
IV 層	黒褐色土 本遺跡において主に縄文時代晩期の遺物包含層である。少量ではあるが縄文時代後期の遺物も出土した。やや粘質のある土層。
V 層	灰褐色土 黄白色パミスをとところどころ含む。
VIa 層	褐色土 アカホヤ火山灰の二次堆積土 遺跡全体に安定して堆積している。
VIb 層	黄橙火山灰土 通称アカホヤ火山灰層。喜界カルデラより噴出された広域火山灰土。
VIIa 層	灰黄褐色土 ところどころVIIbの細かいパミスを含む。上部は少ない。
VIIb 層	黄色火山灰層 桜島P14火山灰層。やや厚めに堆積しているところとブロック状に散らばるところがある。
VIII 層	黒褐色土 粘質のある土層。いわゆるチョコ層ともいわれる。
IX 層	褐灰色土 砂質の土層。この時点で表土から5m近くの深さになる。

※ 網掛けしているところは遺物包含層である。

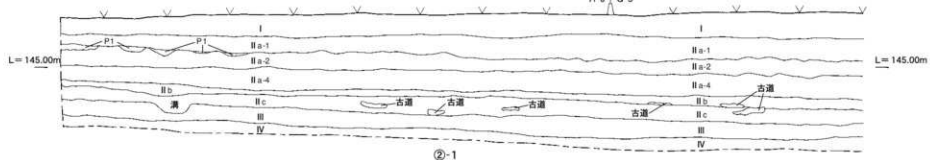
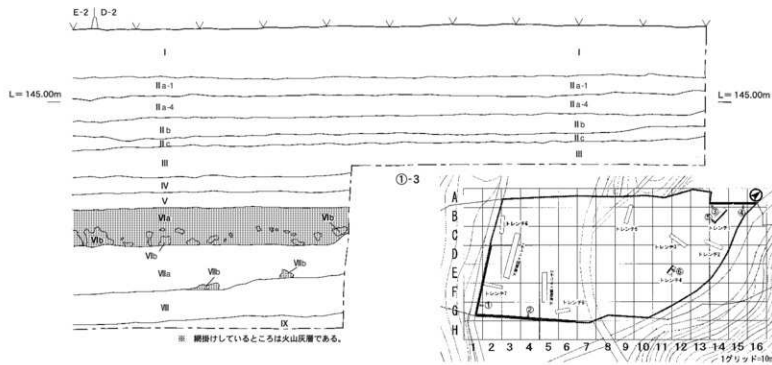
第2図 柿木段遺跡 基本土層図



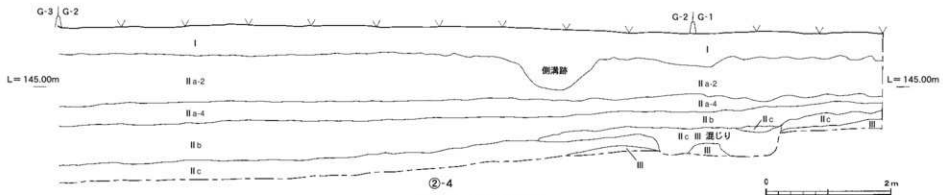
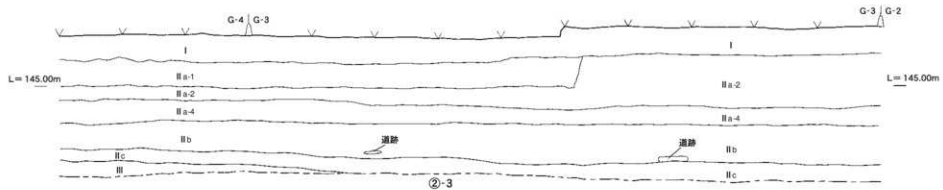
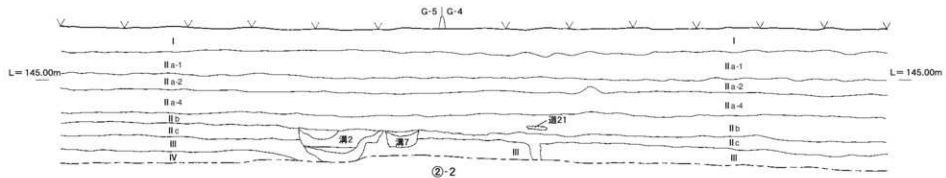
0 2m ※ 網掛けしているところは火山灰層である。



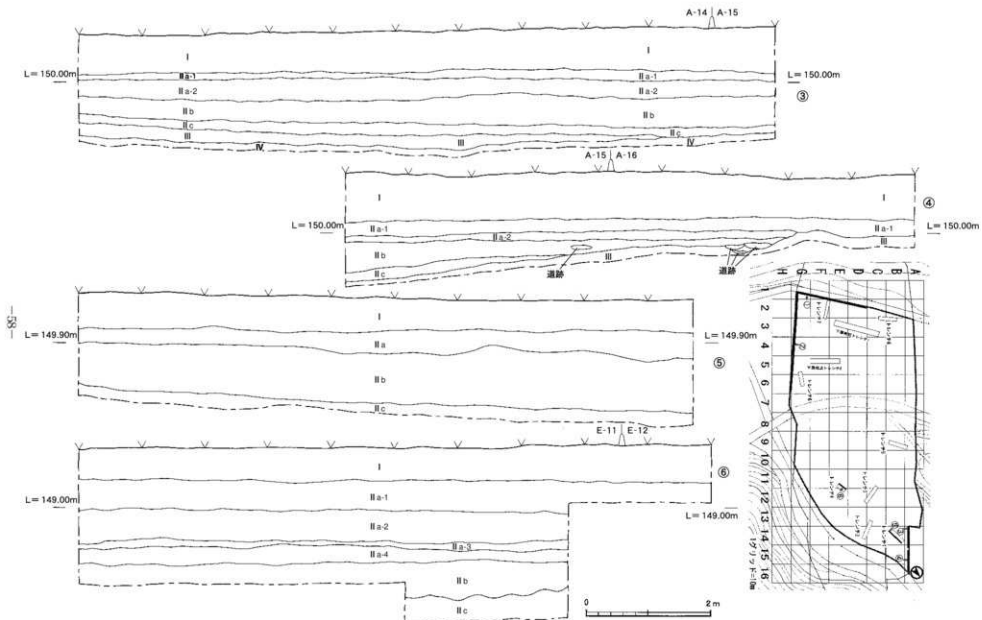
第3図 土層断面図(1)



第4図 土層断面図(2)



第5図 土層断面図(3)



第6圖 土層断面図(4)

2 縄文時代の調査

(1) 縄文時代前期・後期の調査

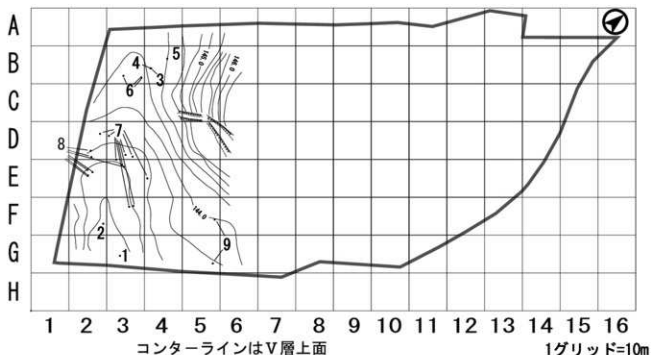
ア 概要

本遺跡を構成するアカホヤ火山灰層上位の第IV層に、少量であるが縄文時代前期から後期該当の遺物が出土している。第IV層で遺構も検出されたが、遺構のあり方、伴う可能性の高い土器が縄文時代晩期であることから、それらの所属時期を晩期と判断した。

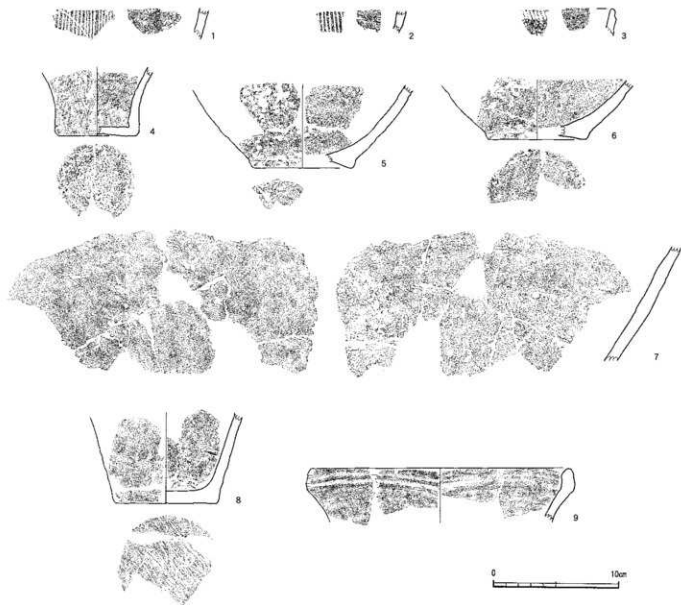
イ 遺物

土器（第8図 1～9）

1, 2は縄文時代前期に該当する土器である。縦位の沈線文が施され、1はこれを斜位沈線文が切っている。類似資料が志布志市別府（石踊）遺跡で多数出土している。類例から縄文時代前期後半の曾畑系土器に帰属すると判断している。3, 4は縄文時代後期中葉に該当する土器である。3は口縁部であり、斜位の刺突文が施され、下部欠損部に少しだけ、同じく斜位の刺突文が見られる。4は底径8.2cmで、下部から2cm程度は垂直に立ち上がり、そこから急に外反していく形状である。なお、3, 4の明確な帰属は明らかでない。5～9は縄文時代後期後葉に該当する土器である。5, 6は底部であり、上げ底の形状である。同一個体の可能性が高い。7は大型深鉢の胴部である。外面にミガキなどの手法が見られる。8の底面は細く浅い沈線が見られる。9は外反する形から上部にかけて内側にやや屈曲し、沈線が横位に施されている。



第7図 縄文時代前期・後期遺物出土状況図



第8図 縄文時代前期・後期 土器実測図

第1表 縄文時代前期・後期土器観察表

探出 番号	陶器 番号	期位	部位	出土区	色調		胎土				焼成	遺物番号	備考
					内	外	石英	長石	黒色鉱物	その他			
8	1	Ⅱ	胴部	G-3	にぶい黄橙	橙	○	○	△	ウ	良	585	
	2	Ⅱ	胴部	F-2	にぶい黄橙	橙	○	○	△	ウ	良	549	
	3	Ⅳ	口縁	B-4	暗赤褐	黒褐	△	○	△	ウ	良	3048	
	4	Ⅳ	底部	B-4	褐	褐	○	○	△	ウ	良	3047	
	5	Ⅳ	底部	B-4	にぶい黄橙	明褐	○	○	○	火	良	2909 一括	
	6	Ⅳ	底部	B-3	にぶい黄褐	明褐	○	○	○	火	良	3029 2974 3028	
	7	Ⅲ,Ⅳ	胴部	D-2, D-3 E-4, E-3	明褐	明褐	○	○	○	火, チ	良	1480 603 795 1006 1486 1726 1718 1928 1930	
	8	Ⅲ,Ⅳ	底部	D-2, E-2 E-3	にぶい黄橙	褐	○	○	○	チ	良	983 1177 1459 1457	スズ付着
	9	Ⅳ	口縁	F-5, G-5	黒褐	黒褐	○	○	○	チ	良	194 2309	

※ 胎土について 石英はクリスタル光沢、ところとした表面のもの、長石は透明でヒビ、面の入ったもの・マリガラス状・光沢のある白色のもの、角閃石と輝石をまとめて黒色鉱物とした。

その他は、ウ→雲母、火→火山ガラス、チ→チタン鉄鉱、磁→磁鉄鉱、赤→赤色小礫、灰→灰色小礫

(2) 縄文時代晩期の調査

ア 概要

第IV層が縄文時代晩期に該当する。なお、上位のⅢ層以上では弥生時代以降の遺物の出土が中心となる。遺構は、落とし穴状遺構が1基、土坑4基、石斧埋納遺構1基で、遺物は、深鉢形土器、浅鉢形土器などが出土している。

遺物は主にC～G-2～3区に集中して出土している。この部分は北側から南側に向けて下る傾斜地の窪み部にあたり、遺跡内では低い標高の部分である。石斧埋納遺構以外では、遺構と遺物の関連は見られなかった。

イ 遺構

IV層上面に落とし穴状遺構が1基、土坑4基、石斧埋納遺構1基が検出されている。

(ア) 落とし穴状遺構 (第9図)

B-3～4区のIV層で検出された。平面プランは長径165cm、短径94cmの長楕円形で、検出面からの深さは112cmである。掘り込み形状は、上面観、側面観ともにバス状で、底面は平坦面をなす方形である。底面の各四隅に1点ずつの計4点の小ピットとその中央に小ピットが確認されている。その小ピットは直径3cmから8cmまであり、その深さも13cmから22cmまでとなる。なお、この小ピットはこれまでの調査成果も含め、逆茂木痕と理解できる。また、掘り込みラインの上部にステップ様の段差が見られるが、その後の崩落と判断される。

(イ) 土坑1 (第10図)

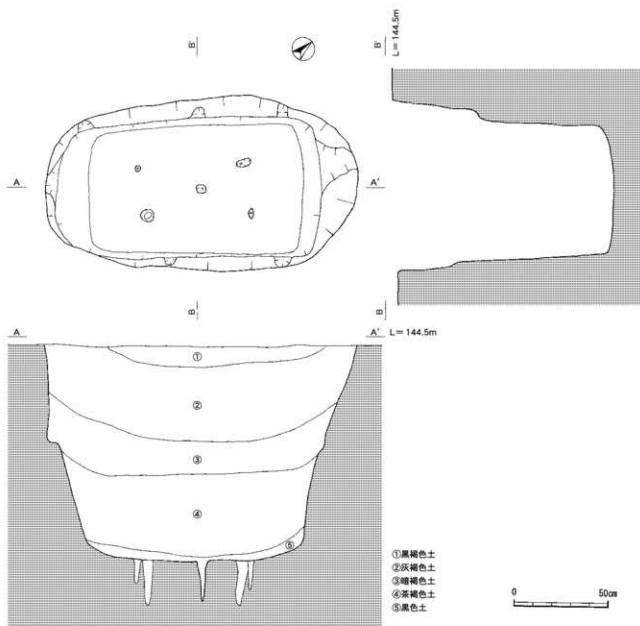
F-4区のIV層で検出された。平面プランは長径93cm、短径90cmのほぼ円形で、検出面からの深さは13cmと浅い。底面は平坦でほぼ円形である。埋土は上部に黒褐色の土、下部に黒褐色と黄褐色の土が混じる。

(ウ) 土坑2 (第10図)

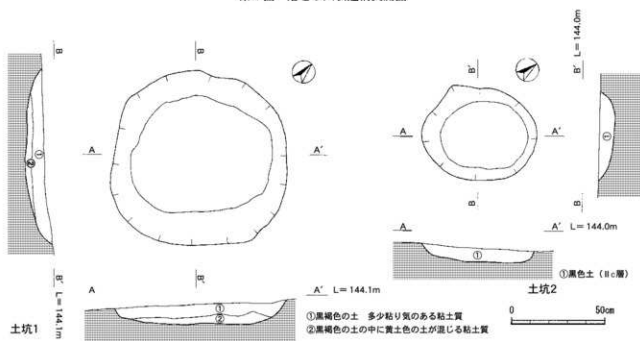
E-3区のⅢ層で検出された。平面プランは長径61cm、短径48cmの楕円形で、検出面からの深さは8cmで浅い。底面は平坦面をなしている。埋土は黒褐色土(Ⅱc層)である。

(エ) 土坑3 (第11図)

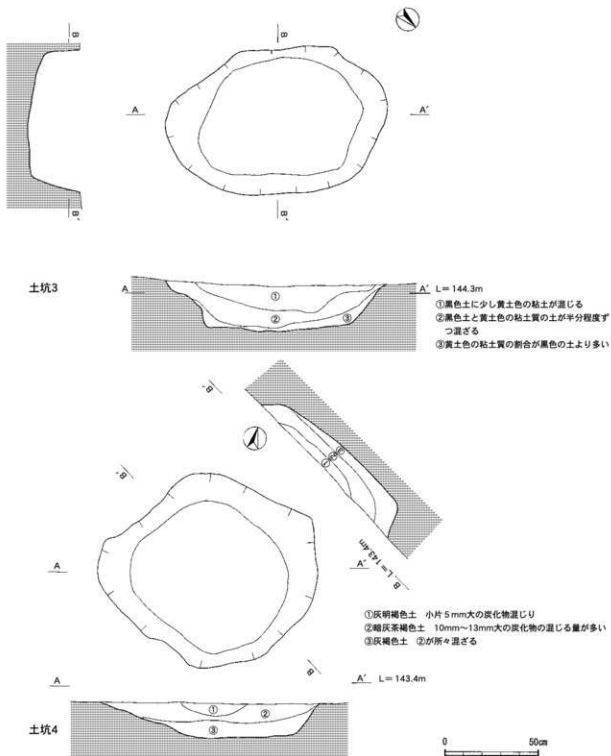
F-1～2区のⅢ層で検出された。平面プランは長径116cm、短径75cmの楕円形で、検出面からの深さは23cmである。掘り込みは北西側にやや緩やかな傾斜が残り、南東側は緩いステップ状の段差を残す。底面は平坦であるが、一番深いところは中心部ではなく、中心からずれた地点に何か所か存在する。埋土は3層に分かれ、上から黒色土に黄褐色土を少し混ぜた土、黒色土と黄褐色土が半分ずつ混じったもの、粘質黄褐色土の割合が黒色土より多いものと段階的に分かれる。南側に現在使用する用水路が走り、その工事の埋土が外形の数cmのところまで迫っていた。



第9図 落とし穴状遺構実測図



第10図 土坑実測図(1)



第11図 土坑実測図(2)

(オ) 土坑4 (第11図)

G-2～3区のIV層で検出された。平面プランは長径117cm、短径97cmの丸みの持つ方形で、検出面からの深さは18cmである。掘り込みは西側が緩やかな傾斜になり、東側は急な傾斜である。底面は中心から東よりのところに平坦な部分を残す。埋土は断面の傾斜に影響を受けず、平坦に堆積して、中央部はレンズ状の堆積がある。埋土の種類は3層であり、一部に炭化物も混じる。

(カ) 石斧埋納遺構 (第12図)

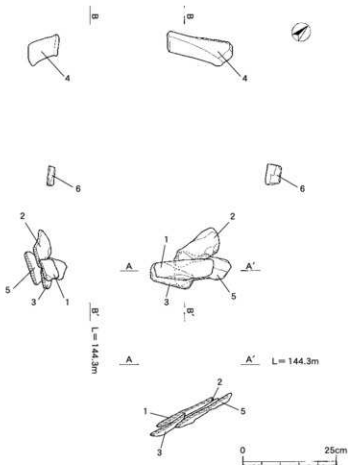
遺跡南西のC-3区のIV層から、IV層の掘削中に石斧4点が重ねられた状態で発見され、明確な掘り込み遺構(掘り込みラインや掘り込みの内部構造)等は確認できないが、出土状況から“石斧埋納遺構”，いわゆる“デボ”が存在したと判断している。

4点の石斧は、石斧5を最下面に→2と3→1の順に重ねられ、30°程の傾斜を成して斜めに検出されている。掘り込み遺構は確認されていないが、図示した平面感や側面感からは、最小でも径20cm、深さ10cmの土坑が存在した可能性が推測される。

また、一括埋納の外側に打製石斧(石斧4)と打製石斧の破損品(石斧6)が1点ずつ出土している。埋納位置から石斧4が50cm、石斧6が20cm程離れている。

埋納された4点の石斧は、完形品であることから石斧6の破損品については、一括埋納品と評価する積極的要素は少ないが、石斧4については検討価値を残しておきたい。

重ねられ埋納されたと判断する石斧は4点で、部分(刃部)磨製石斧3点と1点の打製石斧で構成する。また、2点の大型石斧と2点の小型石斧の区分、もしくは短冊形1点、分銅形1点、楕形2点の区分も可能である。

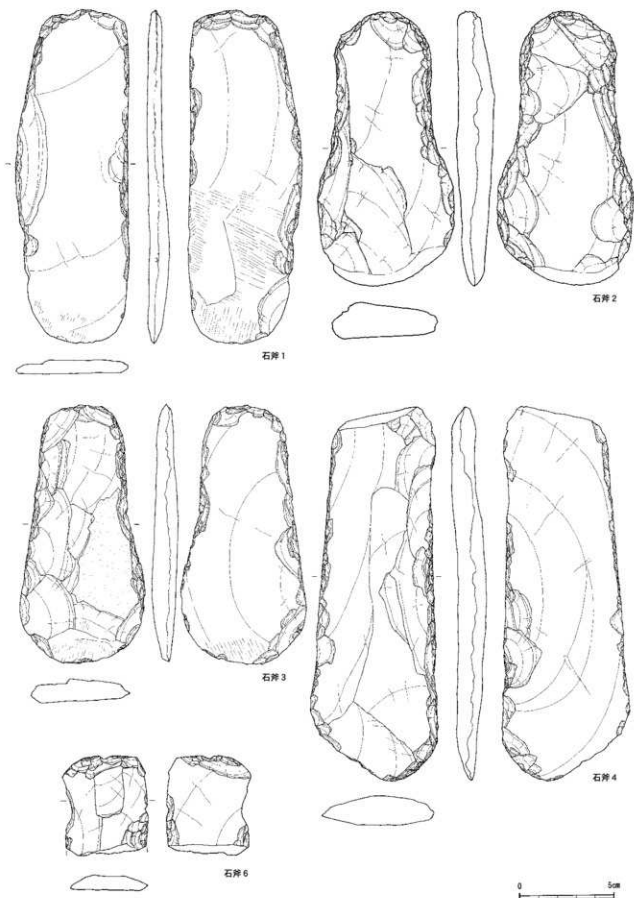


第12図 石斧埋納遺構実測図

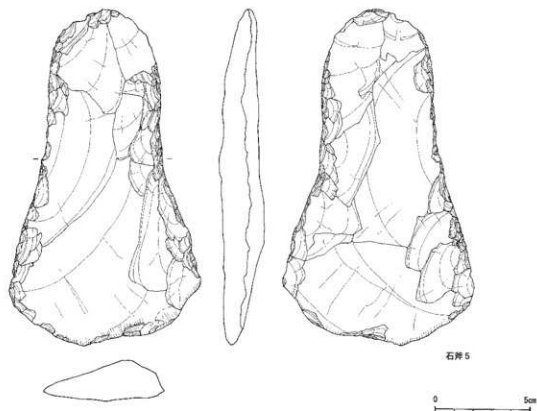
A. A'断面図に石斧4、石斧6は投影されていません。

第2表 石斧埋納遺構内遺物観察表

検出 番号	番号	器種	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
13	石斧1	部分磨製石斧	C-3	IV	安山岩	17.7	5.9	1.3	141.5	短冊形
	石斧2	打製石斧	C-3	IV	安山岩	14.6	7.2	2.1	245.5	分銅形
	石斧3	部分磨製(刃部)石斧	C-3	IV	安山岩	13.7	6.7	1.4	140.5	楕形
	石斧4	打製石斧	C-3	IV	安山岩	19.8	6.7	1.8	226.5	短冊形
14	石斧5	部分磨製(刃部)石斧	C-3	IV	安山岩	17.8	10.2	2.3	375.0	楕形
13	石斧6	石斧の一部	C-3	IV	安山岩	5.3	4.5	8.5	31.0	-



第13圖 石斧埋納遺構内遺物実測圖(1)



第14図 石斧埋納遺構内遺物実測図(2)

石斧埋納遺構内遺物(第13図, 第14図)

石斧1は、長さ17.7cm、幅5.9cm、厚さ1.3cmの典型的短冊形で、表裏を含め刃部周辺は磨かれる、いわゆる局部磨製石斧に区別できる。頭部から両側縁部は細かく成形加工され、特に、右側縁部はほぼ直線的に仕上げ、刃部側縁部から刃部及び切っ先部は丁寧な研ぎが観察できる。

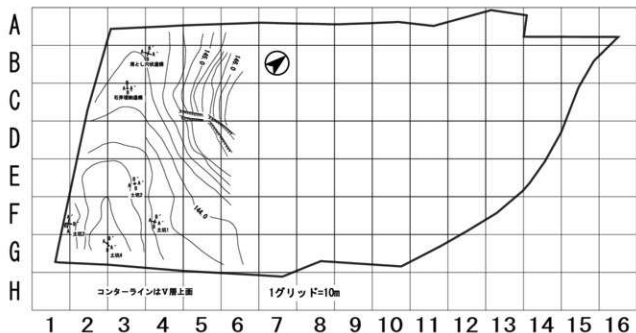
石斧2は、長さ14.6cm、幅7.2cm、厚さ2.1cmで、いわゆる分銅形に区別できる。表裏に残る剥離面からは、横長剥片が素材であることがわかる。表面下位の平坦剥離、裏面抉り部の平坦剥離は、素材剥離をできるだけ薄くする目的によると推測できる。

石斧3は、長さ13.7cm、幅6.7cm、厚さ1.4cmで撥形に区別できる。表面右中央部に礫面を残す横長剥片を用い、打面部の除去、右側縁部を形成する剥片端部も丁寧な成形痕が認められる。頭部、刃部とも丸く、刃部には摩耗痕が残される。

石斧4は、長さ19.8cm、幅6.7cm、厚さ1.8cmで、短冊形に区別できる。裏面は横長の剥離痕が観察できるが、表面は先行する複数の剥離面で構成し、横断面は蒲鉾状を呈している。両側縁部及び刃部の成形は丁寧で、両側縁部はほぼ直線に仕上げている。

石斧5は、長さ17.8cm、幅10.2cm、厚さ2.3cmで、いわゆる撥形に区別できる。裏面右中央部の大剥離及び左側の複数の剥離面は成形剥離の可能性が高く、下端部の剥離面が素材剥離面と見られる。頭部は丸く、抉り部は両方向からの成形仕上げがみられる。刃部は一部欠損するが、使用に起因するとみられる摩耗痕が顕著に残される。

石斧6は、長さ5.3cm、幅4.5cm、厚さ8.5cmで、石斧の一部である。形状から判断して、石斧の基部である可能性がある。抉り部に成形された痕が残る。



第15図 縄文時代晩期 遺構配置図

ウ 遺物

土器 (第18～23図 10～97)

10～43は深鉢形土器に該当する。

10は口径34.4cm, 高さ26.8cm, 底径9.8cmの深鉢形土器で、頸部から口縁部まで外反しながら直線的に立ち上がる。頸部では「く」の字に屈曲し、胴部でも同様に屈曲し底部に至る。外面と比べると内面のミガキは丁寧である。11は10と同じような断面の形状をしているが、4か所の頂を持つ山形口縁で、口径35.8cm, 高さ33.0cm, 底径9.5cmである。10は最大部が口縁部であるが、11では胴部に設けられている。

12～27は口縁部である。12～14は口縁部が肥厚している。12は口縁部から頸部にかけて強く屈曲しており、頸部の部分は断面が薄くなっている。13は12と同じ形状であるが、口縁部の長さが12に比べ短く、別個体と判断した。口唇部に浅い沈線が見られるが、籠状工具の跡かもしれない。14は口唇部が指に挟まれたように尖っている。

15～18は口縁部の形状から上記の10と同様の器形と判断される。15の内面に5mm程度の孔があり、胎土に混じった植物痕かもしれない。横位の繊維様の痕跡が圧痕される。16は外面に指ナデ痕が見られる。断面下部が外側に屈曲しようとしているため、頸部付近で欠損していると思われる。17は16と断面や調整が類似するため、同一個体の可能性がある。16と同様に指によるナデ調整痕と、工具による調整が認められる。18は口唇部が指で挟まれたように尖り、内外面とも調整が丁寧である。

19～27は小破片である。そのため傾きは不確定なものが多い。19は口唇部が狭い平坦面を成している。20は19と同様に口唇部を平坦に仕上げて、その平坦面に浅い沈線を施している。19に比べ若干肥厚の傾向が見てとれる。21は口縁部内側上部がほんの少し隆起している。22は口唇部が

丸みを呈している。23の外表面は、工具による調整痕が見られる。24は口唇部が19、20と同様に平坦に作られている。25も外部に工具による強めの調整痕が見られる。26は胎土に混じる石英、長石が顕著に見られる。27は横位の沈線が3本施されている。

28～32は頸部から肩部にかけての土器片である。28は頸部の内面が尖ったように屈曲し、肩部にかけての外表面は2段階に屈曲して肩部に向かっている。29は頸部がなだらかに曲がり、内面の調整がとて丁寧である。30は器壁が肥厚し、大型深鉢の可能性はある。31は上部に外反する部分が残し、頸部から肩部と判断した。32は土器片の幅が狭く、傾きは任意である。少しひねられた形状で残る。

33～35は肩部付近である。器壁が肥厚し、屈曲した部分から下部は薄く作られている。上部に炭化物が付着する。部分的に厚さが若干違うのでそれぞれで掲載した。

36～38は胴部屈曲部から下部にかけて土器片である。36は上部に炭化物付着が見られる。37は尖った形状で外面が屈曲している。38は丸みをもって胴部が作られている。上部に炭化物付着が見られる。

39～44は胴部から底部にかけての土器片である。39は内面の調整痕から上下を判断した。40は内面が丁寧に調整されており、下部がほんの少しであるが肥厚する。41は40より厚手であり、40と同様に下部がやや肥厚する。42はさらに厚手であり、大型深鉢の胴部の可能性はある。43、44も肥厚した断面である。大型深鉢に該当する。

45はリボン状の突起物を貼り付け、リボンの両側が削られた形状をしており、曾於市大隅町西原段1遺跡で出土している土器に類似している。

46～83は浅鉢形土器である。

46～50は厚手の口縁部を持つものである。46は口径23.4cmで玉縁を持ち、その下部はやや盛り上がるように肥厚する。47は同じく玉縁をもつが、口縁部に沈線を横に入れ、口唇部に丸みを持つようになでて仕上げている。48は口唇部内側にもう一つ口唇部を載せたような形状であり、浅鉢の中では厚みがある。49はやや厚みがあり玉縁状の突起部を持つ。立ち上がりは緩い。50は厚みがあり、口唇部に玉縁状のものではなく、平坦に仕上げている。

51～58は口唇部に玉縁状の口唇部を持ち、立ち上がりがしっかりしているものである。51は口径30.4cmで、口縁部外面に2条の沈線がめぐり、場所によっては1条の部分も存在する。合流部を確認すると上の沈線が浅く下の沈線がやや深い。上の沈線を下の沈線が切っているため、製作段階で引き直した感がある。口縁部から頸部まで長く、内外面とも丁寧なミガキが施されている。52は口縁部外面に2条、内面に1条の沈線がめぐり、53は口径31.6cmで、51と同様に外面に2条の沈線が施されているが、下の沈線が大きく切っている部分は1条に見える。頸部付近から口縁部まで緩やかに外反するが、51ほど長くはない。54は口縁部内外面とも1条の沈線がめぐり、頸部付近から口縁部には直線的に至る。55は口径18.8cmで、内外面とも1条の浅い沈線がめぐり、口縁部の立ち上がりの角はやや丸みがある。56の外側の沈線はとて薄く、模様程度である。57は頸部付近から口唇部にかけて、緩やかに薄くなるように作られている。58は口唇部の高さが低く薄いがしっかり立ち上がっている。

59～67は口唇部に玉縁状の口唇部を持つが、立ち上がりの角度が緩いものである。それぞれ外

側に1条の沈線がめぐり、59は口径17.8cmで、幅の狭い沈線がしっかり外側にめぐり、60は外側の沈線がしっかりしており玉縁状突起がとても小さい。61、62、63は外側沈線が浅く断面には現れない。64は沈線がしっかりしており、この調整で口唇部への角がやや角張る形状である。65は口径29.8cmで、口唇部へ胴部付近まで残る資料である。口縁部外側に1条の沈線がめぐり、口唇部内面はなだらかな曲線になるように丁寧に調整されている。頸部付近の屈曲はしっかりしており、内外面に稜線がしっかり出ている。頸部から胴部屈曲部まではやや短く、胴部屈曲部もはつきりしており、ソロバン玉の周縁部の形状に近い。66は頸部付近から口唇部にかけて、緩やかに薄くなるように作られている。57と似ているが、立ち上がりの角度が緩い。67は立ち上がりの角度が少なく口唇部へ向かう角度とほぼ変わらない。

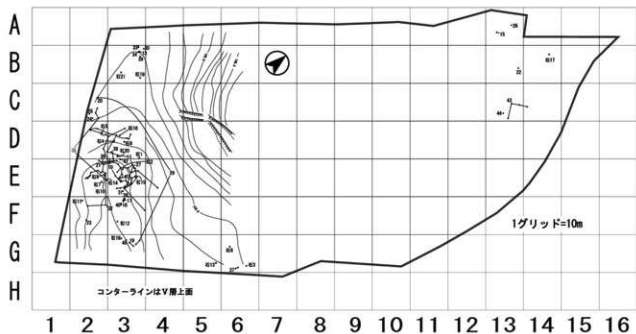
68～72は口唇部に玉縁状のものが無いものである。68は土器片が小さく断面の傾きが任意である。まだ傾く可能性がある。口縁部付近でやや立ち上がり、そこから水平方向に広がり、またやや垂直方向に口唇部が立ち上がる。2段階で口唇部が立ち上がる形状である。69は口唇部がやや平らに仕上げられている。70は薄手で口唇部は指でつまんだように薄く仕上げられている。71、72は口唇部外側が平らに仕上げられている。

73～74は浅鉢の口縁部付近である。口唇部が欠けている。73は胴部付近の屈曲部と頸部屈曲部が短く、逆に口縁部に向かっては長く大きく外反する器形である。内外面とも丁寧にミガキ調整が施される。74は口唇部付近が欠損するが、立ち上がる方向でできている。

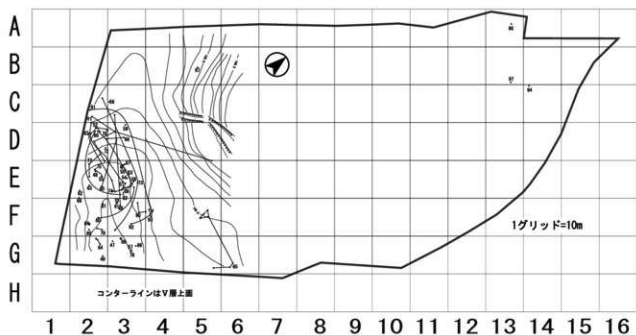
75～83は胴部付近である。75、76は屈曲部がはつきりしており、頸部屈曲部までが短い。77～80は胴部屈曲がやや弱い。77は頸部までが短く、口縁部に向かって長く外反する。78、79は頸部まで短く口縁部に向かって緩やかに外反していく。80は胴部下部である。81は厚手の器形で大型浅鉢の可能性があり、外面に屈曲部が出ているが、内面には現れない。82は胴部屈曲の内側が剥がれている。剥がれている形状から、補強するため胴部内側に土を塗り重ねて製作していることが分かる。外面に煤が付着している。83は胴部から底部付近である。なだらかな傾きでカーブを持ち、内外面とも丁寧にミガキ調整がされている。

84～89は胴部付近の屈曲部がなく、口縁部に向かって内湾もしくは垂直方向に向かって立ち上がる形状をしている。いわゆるマリ形とよばれる浅鉢である。84は器形が球状である。口唇部内側に1条の沈線がめぐり、上部は平坦な形状で作られている。85も口唇部内側に1条の沈線が見られ、84より平坦に口唇部が作られている。86は断面の曲がりから小型の浅鉢が予想される。87は口縁部から底部付近までなだらかな曲線を描く断面である。88は87より薄手で上部の方がやや曲りがきつい。89は底部付近で土鍋の底部分のような器形をしている。上部に炭化物が付着している。

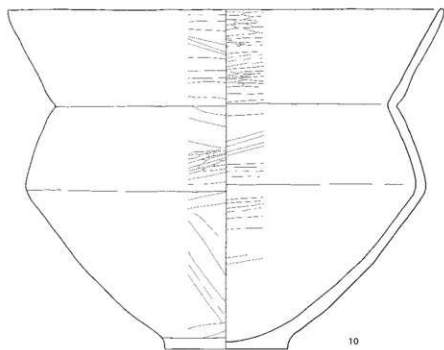
90～97は浅鉢でやや厚手であり、胴部付近に屈曲が見られないものである。ボウル状の形で分類した。90、91は図面に現れにくい、内面が丁寧に調整されているわりに、外面は凹凸している。炭化物が付着している。92も口縁部であるが、口唇部がやや尖った形状をしている。93は胴部付近であり、外面は多少凹凸している。平べったい器形で浅い広口の鉢の可能性があり、94は厚手に作られている。95～97は胴部から底部に向かうところがやや急に曲っている器形である。96には煤が顕著に見られる。



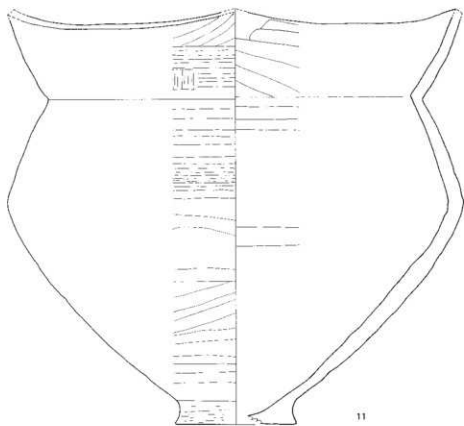
第16図 縄文時代晩期 土器（深鉢形）、石器出土状況図



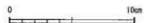
第17図 縄文時代晩期 土器（浅鉢形・マリ形・ボウル状）出土状況図



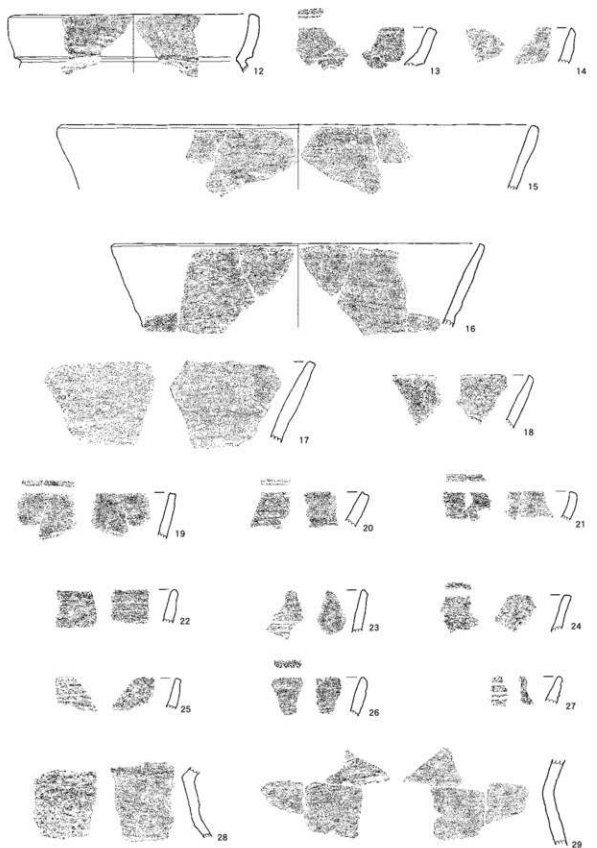
10



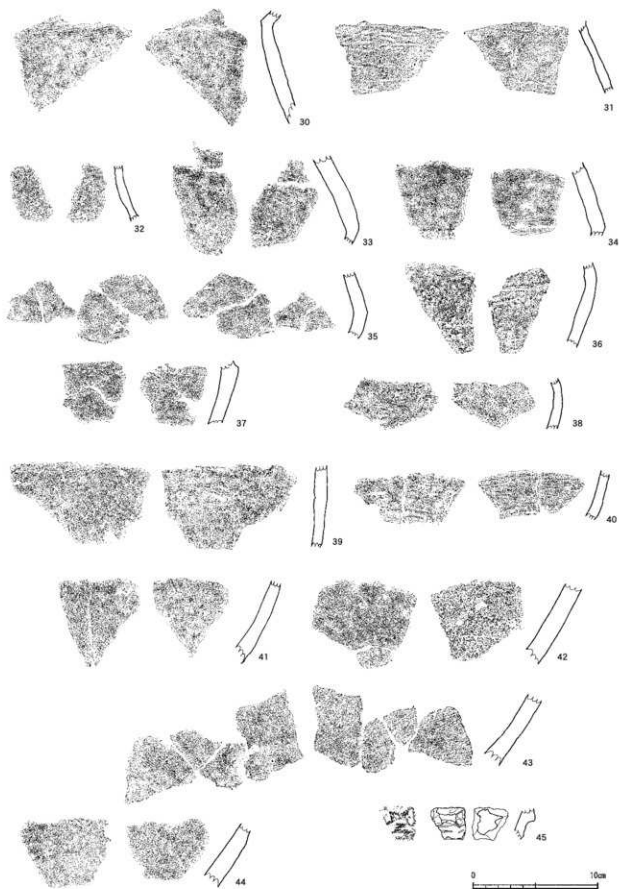
11



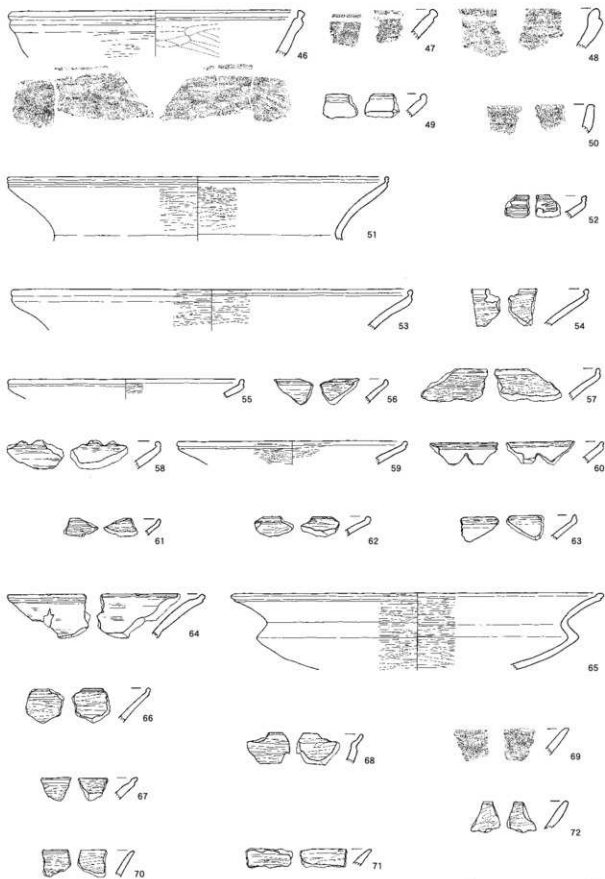
第18図 縄文時代晩期 土器実測図（深鉢①）



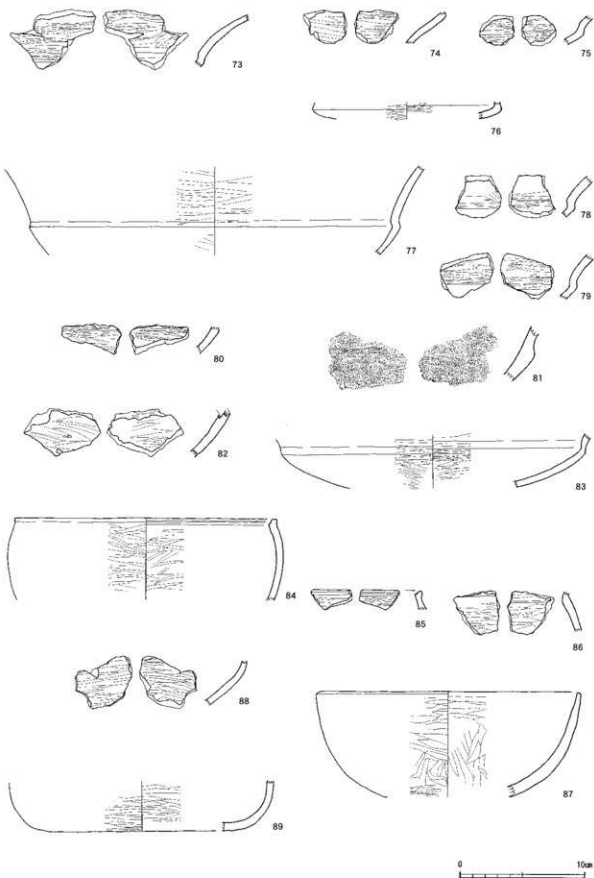
第19図 縄文時代晩期 土器実測図（深鉢②）



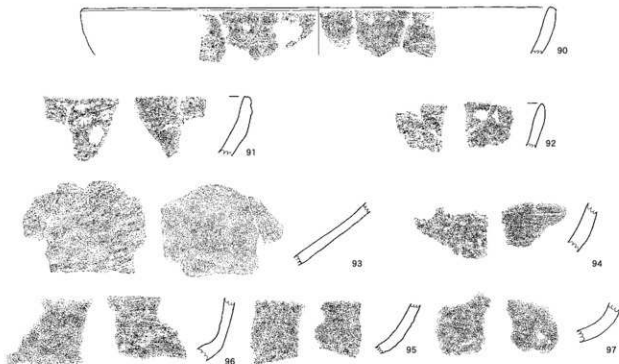
第20図 縄文時代晩期 土器実測図（深鉢③）



第21図 縄文時代晩期 土器実測図（浅鉢）



第22図 縄文時代晩期 土器実測図（浅鉢・マリ形）



第23図 縄文時代晩期 土器実測図 (ボウル状)

第3表 縄文時代晩期土器観察表①

採掘番号	掲載番号	形状	部位	出土区	色調		胎土				構成	遺物番号	備考	
					内	外	石英	長石	黒色鉱物	その他				
18	10	皿, IV	底形	D-2, D-3 E-3, E-4 F-3	暗赤褐色	黒褐色	○	○	○	○	赤	良	1951 1720 1752 1739 1752 1703 108 182 1442 1447 930 1673 1989 1907 1089 1785 1747 1288 1708 1330 1007 1753	炭化物付着
	11	皿, III, IV, IV下	底形	D-2, D-3 D-4, E-2 E-3, E-4 E-5, F-2	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	赤	良	1711 1801 1704 1316 1821 1911 848 1825 1823 1833 2001 1405 1322 158 1403 1494 1883 2039 1216 1517 979 1715 1448 1472 655 639 657 1006 1648 1508 1807 2025 1530 1593 2034 114 982 1642 3036 1828 一括	炭化物付着
19	12	—	口縁	—	褐色	黒	○	○	○	○	赤	良	1731	スズ付着
	13	IV	口縁	B-3	黒褐色	黒褐色	○	○	○	○	赤	良	3012	スズ付着
	14	皿	口縁	E-3	にぶい黄褐色	黒	○	○	○	○	赤	良	909	スズ付着
	15	皿	口縁	A-13	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○	○	火	良	147 一括	スズ付着
	16	IV	口縁	F-3	黒	黒	○	○	○	○	丸, 赤	良	1888 1864 1871	スズ付着
	17	IV	口縁	F-3	黒	黒と明黄褐色	○	○	○	○	丸, 赤	良	1889 2007	スズ付着
	18	IV	口縁	E-3	黒	黒	○	○	△	○	丸, 赤	良	1743	スズ付着
	19	皿	口縁	G-3	黒褐色	黒褐色	○	○	△	○	火	良	2164 2161	スズ付着
	20	皿	口縁	C-2	黒褐色	黒褐色	○	○	○	○	丸, 赤	良	1412	スズ付着
	21	皿, IV	口縁	E-2, E-3	黒	黒	○	○	○	○	丸	良	1717 943	
	22	皿	口縁	B-13	褐色	黒褐色	○	○	○	○	丸, 赤, 黒	良	2797	
	23	IV	口縁	F-2	黒褐色	黒褐色	○	○	○	○	赤	良	1027	
	24	皿	口縁	C-2	黒褐色	黒褐色	○	○	○	○	丸, 赤	良	1336	
25	皿	口縁	C-2	灰黄褐色	にぶい褐色	○	○	○	○	赤	良	1306		
26	皿	口縁	A-13	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○	○	○	丸, 赤	良	171		
27	IV	口縁	E-3	黒褐色	灰褐色	○	○	△	○	赤	良	1802		
28	IV	頸部	F-3	黒褐色	褐色	○	○	△	○	赤, 赤	良	1943		
29	皿, IV	頸部	C-2, G-3 G-4	にぶい黄褐色	黄灰	○	○	○	○	丸, 赤	良	1411 2165 2167		

※ 胎土について、石英はクリスタル光沢、とろとした表面のもの、長石は透明でヒビ、筋の入ったもの・ナリガラス状・光沢のある白色のもの、角閃石と輝石をまとめて黒色鉱物とした。
その他は、ウ→雲母、火→火山ガラス、チ→チタン鉄鉱、紺→磁鉄鉱、赤→赤色小礫、灰→灰色小礫

第4表 縄文時代晩期土器観察表②

観測 番号	母体 番号	部位	部位	出土区	色調		胎土				焼成	遺物番号	備考
					内	外	石英	長石	黒色鉱物	その他			
30	IV	胴～肩	B-3	黒	黒	○	○	○	+	良	3004		スス付遺
31	IV	胴～肩	E-3	黒	浅黄	○	○	△	+	良	1609		炭化物付遺
32	III	胴～肩	F-2	暗褐	にぶい褐	○	○	○	赤, 赤	良	223		
33	IV	胴部	B-3	灰褐	にぶい褐	○	○	○	赤, 赤	良	3001, 3002		炭化物付遺
34	IV	胴部	B-3	橙	黒褐	○	○	○	赤, 赤	良	3044		炭化物付遺
35	III	胴部	C-2, E-2	黄灰	橙	○	○	○	+	良	1398, 1377, 745, 1364		
36	IV	胴部	E-2	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○	火, 赤	良	1505		スス付遺
37	IV	胴部	G-6	黄灰	赤褐	○	○	○	ウ	良	2190, 2197		
38	IV	胴部	D-3	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	火, 赤	良	1471		スス付遺
39	IV	胴～底	B-3	にぶい黄褐	褐	○	○	○	火, 赤	良	3019		スス付遺
40	IV	胴～底	F-3	黒褐	灰黄褐	○	○	△	火, 赤	良	1836, 1838		炭化物付遺
41	-	胴～底	-	にぶい黄褐	明赤褐	○	○	○	火, 赤	良	115		
42	IV	胴～底	E-3	にぶい黄褐	褐	○	○	○	赤, 紅	良	1721		
43	III	胴～底	C-13, C-14	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	△	火, 赤	良	2919, 2622, 2630, 3077		
44	III	胴～底	C-13	橙	浅黄橙	○	○	○	+	良	3363		
45	II	口縁	G-3	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	+	良	260		
46	III, IV	口縁	C-3, F-3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	火, 赤	良	1835, 1837, 1426		炭化物付遺
47	II	口縁	G-3	にぶい黄橙	褐	○	○	○	火, 赤	良	1156		
48	III	口縁	E-2	にぶい赤黄褐	にぶい赤黄褐	○	○	○	火, 赤	良	980		スス付遺
49	III	口縁	G-2	黒褐	褐	○	○	○	赤, 赤	良	1430		
50	IV	口縁	E-3	黒褐	黒褐	○	○	○	+	良	1726		
51	III, IV	口縁	D-2, E-3	黒	明赤褐	○	○	○	火, 赤	良	1451, 1906, 1741, 1035, 2002, 1707		
52	III	口縁	D-2	黒褐	黒	○	○	○	赤, 灰	良	1340		
53	III, IV	口縁	D-2, E-3	褐灰	にぶい赤褐と黒	○	○	○	火, 赤	良	1803, 1047, 2002		
54	IV	口縁	E-3	暗褐	黒褐	○	○	○	火, 赤	良	1737		
55	IV	口縁	E-2	灰黄褐	灰黄褐	○	○	○	赤, 灰	良	1545, 1574		
56	III	口縁	C-3	黒褐	黒褐	○	○	○	火, 赤	良	1422		
57	IV	口縁	G-3	黒	黒とにぶい赤褐	○	○	○	火, 赤	良	2168		
58	III	口縁	E-3	橙	にぶい黄橙と明赤褐	○	○	○	火, 赤	良	1796		
59	III	口縁	D-3	黒	オリーブ黒	○	○	○	+	良	1277, 一底		
60	III	口縁	D-3, E-2	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○	+	良	1600, 1194		
61	IV	口縁	F-3	黒	黒	○	○	○	+	良	1640		
62	IV	口縁	E-2	黒	にぶい黄橙	○	○	○	+	良	1525		
63	III	口縁	E-2	褐灰	褐灰	○	○	○	+	良	1014		
64	IV	口縁	G-2	暗赤褐	暗赤褐	○	○	△	赤	良	2101, 2000, 2100		
65	II, III, IV	口縁	F-5, F-6, F-7, G-5, G-6	黒	黒	○	○	○	+	良	301, 182, 183, 184, 180, 1171, 2201, 2282		
66	IV	口縁	E-3	黒	黄褐	○	○	○	+	良	2003		
67	III	口縁	B-5	黒とにぶい褐	にぶい褐	○	○	○	+	良	2803		
68	III	口縁	D-2, D-3	赤褐	明赤褐と黒	○	○	○	+	良	1084, 700		
69	III	口縁	F-2	褐灰	褐灰	○	○	○	+	良	286		
70	IV	口縁	F-3	黄褐	黒褐	○	○	△	火	良	2070		
71	III	口縁	C-2	黒褐	灰黄褐	△	○	△	+	良	1364		
72	IV	口縁	D-2	暗灰黄	暗灰黄	△	△	△	+	良	1445		
73	III, IV	口縁	C-2, E-3, F-3	黒褐	黒	△	○	○	+	良	1832, 1417, 2116		
74	IV	口縁	E-3	褐	暗赤褐	○	○	○	火, 赤	良	1655		
75	IV	胴部	E-2	黒褐	橙	○	○	○	+	良	1544		
76	III	胴部	G-3	褐灰	にぶい褐	○	○	△	+	良	2100		
77	II, III, IV	胴部	C-2, D-2, D-3, E-2, E-5	黒褐	黒褐	○	○	△	+	良	2335, 940, 1257, 1452, 1361, 1901, 647, 1009		
78	III	胴部	D-3	黒褐	黒褐	○	○	○	+	良	1246		
79	IV	胴部	E-2	黒	黒	○	○	○	+	良	3463, 2004		
80	IV	胴部	E-3, F-2	灰黄褐	黒	○	○	○	+	良	1790, 1808		
81	IV	胴部	F-2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	+	良	1922		
82	IV	胴部	E-3	黒褐	褐	○	○	△	赤, 赤	良	1968		スス付遺
83	III, IV	胴部	D-2, D-3, E-3	褐	褐	△	○	○	火, 赤, 赤	良	1671, 1324, 1652, 1795, 1341, 1037, 1247, 1340, 1053		
84	IV	口縁	F-2	黒	灰黄褐と黒	△	○	○	火, 赤	良	3779, 1628		
85	IV	口縁	F-2	黒褐	にぶい黄橙	△	○	△	赤	良	2078		
86	IV	胴部	G-3	にぶい褐	褐	○	○	○	赤	良	2100		スス付遺
87	IV	口縁～底	E-3, E-4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	+	良	1720, 1712, 1713		スス付遺
88	III, IV	胴部	D-2, E-3	黒褐	にぶい赤褐と黒	○	○	○	赤, 赤	良	1664, 1317		
89	IV	胴部	G-3	にぶい黄褐	赤褐	○	○	○	+	良	2128, 2137		炭化物付遺
90	III, IV	口縁	F-3, F-4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	火	良	776, 1945, 1952		
91	III	口縁	C-2, F-4	にぶい黄橙	黒褐	○	○	○	火	良	1372, 1964		スス付遺
92	III, IV	口縁	F-3, F-4	にぶい黄橙	黒褐	○	○	○	火	良	1935, 1905		スス付遺
93	III	胴部	F-4	浅黄	浅黄と黄灰	○	○	○	火, 赤	良	1867, 1974		
94	III	胴部	C-14	黄褐	橙	○	○	○	+	良	3003		
95	-	胴～底	-	にぶい黄橙	黒褐	○	○	○	+	良	115		
96	III	胴～底	A-13	橙	橙	○	○	○	ウ	良	174		スス付遺
97	III	胴～底	B-13	浅黄	橙	○	○	○	+	良	2807		

※ 胎土について 石英はクリスタル光沢、とろついた表面のもの、長石は透明でヒビ、黒の入ったもの・すりガラス状・光沢のある白色のもの、角閃石と輝石をまとめて黒色鉱物とした。
その他は、ウー質母、火→火山ガラス、チ→チタン鉄鉱、磁→磁鉄鉱、赤→赤色小礫、灰→灰色小礫

石器 (第24～25図 1～21)

① II層出土

1は薄手の扁平剥片を用い、裏面に素材剥離面を多く残している。先端部や抉り部では、微細な整形剥離が見られる。II層出土とするが、おそらく下位層の所残と判断できる。

② III層出土

2は母指状即ち、ドーム状に仕上げている。3の側縁は馬蹄形状に、基部は大きく抉り内湾する。4は背面右側に核素材の礫面を残す縦長剥片で、左側縁部に微細な刃痕が認められる。

③ IV層出土

5は表裏逆に掲示した。横広の不定形剥片の一部を折断し、切断部を基部に側縁はドーム状に仕上げている。6は小型で基部の抉りは深く、長幅比1.5:1.0の長身鎌で入念な整形加工が見られる。7は石鏃の未製品あるいは周辺加工石器が想定されるが、いずれにしても天地・表裏逆の掲示である。8はいわゆる正三角形鎌で、基部がわずかに窪む仕上がりである。9は長幅比1.5:1.0の長身鎌で、厚手の剥片を用いている。10は両側縁部の一部が突出する五角形鎌で、厚手の剥片を一次成形した後、微細な調整剥離を加えている。これも表裏逆掲示の可能性がある。11は先端部と右脚部が欠落したもので、基本的には三角形と見られる。12は基部の抉りの深い脚部で、先端部方向からのダメージで破損している。

13は表裏に剥離面を多く残す扁平な剥片を素材とした削器で、刃部の形成状況から石匙を意識して作られたと判断している。

14は不定型な横広剥片で、側縁に微細剥離痕が見られるか時期判断が難しい。

15は典型的なサブマリントypesの石匙で、厚手の素材剥片の周辺に入念な整形剥離を行い、摘み部の作りだしも丁寧である。刃部は直線的に、体部の縦断面はレンズ状に仕上げている。

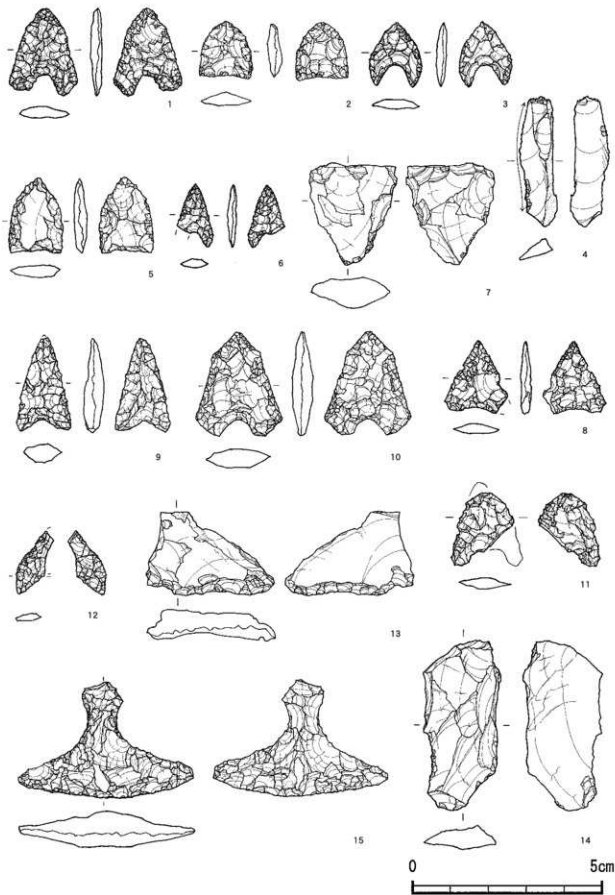
16、18～21の使用石材は安山岩である。16は頭部の欠落した分銅形、19は明確な抉りは形成されないが、18とともに撥形と分類できる。20は頭部・刃部の欠落した抉り部、21はいずれか体部の欠損品と見られる。

16は長さ13.5cm、幅10.6cm、厚さ1.8cmで、表面左側縁部は素材剥片の形状をそのまま生かしている。

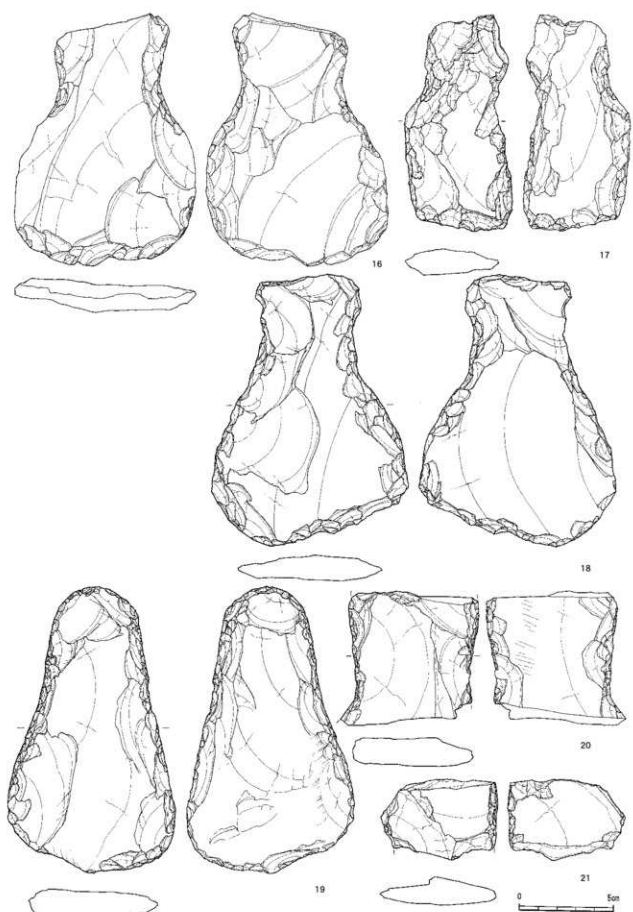
17は扁平な横広剥片を短冊形に成形し、その上位に抉りを持つ有肩石斧で、使用石材はホルンフェルスである。長さ11.5cm、幅5.6cmで、厚さ1.4cmの扁平な剥片の周辺を鋭角に加工し、仕上げている。なお、刃部はリダクションの可能性もある。

18は長さ14.5cm、幅10.5cm、厚さ1.5cmで、表裏に素材剥片の剥離面を多く残している。刃部は残存状況からリダクションを繰り返していたことが推測できる。22は長さ15.2cm、幅8.9cm、厚さ1.6cmで、表裏に素材剥片の剥離面を多く残し、明瞭な抉りは形成しないが、微細な剥離を加え入念な仕上げが読み取れる。

同一石材が選択され且つ制作上の類似点も指摘でき、特に記さなかったか20の剥片の厚さは1.6cmで16、18、19と極めて類似した厚さの剥片が選択されていることから、一括ないしは同一時期の所産と考えられる。



第24図 縄文時代晩期 石器実測図(1)



第25圖 縄文時代晩期 石器実測図(2)

3 弥生時代～古墳時代の調査

(1) 概要

Ⅲ層が弥生時代～古墳時代の遺物包含層である。接合の結果、Ⅳ層出土の土器片も接合することが判明している。一部の土器片はⅡ層から出土しているものもある。遺物の内容は弥生時代中期土器、磨製石鍬、石匙、古墳時代の甕形土器、小型壺が出土した。

(2) 遺物

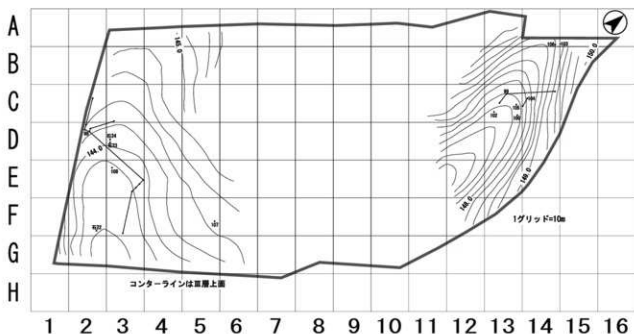
弥生時代土器 (第27図 98)

98は壺形土器の頸部から胴部に至るものである。頸部下部に断面形状が三角形の突帯を貼り付けており、胴部上半にも2条の三角形の突帯を貼り付けている。両方とも刻みは施されていない。突帯周辺には顕著なナデ調整が見られる。

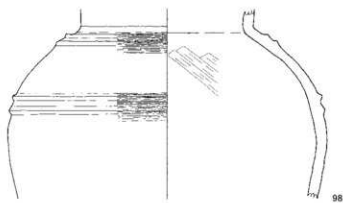
古墳時代土器 (第28図 99～108)

99～105は甕形土器である。99は頸部にくっきりした稜線が見られ、そこから口縁部に向かってハケ目による掻き上げの調整が行われている。頸部から口縁部に向かってやや外反しており、口唇部は平坦面を呈している。100はやや薄手で、ハケ目による掻き上げ調整と横方向の調整が見られる。101は口唇部に工具の痕か意図的につけたか分からないが浅い沈線が見られる。102は頸部で屈曲し、口縁部に向かって外側に直行する。103はやや肥厚した口縁部であり、ナデ調整により外面が少し波状に凹凸が見られる。104は頸部の稜線から上に向かってハケ目による掻き上げ調整が見られる。105は頸部付近が少し凹み、上に向かって掻き上げ調整が見られる。

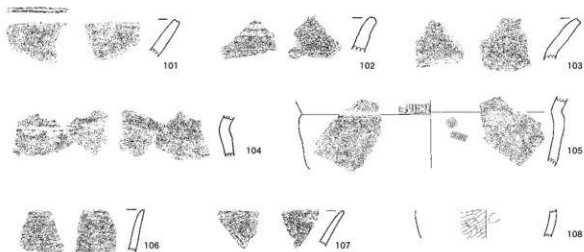
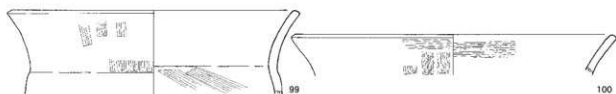
106～108は埴形土器 (小型壺) である。106は口唇部が指で摘んだようにやや尖っている。107は106よりもやや薄手で口唇部は丸みを持つ。108は胴部であり、丁寧な調整が施されている。厚さや色から106か107と同一個体の可能性がある。



第26図 弥生時代～古墳時代遺物出土状況図



第27図 弥生時代 土器実測図



第28図 古墳時代 土器実測図

第5表 弥生時代・古墳時代土器観察表

検出 番号	掲載 番号	層位	部位	出土区	色調		胎土				焼成	遺物番号	備考
					内	外	石英	長石	黒色鉱物	その他			
27	98	Ⅲ、Ⅳ	胴～胴	C-2, C-3	明褐色	明褐色	○	○	△	ウ	良	2124 1330 1331 1361	スス付着
				D-2, E-3 E-4, E-5 E-6, F-3	明褐色	明褐色	○	○	△	ウ	良	1337 1783 1784 1785 1786 1321 1469	
28	99	Ⅱ	口縁	C-13, C-14	橙	にぶい黄橙	△	○	○	チ, 赤	良	3115 2913 3067	
	100	Ⅱ	口縁	C-13	にぶい橙	灰黄褐色	○	○	○	ウ	良	2829 一括	スス付着
	101	—	口縁	—	にぶい橙	にぶい黄褐色	△	○	△	チ, 赤	良	—35	スス付着
	102	Ⅱ	口縁	C-13	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	△	チ	良	3060	
	103	Ⅱ	口縁	A-15	にぶい黄橙	黒	○	○	△	火, チ	良	2419	
	104	Ⅱ	胴部	C-14	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○	チ	良	3030 2916	スス付着
	105	Ⅱ	胴部	C-13	橙	にぶい黄橙	○	○	△	チ	良	2621	スス付着
	106	Ⅱ	口縁	A-14	にぶい赤褐色	明赤褐色	○	○	△	赤	良	2865	
107	Ⅱ	口縁	F-5	にぶい橙	橙	○	○	○	赤	良	615		
108	Ⅱ	胴部	E-3	橙	橙	△	○	△	良	946			

※ 胎土について 石英はクリスタル光沢、ところとした表面のもの、長石は透明でヒビ、筋の入ったもの・すりガラス状・光沢のある白色のもの、角閃石と輝石をまとめて黒色鉱物とした。

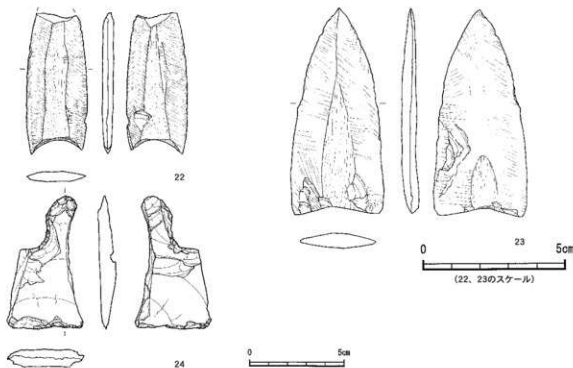
その他は、ウ→黄褐色、火→火山ガラス、チ→チタン鉄鉱、黒→磁鉄鉱、赤→赤色小礫、灰→灰色小礫

石器 (第29図 22~24)

22はやや濃い灰色の粘板岩の磨製石鏃で、IV層からの出土である。頭部(先端部)は欠損するが、現長5.0cm、幅2.2cm、厚さ0.4cmで、図上では6.7cm程の長さが復元できる。いわゆる細身で長身な3:1の長幅比を成す。

23は薄い灰色粘板岩の磨製石鏃でIII層出土と記録される。保存状況は良好で全形を良く残し、長さ7.3cm、幅3.3cm、厚さ0.6cmで、長身でほぼ2:1の長幅比を成す。

24は左右両側縁を欠損した石匙で、摘み部の右側が残される。長さ7.1cm、厚さ1.0cm程の頁岩の扁平剥片を素材とし、裏面から表裏方向への刃部形成が中心と見られる。



第29図 弥生時代 石器実測図

第6表 縄文時代・弥生時代石器観察表

採出 番号	番号	器種	出土区	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	取上 番号	備考
24	1	打製石鏃	D-3	II	黒曜石	2.30	1.80	0.30	1.50	837	
	2	打製石鏃	D-2	III	たんぼく石	1.55	1.40	0.40	1.00	662	
	3	打製石鏃	G-6	III	安山岩	1.70	1.40	0.30	0.50	2189	
	4	打製石鏃	E-2	III	黒曜石	3.50	1.00	0.55	1.00	1136	
	5	打製石鏃	E-3	III	安山岩	2.00	1.45	0.35	1.00	1067	
	6	打製石鏃	8 T	IV	安山岩	1.65	0.95	0.25	0.50	193	
	7	打製石鏃	E-2	III	チャート	2.70	2.35	0.90	5.00	1615	
	8	打製石鏃	D-3	IV下	黒曜石	1.90	1.70	0.30	0.65	1462	
	9	打製石鏃	E-2	IV	チャート	2.50	1.45	0.55	1.00	1639	
	10	打製石鏃	E-2	IV	チャート	2.70	2.30	0.50	2.95	1638	
	11	打製石鏃	F-2	IV	黒曜石	1.90	1.65	0.30	1.00	1906	
	12	打製石鏃	F-3	VI	黒曜石	1.65	0.80	0.20	0.23	1834	
	13	打製石鏃	G-5	IV	たんぼく石	2.20	3.40	0.85	3.50	2208	
	14	打製石鏃	E-2	IV	チャート	4.50	2.10	0.65	7.50	1635	
	15	打製石鏃	E-3	IV	たんぼく石	3.10	4.65	0.95	5.50	916	
25	16	打製石斧	D-2	IV	安山岩	13.45	10.65	1.80	212.00	915	
	17	打製石斧	1 T	III	ホルンフェルス	11.45	5.65	1.40	101.50	152	
	18	打製石斧	G-3	IV	安山岩	14.45	10.50	1.50	222.00	2155	
	19	打製石斧	B-3	IV	安山岩	15.20	8.90	1.60	242.50	3030	
	20	打製石斧の一部	D-3	IV	安山岩	7.10	7.40	1.60	109.00	1473	
20	21	打製石斧の一部	B-3	IV	安山岩	6.20	4.30	1.50	45.00	2087	
	22	磨製石鏃	F-2	IV	粘板岩	5.00	2.15	0.40	5.50	2082	
	23	磨製石鏃	E-2	III	粘板岩	7.30	3.30	0.65	14.00	686	
	24	石匙	E-2	III	頁岩	7.05	4.05	0.95	24.50	1124	

4 古代の調査

(1) 概要

古代の遺構はII層の下部、IIb層もしくはIIc層において検出された。II層自体が厚く堆積しており、地表面より1～2mの深さである。

遺構はカマド状遺構が2基、道跡が47条、溝状遺構が19本検出された。遺物は、土師器の坏、埴、甕や内黒土師器、須恵器などが出土した。

遺物はA～B-13～14区内に集中して出土している。この付近にカマド状遺構が検出されているため、何らかの生活の跡が考えられるが、建物跡等は検出されなかった。

(2) 遺構

カマド状遺構（第31図）

1号

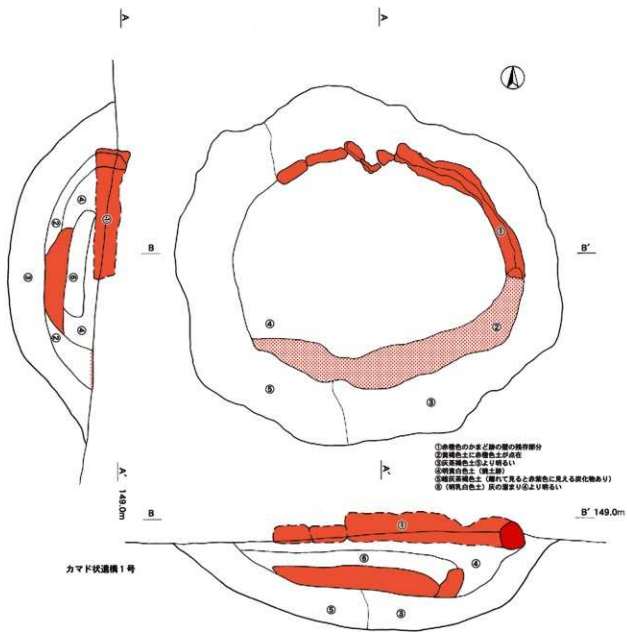
A-14区のII層の下部で検出された。周囲より一段深く掘り込まれた場所に位置し、大きさは100cm×95cm程度である。検出時に上部は崩壊を受けており、高さは不明である。C字状の燃焼部の外周と、西側に焚き口を持つ。検出面から掘り込み面までの深さは25cm程度である。北側の炉壁の残存部分の厚さは最大で8cm程度であり、南側の残存部分の炉壁の厚さは10cm程度である。また、南側の炉壁は原形を残しづらく、埋土との混ざりが生じる。断面を見ると、赤橙色の残存部分が2層あり、下の層は、カマドの天井部に該当するものが崩落して、埋土中に認められた可能性がある。

2号

A-14区のII層で検出された。1号のすぐ隣に位置し、1号に比べ小型である。全体の形と掘り込みは不明であるが、60cm程度の大きさである。検出面に焼土塊があり、放射線炭素年代は、2の歴史年代範囲によると766A D (83.9%) 888A Dという結果を得ている。



第30図 カマド状遺構配置図



第31図 カマド状遺構実測図

溝状遺構（第32～34図）

本遺跡では、調査範囲を大きく2つに分けて、それぞれの範囲で溝状遺構がII層で検出された。A～G-1～6区（下の段）では溝1～溝10、A～F-11～15区（上の段）では溝11～溝19の総数19本が検出されている。

A～G-1～6区（下の段）検出溝状遺構

溝1は、道5～7の下部で検出された。幅は広いところで150cm程度、深さ3～9cm程度であり、C-4区付近で2つに分かれる。B-4区付近では、畝間状の窪みが両側に見られた。溝2は遺跡内で最大級の延長であり、幅は150cm程度、深さ30～40cm程度であり、D-4区付近で大きく屈曲している。溝3は総延長約60mで深さ18～60cm程度である。C～D-5区付近において幅狭で浅くなるが、この付近は畦畔があり落差がある。溝4は幅が狭く、深さ22～33cm程度で溝2の下で検出される。E-4区付近で屈曲する。溝5も幅が狭く、深さ3～8cm程度である。F-3～4区付近で2段階に屈曲する。溝6はF～G-1区で検出された。溝7は深さ13～27cm程度で、F-2区とG-4区付近で屈曲する。土地の境目を隔てる溝の可能性はある。溝8は、幅が広い所で55cm程度、深さ5～10cm程度である。溝6、溝7の上で検出される。向きは溝9と同一方向である。溝9は、幅が広い所で40cm程度、深さ3～9cm程度である。溝8と状況が似通っているため、同一の溝である可能性がある。溝10は、幅が広い所で50cm程度、深さ4～7cm程度である。南北方向に7m延びている。

A～F-11～15区（上の段）検出溝状遺構

溝11は、幅が広い所で2m、深さは25cm程度、南北方向に35m延びている。西から東に下る傾斜面に逆らわずに掘られている。掘り込み面はVI層（アカホヤ火山灰層）まで達している。溝12は幅が80cm程度、深さ12cm程度で南北方向に26m延びている。溝11と同様に傾斜面に逆らわずに掘られている。傾斜面の角度は緩い。溝13は、幅が広い所で50cm、深さ5～15cm程度、長さ5mで、東西方向に溝11と溝12を切っている。埋土はII層中の暗黄茶褐色土であり、砂質層は見られない。上から下まで単一の埋土である。溝14は、幅が40cm程度で、深さ4～38cm程度、長さ22mの細長いものである。東西方向に延び、道36、道37、道47を切っている。溝12の下に位置するが、そのレベル差は10cm程度である。溝15は南北方向に延び、長さは22m程度で溝14の下に位置した後はっきりしない。溝15内で、古代に該当する土師器や須恵器が出土している。溝16～溝18は東西方向に延びる短い溝である。比較的、新しい時期の溝と考える。溝19は、幅が55cm程度、南北方向にやや湾曲しながら延びている。溝19の下面に黒色土が埋まった後、道45ができています。溝19は道44と並行しているが、その上部に位置している。

道跡（第32～33図）

溝状遺構と同様にII層で古代以降の道跡が総数47条検出された。道跡も調査区域を大きく2つに分けて整理してみると、A～G-1～6区（下の段）では道1～道31、A～F-11～15区（上の段）では道32～道47である。（下の段）での道跡は北西方向から南東方向に延びているものが

大勢をしめる。北西方向には、現在の福岡集落が位置し、南東方向には、現在の立小野集落が位置している。(上の段)での道跡はすべて南北方向に位置している。南方向は現在の立小野集落につながり、北方向は谷部の行き止まりになる。

A～G-1～6区(下の段)検出道跡

道1～道4はA～B-3区に位置し、硬化面の厚さは10cm程度である。道5は溝1の上に位置し、北西方向で二つに分かれる。道6は道7の下、溝1の上に位置する。道6と道7は道5と同じか判断がついていない。また、このあたりは、道8も含め数条の道跡が交錯していて上下関係の判断が難しい。道9と道12は前述の道6～道8と距離を置くが同一方向である。道10は道11の上で検出されるが、一部、境目の判断がつかないところもある。道13、道18、道19は溝2をまたぐ形で検出されている。道14、道15はほぼ平行に約30mの長さで検出される。溝7との上下関係から道14の方が古いことが分かる。道17の旧道は道16の可能性もある。道20は道18につながる可能性がある。道21は道17もしくは道20につながる可能性がある。道22は単独で離れていて、他の道跡との関係は分らない。道23は溝2の上部で並行して走っている。道24は溝4の上付近で薄くなり2つに分かれはっきりしない。道25～道28の関係は、道27と道28が古く、続いて道25、新しいものが道26である。いずれも溝9より古いものである。道29～道31は道25か道28につながる可能性がある。どの道跡も総じて北西方向から南東方向に向けて延びている。道跡どうしの上下関係や、道跡と溝状遺構との上下関係は下面のレベル差で判断している。

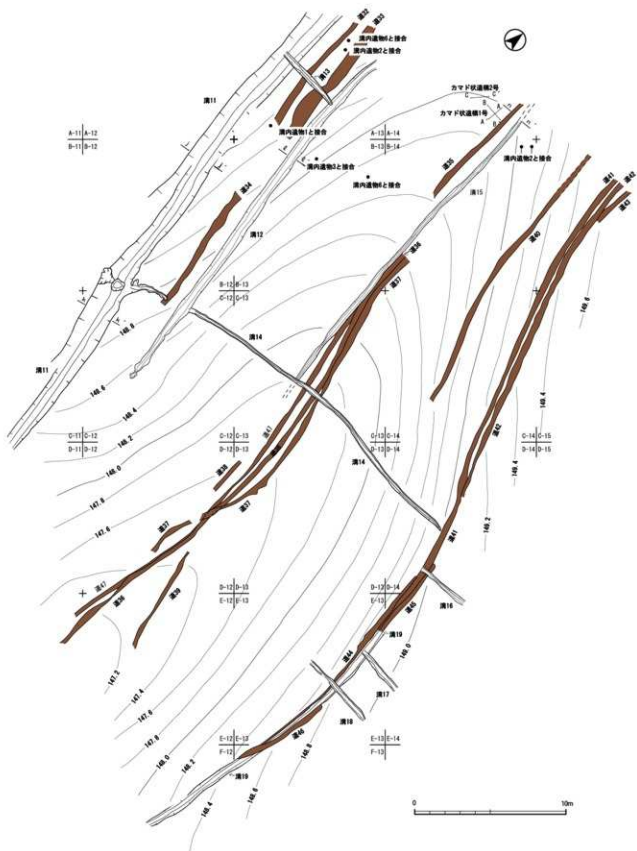
A～F-11～15区(上の段)検出道跡

道32と道33はほぼ並行している。ともに溝13より下で検出される。道32と道33の間で出土した土器は、溝15内で出土した土器と接合している。道34は道33を南側に延長したところにつながる。硬化面が黒色土で同一であり、共通の可能性もある。道35はカマド状遺構2基のすぐ東側を通る。下面に並行する形で窪みがあり、図面では的確に押さえることができなかったが別の溝状遺構の可能性があった。道36、道37、道47は谷のほぼ中央の凹みを並行して通る。古い順に、道47→道36→道37の順になる。道38と道39は独立していて他の道跡との関係が分からない。道40は南北方向に単独で長さ16mほど延びている。道41は谷の東側で傾斜の強い所に沿うように南北につながる。道42より古く、道45や溝19よりも下位に位置する。道42は道41と並行してつながるが道41よりも新しい。道43は短くてはっきりしない。道44は隣接する溝19や道45よりも古い。溝19に東側を掘られているため、実際の幅がはっきりしない。道45は溝19の下面が黒色土で埋まったのち、そこを通る形で作られている。道46は、溝19や道44よりも上で検出され、新しい部類に入る。どの道も総じて南北方向に向いている。

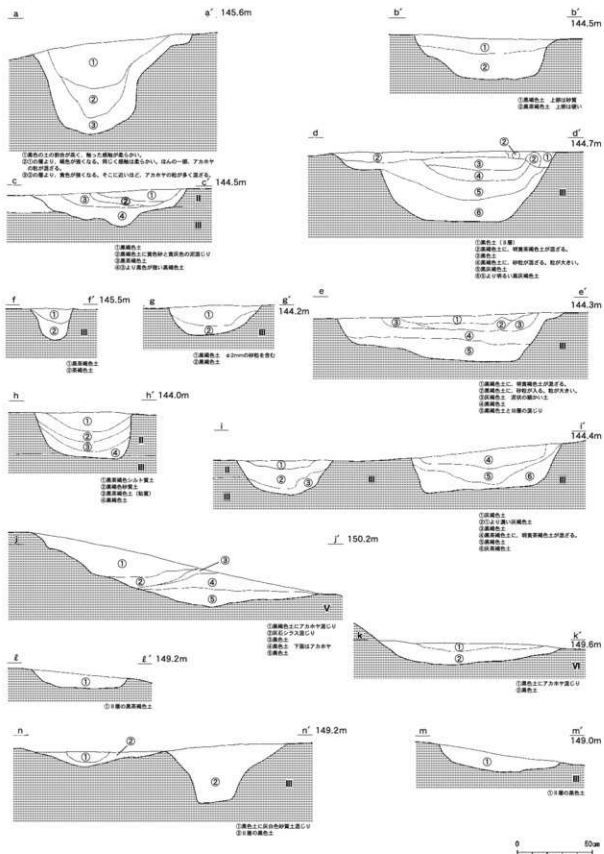
(上の段)の道跡と溝状遺構を総合的に述べると、まず谷部中央の道跡群ができ、次に並行する溝15、その次に東西につながる溝14と西側の大型溝11、そして一段下の溝12ができていく。東側位置する道跡群は他の道跡や溝との関連はつかみにくい。



第32図 古代 溝状遺構・道跡配置図 (A~G-1~6区)



第33図 古代 溝状遺構・道跡配置図 (A~F-11~15区)



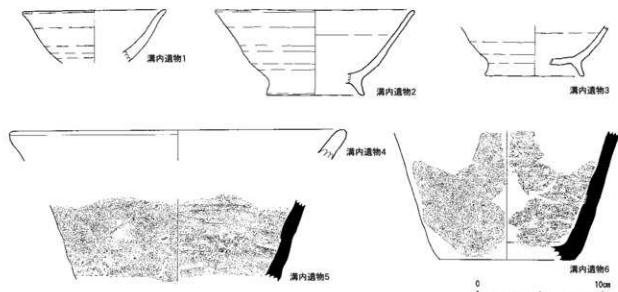
第34図 古代 溝状遺構断面図

溝状遺構内遺物（第35図）

A～B-14区で検出された溝15で古代に該当する土器が出土した。それらの土器の一部は、A～B-13区，B-14区で出土した土器片と接合した。それらの周辺は、道32，道33，道35，溝12が南北方向で延びている。また，溝15のすぐ西側にはカマド状遺構1号，2号が検出されている。

溝状遺構内遺物1～4は土師器である。1は坏である。胴部がやや厚手の器形で，口縁部が薄くなりやや外反気味に作られている。2は口径が約16cm程度の甕である。高台からの立ち上がりは緩やかで，腰部でやや内側に傾いて口縁部に向かい直行する。高台の作りはととも丁寧である。3は甕の底部である。高台が薄く作られ，立ち上がりは緩やかである。高台見込みには丁寧な回転ナデ調整が行われている。4は甕の口縁部である。器壁は厚めで口縁部の反りはあまりない。

溝状遺構内遺物5～6は須恵器である。5は壺形土器の胴部である。器壁が厚めで，外面は指による押さえが見られる。内面は工具による横位，斜位の掻き上げ調整が重なっている。6も壺形土器である。底部から胴部にかけてやや外向きに直行気味に立ち上がる。内面のケズリ調整の痕が顕著である。5と同一個体の可能性はあるが，内面の色が明らかに違う。



第35図 溝状遺構内遺物実測図

第7表 溝状遺構内（溝15）遺物観察表

探検番号	陶器番号	部位	出土区	色調		胎土		焼成	遺物番号	備考
				内	外	石英	長石			
35	溝内遺物1	II 口縁～胴	A-13, A-14, B-14	橙	赤褐色	○		良	39	A・B-14溝
	溝内遺物2	II 完形	A-13, A-14, B-14	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	良	2800 78 2804	A・B-14溝
	溝内遺物3	II 胴～底	A-13, A-14, B-13, B-14	浅黄	浅黄	○	○	良	3948	A・B-14溝
	溝内遺物4	II 口縁	A-14, B-14	明黄	黄	○		ウ	良	A・B-14溝
	溝内遺物5	II 胴部	A-14, B-14	にぶい濁	濁灰	○		小磯	良	A・B-14溝
	溝内遺物6	II 胴～底	A-13, A-14, B-13, B-14	灰黄濁	黄灰	○	○	良	229 80	A・B-14溝

※ 胎土について 石英はクリスタル光沢，とろとした表面のもの，長石は透明でヒビ，筋の入ったもの・すりガラス状・光沢のある白色のもの，角閃石と輝石をまとめて黒色鉱物とした。
その他は，ウ→雲母，火→火山ガラス，チ→チタン鉄鉱，磁→磁鉄鉱，赤→赤色小磯，灰→灰色小磯

(3) 遺物

土器 (第36~40図 109~170)

109~119は土師器の坏である。109, 110は全体的に薄手で底部から口縁部に向かいさらに薄くなっていく器形で外に向かって直行する。底部はやや上げ底である。109は外面に指による回転ナデの痕が少し残る。110は回転ナデの痕が顕著に残っている。底部径が6.5cmほどで安定している。

111は薄手で底部が小さく丸みを持ちながら立ち上がる。口縁部がやや外反気味である。高さは他のものと比較して低い方である。112, 113はやや厚手で体部の立ち上がりやや強い。112は指によるナデ痕を体部下部に残し、口縁部に向かい直行していく。113は口径13cmほどでやや大型である。口縁部が薄く仕上げられている。

114は口縁部を残さない体部である。外面に指によるナデの痕を残している。

115~119は底部である。115は底部に立ち上がりははっきりしている。116は厚手で内面が傾斜を持ち、大型製品の可能性がある。117は薄手で外面にナデ痕を残し立ち上がりが弱い。118は底部からの立ち上がりやや外反気味である。119も厚手で小破片ながら、大型製品の可能性がある。

120~125は土師器の塊である。高台付きを塊とした。120は高さが7.5cmほどで出土中ではやや大きい塊である。高台から立ち上がりは弱くやや内側に傾いて口縁部に向かい直行する。高台の作りは丁寧で外面は丁寧にナデで作られている。121は高台がやや高く薄い。内面の見込みが波打ち回転痕で凹凸している。外面は回転ナデによる痕跡を強く残して、口縁部は薄く仕上げられている。

122は高台を高く作るが、体部が短く、全体の高さは高くない。同じような厚さで体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。

123, 124は塊の高台部分である。123は体部との接合面できれいに剥がれている。内外面とも丁寧にナデで作られている。124は高台内面がやや厚く作られている。

125は小型の塊である。高台付近で欠損しているが、高台見込みの中央に工具で押した痕跡が見える。小さな点が3~4個、縦状の押圧痕が数条見られるが、何の模様か判別できない。

126~129は内黒土師器である。126は口縁部から体部である。内面に横状のミガキ痕を残す。127は底部付近である。見込みの黒色はやや薄い。高台途中部分から剥離している。128は見込み部分が広く、大型製品の可能性がある。129は見込みに放射状のミガキを認める。高台から体部への立ち上がりが弱い。高台見込みには丁寧な回転ナデ調整が行われている。

130は土師質の紡錘車である。中心部から3分の1程度が残る。径が6cm程度でどの面も平らに作られ、表裏の区別がつかない。他遺跡には土師器坏底部からの転用品もあるらしいが、この製品に関してはそれを裏付ける決め手が見られない。

131~163は土師器の甕である。131~133は胴部から口縁部に至る屈曲部が急で、内面にしっかりした稜線が出ている。口縁部は長めのものである。131は口縁部に内外面とも横方向のナデ調整が行われ、胴部内面は胎土中の砂粒が上方向に動くほどケズリが見られる。132は131よりもしっかりした内面の稜線があり、内面は斜方向上へのケズリが見られる。133は器壁がやや薄く、内面は横に近い斜方向上へのケズリがある。

134~138は胴部から口縁部に至る屈曲部が急で、内面にしっかりした稜線が出ていて、口縁部はやや短めのものである。134は外面に一部、縦方向のハケ目を見つける。内面のケズリ幅が大きく

斜方向および上方向へのケズリがある。重ねてケズリが入るところも多い。そのため、胴部の器壁の厚さが一定ではない。口縁部は内外面とも丁寧にナデ調整が行われている。135は胴部に比べ、口縁部は薄く器壁が作られている。内面は縦方向のケズリが丁寧に施され、上部では横ナデの上にケズリ痕が見られる。136は内面に斜方向上へのケズリが重ねて施されている。ここに分類した中では口縁部がやや長めである。137は口縁部に比べ、胴部の器壁が薄い。内面には斜方向へ重ねてケズリ痕が見られるが、その調整は丁寧である。138は口縁部がかなり短く、内面は横方向のケズリである。139～142は、胴部から口縁部に至る屈曲部がやや急程度のを分類した。139は口縁部から胴部までほぼ同じ厚さの器壁で、口縁部は外湾して、胴部の内面は縦方向のケズリが施されている。140は口縁部が短く、外反していく。内面は粗い斜方向上へのケズリ痕が残る。ケズリ幅は1cm程度であることが分かる。141は口縁部がかなり短く、屈曲部の器壁がかなり厚い。前述の138と同様に口縁部が短いと内面上部のケズリ方向は横向きである。142は口縁部が外湾して短く、器壁が薄い。胎土中に5mm程度の小石がいくつか見られる。

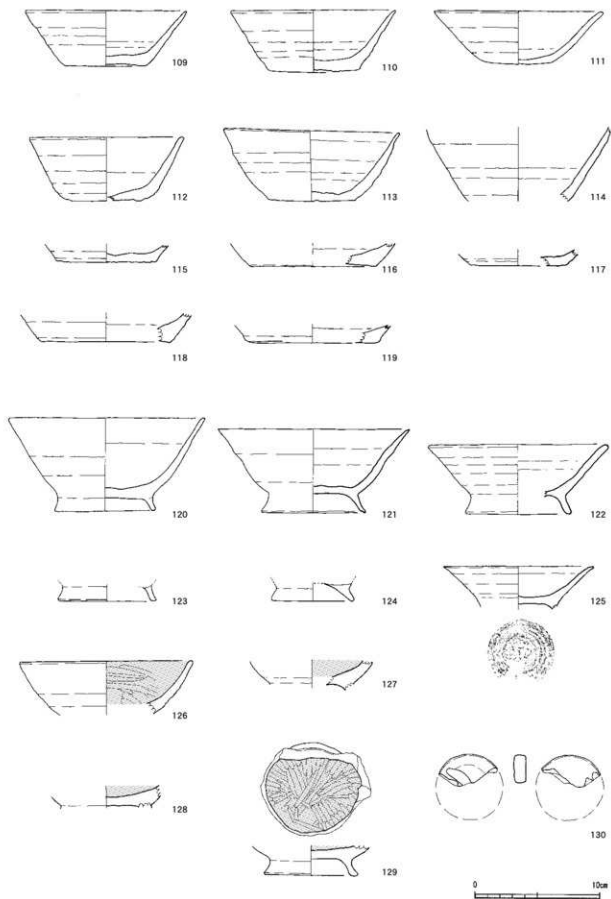
143～145は胴部から口縁部に至る屈曲部が緩やかであるものを分類した。143は内面が緩やかな屈曲部であるが、外面は屈曲部がはっきりしている。胴部外面の工具によるナデ調整が横方向に並行で丁寧に調整される。内面はやや斜めの縦方向でケズリが施され、下部に向かいかなり薄い器壁になる。144は口縁部が外湾気味で短く、胴部内面は縦方向に長くケズリ調整が行われている。145は口縁部内面に横方向のハケ目が見られ胴部外面には縦方向のハケ目、下部には斜方向のハケ目が行われる。内面には縦方向、斜方向のケズリ痕が重ねられ、どの調整も丁寧に規則正しい。

146～164は土師器の口縁部を並べた。146から153は口縁部の反りがやや強く、器壁が厚いものを分類した。146、147は口唇部から胴部に向かう屈曲部まで徐々に厚くなっていく形状である。148は内面の屈曲部の稜線がはっきりしている。149は傾きがまだ寝る形の可能性がある。その場合、口縁部はほぼ水平方向で広がる形状である。150はやや薄手の口縁部で外に直行していく。151の内面は、横方向のハケ目が残る。152、153は下部の反りから判断して短い口縁部である。

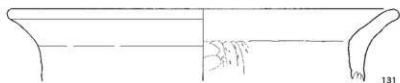
154～158は口縁部の反りがやや強く、器壁が薄いものを集めた。154は外面の反りが強い。155は口縁部の途中まで直行していき、先端部近くで反りが入る。155、156は154と違い、口縁部下部の反りが強い。156の器壁はとくに薄い。157は外面が徐々に反っていく。158は口縁部中央付近で非常に弱い屈曲部を作り反っていく形状である。

159～164は口縁部の反りが弱いものを分類した。159、161、162は口縁部の器壁が厚い。161は口縁部がとても短く、下部に反りが入る。163、164も口縁部が短い。

165～170は須恵器である。出土点数は少ないがいろいろな製品が出土している。165は蓋のつまみの部分である。上部中央部に極めて小さい突起部がある。回転ナデで丁寧に作られている。166は蓋の本体である。上部が欠損していて分らないが、165と同一個体の可能性を残す。下部側面に丁寧に回転ナデ調整が行われ、下部先端部はやや外に広がる形状をして薄く作られている。167は鉢形土器の口縁部である。器壁が薄く、内外面とも横方向の丁寧なナデ調整が行われている。168は甕形土器であるが、頭部の反りから判断して、壺形土器の可能性も残す。口縁部の反りが2段階に行われている。169は甕か皿か壺の脚部である。170は鉢型土器の口縁部であるが、焼成不足の須恵器であると専門家より御教示を受けた。



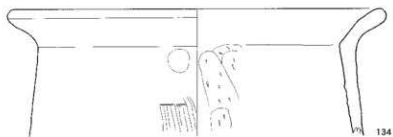
第36圖 古代 土師器・土製品実測圖



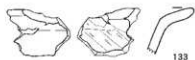
131



132



134



133



135



136



137



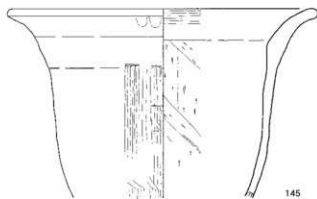
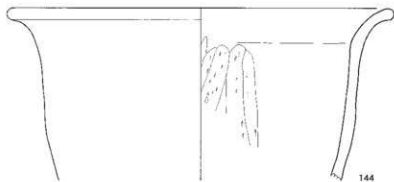
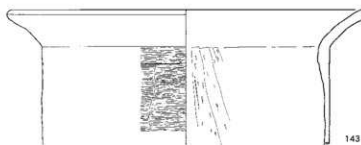
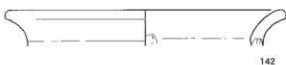
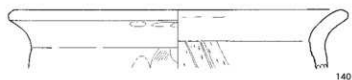
138



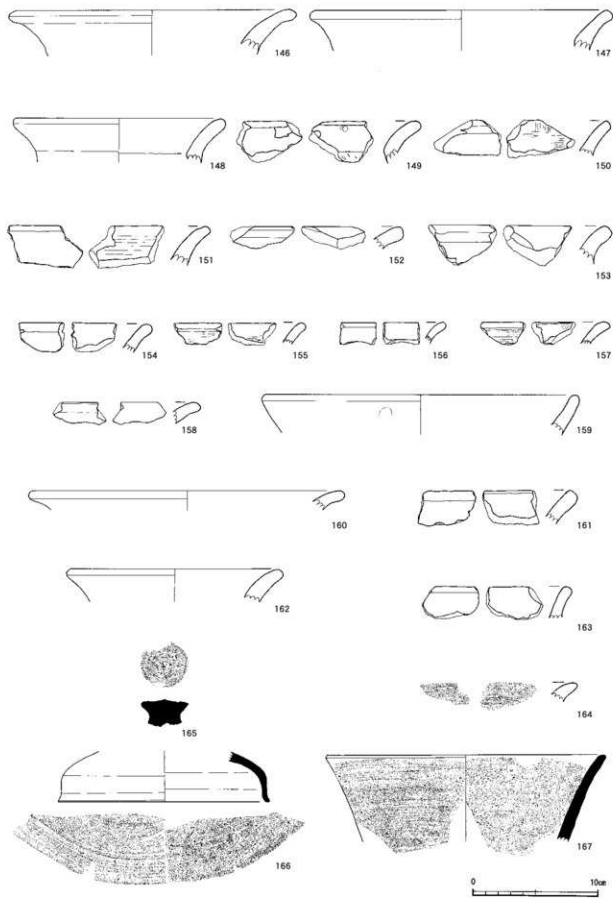
139



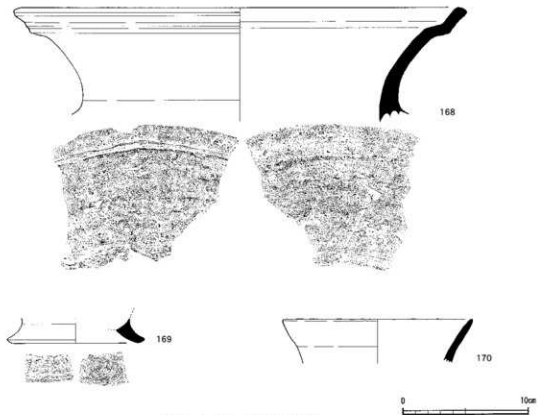
第37圖 古代 土師器 (撰①) 実測図



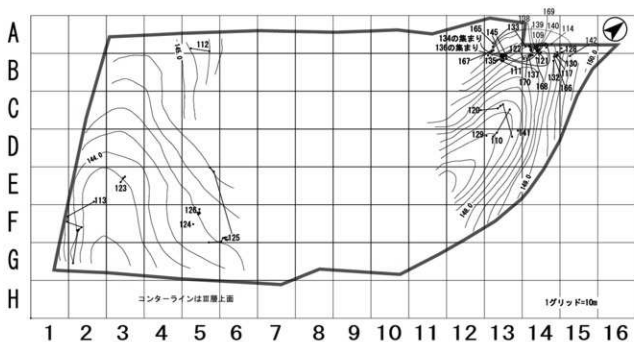
第38図 古代 土師器 (撰②) 実測図



第39回 古代 土師器 (壺③)・須恵器 実測図



第40図 古代 須恵器実測図



第41図 古代 遺物出土状況図

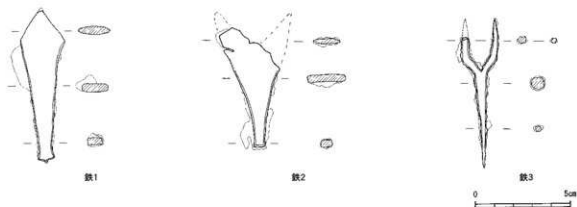
第8表 古代土器観察表

観測 番号	複製 番号	部位	部位	出土区	色調		胎土				焼成	遺物番号	備考		
					内	外	石英	長石	黒色鉱物	その他					
	100	II	完形	A-14	浅黄橙	浅黄橙					火	良	2311 2314		
	110	II	完形	C-13, D-13 D-14	橙	橙	○		△		赤	良	2914 2940 2941		
	111	II	完形	B-13	橙	橙	○	○			火, 赤	良	2478 2290		
	112	II	完形	A-5	橙	橙						良	2057 2800		
	113	II, III	完形	E-5, F-1 F-2, F-3 G-2	明赤陶	明赤陶						良	3075 572 598 721 1151 1152 1431 1432	スス付着	
	114	II	底部	A-14	にぶい黄橙	にぶい黄橙						良	2847		
	115	-	底部	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			火	良	一括		
	116	-	底部	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				ウ, 火	良	一括		
	117	II	底部	B-14	にぶい黄橙	にぶい黄橙					火, 赤	良	2305		
	118	-	底部	-	橙	橙					ウ, 火, 赤	良	一括		
	119	-	底部	-	にぶい赤陶	にぶい赤陶	○	○				良	一括		
	120	II	完形	C-13, D-13	浅黄橙	浅黄橙			○			良	2842 2910 2912 2936 一括		
	121	II	完形	A-14	浅黄橙と橙	浅黄橙	○	○			火, 赤	良	2310		
	122	II	完形	B-13, B-14	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○		火	良	2644 2263 2356 2643		
	123	II, III	高台	E-3	橙	橙					火, 赤	良	954 988 871		
	124	II	高台	F-5	黄黄	黄黄	○	○	○		火	良	900		
	125	II	口縁~底	E-5, F-5 F-6	橙	明赤陶	○	○	○		火, 赤	良	1185 646 611 1158 1160 1162 1163 1167 2257		
	126	II	口縁~体	F-5	黒	浅黄橙					火	良	906 904 905 917 918		
	127	-	胴~底	-	黒	橙		○	○		火	良	一括		
	128	II	底部	A-13, B-14								赤	良	2427 38 2402	
	129	II	高台~底	D-13	黒	浅黄	○	○	△		火	良	3052		
	130	II	紡錘車	B-14	浅黄	浅黄	○	○			火, 赤	良	2403		
	131	-	口縁	-	にぶい黄橙	橙	○	○	○		火, 赤	良		スス付着	
	132	II	口縁	B-14	にぶい黄橙 及にぶい黄	にぶい黄橙	△	○				良	2380		
	133	II	口縁	A-13, A-14	にぶい黄橙	明赤陶	○	○	○			良	2787 47	スス付着	
	134	II	口縁~胴	B-13	橙	明赤陶	○	○	○		火	良	2842 2530 2540 2537 2532 一括		
	135	II, III	口縁~胴	A-14, B-13	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			良	2824 2481 2485 2614 2484		
	136	II	口縁~胴	B-13	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		火	良	2500 2519 2674 2612	内外土も スス付着	
	137	II	口縁~胴	B-14	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○			良	2523 一括	スス付着	
	138	II	口縁~胴	A-14	にぶい黄橙	にぶい黄	△	○	○			良	2764	スス付着	
	139	II	口縁~胴	A-14, B-14	橙	にぶい橙	○	○	○			良	2357 2272 2274	スス付着	
	140	II	口縁~胴	A-14	明赤陶	橙	○	○			赤	良	2320		
	141	II	口縁	D-13	にぶい黄橙	にぶい黄	○	○	○			良	3110	スス付着	
	142	II	口縁	B-15	にぶい黄	赤陶	○	○	○		赤	良	2800	スス付着	
	143	II	口縁~胴	A-14	橙	橙	○	○	○		火	良	2724 2700 2739	スス付着	
	144	-	口縁~胴	-	赤陶	赤陶	○	○	△		火, 赤	良	一括	スス付着	
	145	II, III	口縁~胴	A-14, B-13	浅黄	浅黄	○	○	○		火	良	2645 2657 2350 2771 3031 3035 2305 3033	スス付着	
	146	II	口縁	B-13	明黄陶	明黄陶	○	○	○		火	良	2536		
	147	II	口縁	B-13, B-14	黄灰 明黄 黄灰 明黄	黄灰 明黄 明黄	○	○	○		火, 火	良	2333 2554		
	148	II	口縁	B-13	明黄	明黄	○				火, 赤	良	3004 土層集中一括		
	149	II	口縁	C-13	黄陶	にぶい黄橙					火	良	2244		
	150	-	口縁	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			良	一括		
	151	II	口縁	B-13	黄灰赤	黄灰	○	○	○			良	2409		
	152	-	口縁	-	にぶい黄橙	黄灰	○	○	○			良	一括		
	153	-	口縁	-	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○		火, 赤	良			
	154	II	口縁	A-14	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			良	2778	スス付着	
	155	II	口縁	A-15	黄	明赤陶					赤	良	2409		
	156	-	口縁	-	明陶	明赤陶	○				赤	良	一括		
	157	II	口縁	A-14	にぶい赤陶	にぶい赤陶	○	○	○		ウ	良	2435		
	158	-	口縁	-	黄陶	黄陶	○	○	○		火	良	一括		
	159	II	口縁	A-14	赤陶	赤陶	○	○	○			良	2330		
	160	II, IV	口縁	A-14, B-13	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		火, 赤	良	2537 2539 2719 土層集中一括		
	161	II	口縁	B-13	にぶい黄	橙	○	○	○			良	2583		
	162	II	口縁	B-14	橙	橙	△	○	○			良	2273		
	163	II	口縁	B-13	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			良	2406		
	164	II	口縁	A-15	黄灰陶	黄陶	○				灰	良	2636		
	165	II	つまみ	A-13	にぶい黄橙							良	61		
	166	II	胴~口縁	B-14	にぶい黄橙	黄灰	○	○			岩片	良	2424 2390		
	167	II, III	口縁	A-13	黄灰	黄灰	○				小礫	良	30 92		
	168	II	口縁~胴	B-14	にぶい黄橙	にぶい黄	○				小礫	良	2270		
	169	II	胴部	A-14	明陶	明陶	○	○				良	2744		
	170	II	口縁	B-14	灰・灰白	灰	○	○	○		火	不良	2265	焼成不逞	

※ 胎土について 石英はクリスタル光沢、とろとした表面のもの、長石は透明でヒビ、筋の入ったもの・すりガラス状・光沢のある白色のもの、角閃石と輝石をまとめて黒色鉱物とした。
その他は、ウ→黄母、火→火山ガラス、チ→チタン鉄鉱、磁→磁鉄鉱、赤→赤色小礫、灰→灰色小礫

そのほかの遺物『鉄製品』（第42図）

柿木段遺跡では、数点の鉄製品が出土した。時代の異なる要素が含まれると思われる。鉄1～鉄3は鉄鎌である。鉄1は外形が圭頭形であり、鎌身部の断面形は両丸造である。古墳時代に該当する鉄鎌と思われるが、C-13区の道跡上で出土した。鉄2は外形が雁股形である。鹿屋市の領家西遺跡の竪穴住居跡から類似品が出土している。鉄3は外形が雁股形である。鎌身部の断面は丸みを持ち、先端部が尖っていくのが特徴である。福岡県の才田遺跡に似た製品が出土している。



第42図 鉄製品実測図



第9表 鉄製品観察表

押洞	番号	層位	出土区	種類	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺物 番号
						cm	cm	cm	g	
42	鉄1	Ⅱ	C-13	圭頭鎌	鉄製品	8.1	2.4	0.5	27.0	2928
	鉄2	Ⅲ	D-3	雁股鎌	鉄製品	6.4	3.2	0.4	21.5	838
	鉄3	Ⅱ	D-4	雁股鎌	鉄製品	7.9	1.9	0.7	7.2	623

5 中世～近世の調査

(1) 概要

調査対象となった層位はⅡ層である。Ⅱ層の層位は場所により厚く堆積しており、Ⅱ層を細かく分層することが不可能なところもある。包含層であるⅡ層内では、中世と近世の層位による時期区分が困難であったため、この欄では中世から近世までを一括して取り扱う。

中世の遺物としては、土師器、輸入陶磁器（青磁・白磁・染付など）がみられる。青磁は14～15世紀を中心に、一部は15～16世紀にまたがるものがある。白磁は16世紀を中心とするものが見られる。染付は中国産（青花）もあるが、肥前系染付も見られる。一部は近世にまたがるものである。

近世の遺物としては、始良・加治木系の薩摩焼を中心に、土師質土器、肥前系陶器が見られる。

(2) 遺物

土師器（第43図 171）

171は小皿の破片である。底部には糸切りの切り離しの跡が残る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや丸みがある。器高は高めであり、中世後半のものと考えられる。

白磁（第43図 172～176）

172は口縁部片である。小破片のため全体が分からないが、直口する碗であろう。

176は白磁の杯の体部片である。体部下半で屈曲し、上半は直線的に成形され八角形ほどの多角形になると思われる。内面と体部上半には釉葉がかかっているが、破片の下端に釉葉はかかっていない。森田白磁分類の杯D類になる。

172・173・174は口縁部が外反する端反りの皿である。172は173、174に比べるとあまり外反しない。森田分類のE-2類になる。

青磁（第43図 177～190）

177～182は口縁部片である。177は直口する碗である。外面には幅の広い鎬蓮弁文が描かれている。釉色は緑がかった水色である。178は直口する碗である。外面には細線の蓮弁文が描かれている。釉色は薄い緑である。口縁部の直下は内外面ともにやや厚く成形され、その部分のみ釉葉が薄く透明に近い横線が入る。179は直口する碗である。口縁部から体部上半に雷文帯が描かれている。雷文の彫りの幅は広く深い。釉色は緑である。180は直口する碗である。外面には細線の雷文帯が描かれている。釉色は水色である。181は口縁部が外反する端反りの碗である。内外面ともに文様は描かれていない。釉色は緑である。182は直口する碗である。内外面ともに文様は描かれていない。釉色は濁った緑で、胎土は焼成不良のためか赤く陶器質になっている。

183～185は体部片である。183は碗の体部下半の破片であろう。内外面ともに文様は描かれていない。釉色は濁った緑で、胎土は焼成不良のためか赤く陶器質になっている。184も碗の体部下半の破片であろう。外面には線刻による文様が一部描かれているが、どのような文様かは不明である。釉色は緑である。185も碗の体部下半の破片であろう。外面に線刻による細線蓮弁文が描かれている。釉色は緑である。

186は碗の底部片と思われる。体部外面には線刻による文様の下端が描かれているが、どのような文様かは不明である。見込みにはスタンプによる花文と思われる文様が描かれている。また、外面には成形時のケズリ痕が残る。釉薬は高台外側まではかけられているが、高台内にはかけられていない。釉色は緑である。187は碗の底部片と思われる。見込みには薄く圏線のようなものが見える。外面には成形時のケズリ痕が残る。釉薬は高台内側までかかっているが、高台内にはかけられていない。釉色は緑である。

188は皿の体部片と思われる。内外面ともに文様は描かれていない。釉薬は見込みの底と体部下半にはかけられていない。見込みの部分は赤く変色している。釉色は灰色がかっている。189は稜花皿の口縁部片である。口縁部は外反する。口縁部内面に線刻による文様が描かれている。釉色は濃い緑である。

190は盤の体部片である。体部下半は丸みを持って立ち上がり、体部上半で屈曲する。体部内面の屈曲した部分より下には、線刻による縦線・花卉の文様が描かれている。釉色は濁った緑である。

染付（第43～44図 191～204）

191～192、194～195は器形や文様、胎土の状況から中国産染付（青花）とした。193、196～204は肥前系染付を並べた。

191～193は碗である。191は内面上部に横線が一条、外面には横線が2条と花柄を崩したような文様が描かれるが、詳細は定かでない。192は内外面に淡い横線が描かれ、外面下部に花卉状の模様を描かれる。193は内面の口縁部に雷文、外面下部に笹の葉状のものが描かれる。194は碗の底部である。文様は定かではないが漳州窯系と思われる。195は皿の胴部から底部である。胎土はあまりよくない。口縁部は外反する可能性がある。196は皿の底部である。見込み部分に花柄模様を描かれ、高台見込みにはハリ支えの痕が残る。

197～201は小碗および碗である。198は内面に四方たすきが描かれる。199は肥前系染付の可能性が高い。200と201は描かれた模様が見えない。

202～204は染付の底部である。203は外面に細い横線が描かれている。204は肥前系の手皿皿である。製作年代は1850～60代である。見込みに『大明？』と書かれているが、「？」の字は「嘉」か「寿」かそれ以外の字か定かではない。

薩摩焼（第44～45図 205～222）

205～211は碗である。205は内外面に間隔の狭い轆轤目を残し、腰部に弱い屈曲部がある。見込みに蛇の目軸刺ぎが見られる。鉛釉が施されている。206～211は鉄砂釉が施されている。206は口縁部が弱く外反して薄く作られている。207は底部から腰部まで直線的に、腰部付近で曲線的に、腰部から口縁部まで直線的に立ち上がる。見込みに少しだけ蛇の目軸刺ぎが見られる。208は器厚が薄く小型であるが、胎土中に赤い小礫を含み、それが外面に一部露出している。そこをきっかけに小破片としての割れ目になっている。209は口縁部がとても薄く作られ、尖り気味である。内外面の釉薬は摩耗気味で、手で触る感触にザラザラ感が伝わる。210は腰部付近から口

縁部まで外向きに直線的に立ち上がる。高台の様子は不明だが、口縁部や轆轤目の様子から、器高は高くないと思われる。211は碗の高台部分である。見込みに蛇の目軸剥ぎがしっかり残り、高台外の一部に軸葉が垂れている。高台畳付に、重ね焼きしたであろう下に置かれた別個体の軸が少し付いている。高台内面の作りはとても丁寧でほぼ平坦である。

212～217は土瓶の破片である。212は蓋である。天井部からつまみ部を欠損する。肩部から口縁部にかけて軸が施されるが、見受け部や口唇部に軸は見られない。小片で断定はできないが、天井部が浅くレンズ状に窪んでいくようである。213も蓋である。212と同様に天井部からつまみ部を欠損し、底部も途中から失っている。軸葉は見受け部の上半分まで施されている。214、215は土瓶本体の口縁部である。214は内外面の軸葉は摩耗気味で、手で触る感触にザラザラ感が伝わる。215は口唇部付近とその下部では軸葉の色を変えている。内面の上部に軸がかけられ、施軸線が見られる。216は土瓶の把手部分である。穿孔部分は表面が7mm程度、中央部が4mm程度で、両側から穿孔して貫通させている。把手部分全体と土瓶本体内側に施軸がある。217は土瓶の底部である。脚部にあたる突起物が付く。内面に施軸されるが、外面には軸葉が施されていない。

218は土鍋の底部である。器厚が厚いため土鍋と判断した。内面は指の太さ程度の回転状の成形痕を残している。

219は壺の口縁部である。口唇部を内側から折り返し気味に肥厚させ、玉縁状に作ってある。

220は香炉である。腰部から口縁部にかけて垂直気味に立ち上がり、口縁部で内側に屈曲している。口唇部内側から外面の腰部まで軸が施されるが、内面には施軸がない。

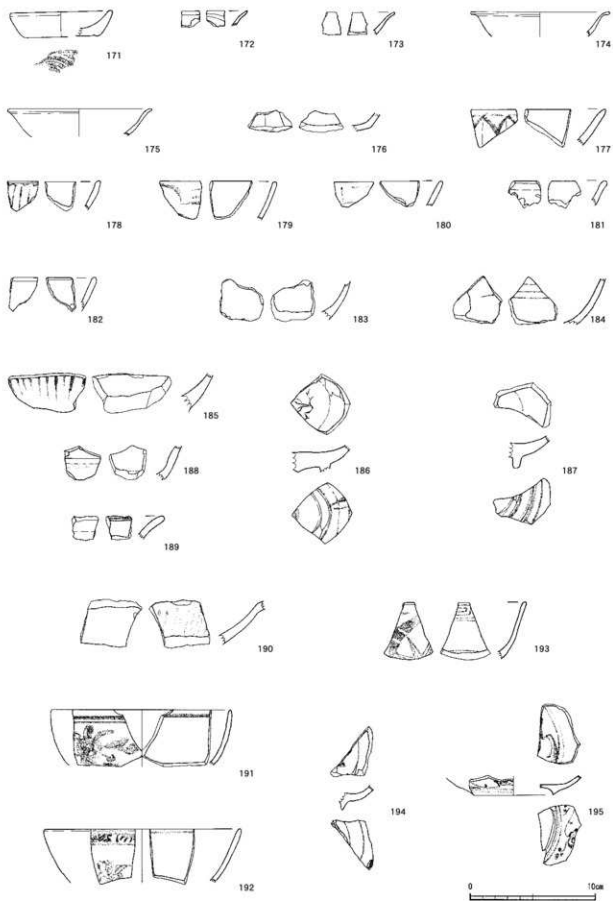
221は灯明皿である。回転糸切痕のある平底で、内面は僅かに曲線を描いて、外面は直線的に斜めに立ち上がる器形である。内面と口縁部外側のみ軸葉が施される。

222は蓋である。中央部が欠損していて、どのようなつまみが付いていたか不明である。上面(天井部)と下面(内面)はほぼ並行した形で底部に向かい、底部付近でやや肥厚する。

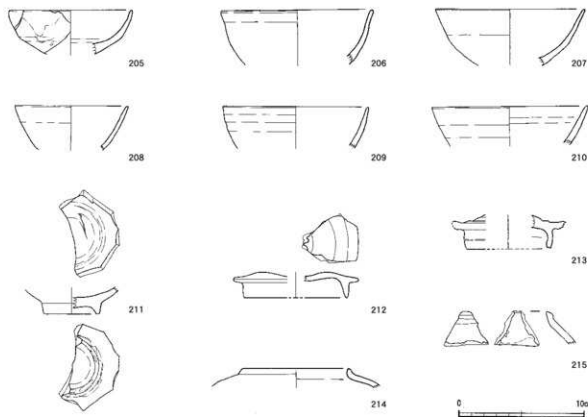
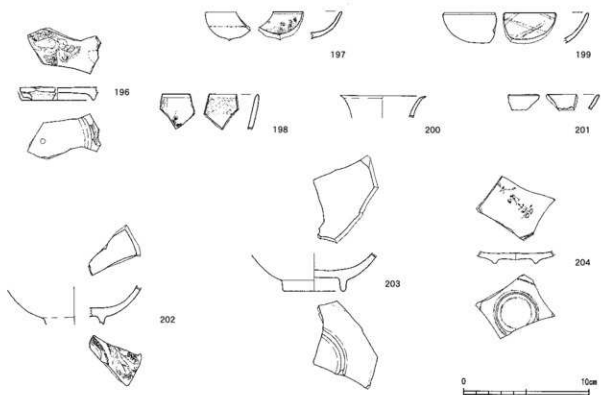
その他の出土遺物(第45図 223～224)

223は焙烙(ホウロク)の把手部分である。持ち手部分から焙烙本体接合部まで八の字状に広がり、接合部は凹みを持ちながら接合されていた。上部と下部のラインも弱い凹みを持ち、持ちやすい形状で仕上げている。土師質土器である。

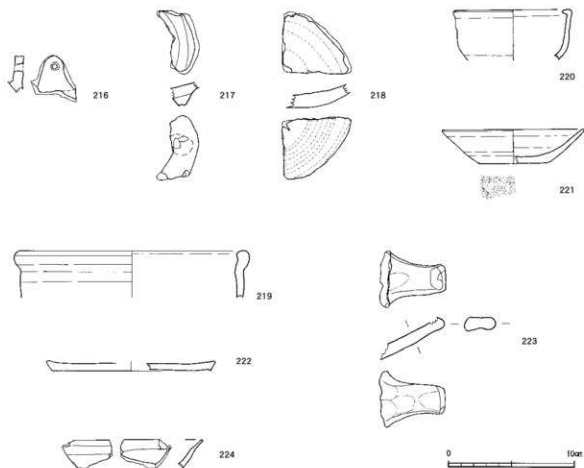
224は肥前系陶器の皿である。口縁部が弱く外反して薄く作られている。



第43図 中世～近世 遺物（土師器・白磁・青磁・染付）実測図



第44図 近世 遺物（肥前系染付・薩摩焼）実測図



第45図 近世 遺物（薩摩焼・肥前系）実測図

第10表 中世・近世土器観察表①

探検 番号	掲載 番号	層位	部位	出土区	色調		胎土				焼成	遺物番号	備考
					内	外	石英	長石	黒色鉱物	その他			
43	171	II	口縁~底	G-4	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○		赤	良	605	
	172	II	口縁	G-4	灰白	灰白					良	607	16c
	173	II	口縁	E-5	灰白	灰白					良	643	16c
	174	II	口縁	G-4	灰白	灰白					良	602	16c
	175	II	口縁	E-3	灰白	灰白					良	522	16c
	176	II	体部	F-5	灰白	灰白					良	636	14~15c
	177	II	口縁	F-2	オリーブ灰	オリーブ灰					良	500	14c 以降
	178	II	口縁	D-3	オリーブ灰	オリーブ灰					良	529	15c末~16c中
	179	II	口縁	D-3	オリーブ灰	オリーブ灰					良	501	14~15c
	180	II	口縁	E-3	明緑灰	明緑灰					良	536	14~15c
	181	II	口縁	G-3	灰オリーブ	灰オリーブ					良	581	14~15c
	182	II	口縁	F-3	オリーブ灰	オリーブ灰					不良	537	焼成不足

※ 胎土について 石英はクリスタル光沢、ところとした表面のもの、長石は透明でヒビ、筋の入ったもの・ナリガラス状・光沢のある白色のもの、内閃石と輝石をまよめて黒色鉱物とした。
 その他は、ク→雲母、火→火山ガラス、チ→チタン鉄鉱、磁→磁鉄鉱、赤→赤色小礫、灰→灰色小礫

第11表 中世・近世土器観察表②

採掘 番号	海抜 番号	層位	部位	出土区	色調		胎土				焼成	遺物番号	備考
					内	外	石灰	頁石	黒色炭物	その他			
43	183	II	体部	F-2	オリブ灰	オリブ灰					不良	509	焼成不足
	184	II	体部	D-5	オリブ灰	オリブ灰					良	626	14~15c
	185	II	体部	D-3	オリブ灰	オリブ灰					良	523	15c 末~16c 中
	186	-	底部	-	オリブ灰	オリブ灰					良	一括	14~15c
	187	II	底部	F-4	オリブ灰	オリブ灰					良	505	14c 後半~
	188	II	体部	D-2	灰	灰					良	502	福建産
	189	II	口縁	F-4	暗オリブ	暗オリブ					良	500	明代
	190	II	体部	D-5	オリブ灰	オリブ灰					良	625	勝徳文 元~明代
	191	II	口縁	G-2	灰白	灰白					良	508	津州産 16C末~17c 前
	192	-	口縁	-	灰白	灰白					良	一括	原産地 16~17c
	193	II	口縁	E-2	灰白	灰白					良	512	肥前 18D~60
	194	II	底部	F-4	パールホワイト	パールホワイト					良	505	津州産 16c 後半~17c 前半 宮原産 玉取獅子 16c 前半~44
	195	-	胴~底	-	オリブ灰	オリブ灰					良		
	44	196	II	底部	F-3	ブルーウォッシュ	ブルーウォッシュ					良	538
197		II	口縁	D-4	藍白	藍白					良	641	肥前 17c 前半~ 18c 初め
198		II	口縁	E-2	ブルーウォッシュ	ブルーウォッシュ					良	512	肥前 18c 後半
199		-	口縁	-	灰白	灰白					良	一括	肥前 18c 後半
200		II	口縁	G-3	灰白	灰白					良	503	肥前 18c 前半
201		II	口縁	F-2	灰	灰					良	501	18c
202		-	底部	-	灰白	灰白					良	一括	肥前 Ⅲ 18c 前半
203		II	底部	F-5	明オリブ灰	明オリブ灰					良	614	肥前 Ⅲ 17c 後半
204		II	底部	G-2	藍白	藍白					良	562	肥前 天龍庵 1860~60
205		II	口縁~腰	E-3	明黄褐色	明黄褐色					良	515	
206		-	口縁~腰	-	黒褐色	黒褐色					良		
207		-	口縁~腰	-	黒褐色	黒褐色					良		
208		-	口縁~腰	-	黒褐色	黒褐色					良		
209		I	口縁~腰	-	黒褐色	黒褐色					良		表土一括
210	-	口縁~腰	-	黒	黒					良			
211	II	高台	D-5	黒褐色	黒褐色					良	628		
212	-	天弁~口縁	-	灰黄褐色	黒褐色					良			
213	II	胴~口縁	D-2	褐色	黒褐色					良	504		
214	-	口縁	-	灰	灰					良	一括		
215	-	口縁	-	灰黄褐色	明黄褐色					良	一括		
45	216	-	肥手	-	暗褐色	暗褐色					良	一括	
	217	-	底部	-	にぶい褐色	赤褐色					良	一括	
	218	-	底部	-	黒褐色	赤灰 暗赤褐色					良		
	219	II	口縁	G-4	オリブ黒	オリブ黒					良	506	
	220	I	口縁~腰	-	黒褐色	黒					良		表土一括
	221	-	口縁~底	-	黒褐色	オリブ黒					良	一括	
	222	-	天弁~口縁	-	褐色	褐色					良	一括	
	223	-	肥手	-	にぶい黄褐色						良	一括	
	224	-	口縁	-	灰黄	灰黄					良	一括	

6 発掘調査のまとめ

(1) 柿木段遺跡の特徴

柿木段遺跡は標高150mの小さな谷の窪地とその下部にある標高145mのやや広い谷の平坦部からなる地形である。地形的にこの周辺を往来しようと思えば、必然的に遺跡の範囲内を通過もしくは逗留することが考えられる。古くから人々の活動が見られ、時代としては、縄文時代から弥生・古墳・古代・中世・近世に至る、小規模ながらも時代をまたがる複合的な遺跡としての特徴が本遺跡にはある。

ア 縄文時代

縄文時代前期に該当する土器は曾畑系2点、後期に該当する土器は指宿式、市来式、中岳式等7点出土した。これらは当遺跡周辺でみられる土器であり、この時代からの生活の営みがうかがえる。晩期に該当する土器は数が増え、黒川式土器を中心に深鉢、浅鉢、マリ形、ボウル状の形など多様な形の土器が出土する。遺構は落とし穴や土坑、石斧埋納遺構も見つかっている。柿木段遺跡では中核をなす時代である。

イ 弥生・古墳時代

弥生時代に該当する土器は山ノ口式土器1点で、これは弥生時代の中期末から後期初頭に該当する土器で、大隅半島を中心に宮崎県南部、薩摩半島南部に広がる土器である。他に磨製石鏃などの出土も見られる。古墳時代の土器は成川式土器の甕形土器や埴形土器の出土が見られる。この時期に該当する圭頭形の鉄鏃も出土している。

ウ 古代

古代に該当する層位であるⅡ層は台地上からの流入土が主体をなし、谷状地形にあるため流れ込んだ土砂等が厚く堆積していた。そのⅡ層の下部のⅡb層とⅡc層が古代の遺物包含層である。遺物は土師器の坏、埴、甕などや須恵器の蓋、鉢、壺等が出土している。遺構としては、溝状遺構が19本、道跡が47条検出されている。また、カマド状遺構が2基検出され、谷状地形の中に生活の営みが見られる遺跡として無視できないものである。大隅半島の谷状地形を知る上で貴重な資料である。

エ 中世・近世

中世・近世の遺物としては、土師器、輸入陶磁器（青磁、白磁、青花など）や肥前系の染付が見られる。また、地場産の始良・加治木系薩摩焼を中心に土師質土器、肥前系陶器も見られる。

(2) 石斧埋納遺構について

柿木段遺跡では、石斧埋納遺構が発見されている。県内他遺跡の石斧埋納遺構と比較してみたのが、第12表である。

薩摩半島と大隅半島に偏りなく出土例が見られる。時代は縄文時代早期、前期、晩期に見られ、時代幅は広い。埋納の仕方に何らかの決まりがあるのではないかと考え、主軸方向や石斧の傾き等を確かめてみたが、これについても、いろいろなパターンが出ている。方位についてはこだわりがなく、基部と刃部を同一方向にあわせて埋納するものがあれば、向きにこだわりなく放射線状に埋納されるものもある。傾きについては、ほぼ水平方向に埋納されるものや、斜めに埋納されるもの、縦方向に傾きが急なものといろいろな埋納の仕方が見られる。

石斧の状態は、使用痕らしい剥離や敲打がみられるもの、未使用のもの、製作途中とおもわれるもの、別製品といっしょに埋納されるもの等あり、これについても、規則性は見られない。

第12表 鹿児島県内の石斧埋納遺構出土例

遺跡名	所在地	時代	石斧の種類	構成点数	主軸方向	明確な掘り込み	並べ方
市ノ原遺跡 第5地点	日置市	縄文時代の中で特定できず	打製石斧4	4	N10° W ほぼ北方向	見られない	方塚北側平置き2点と方塚東側1点 方塚西側1点の平置き
前畑遺跡	麒麟市内市	縄文時代早期	打製石斧4	7	定まらず	確認できない	方塚北西2点2点、方塚南東1点、方塚北東1点の平置き、他に大型割片2点平置き
界子伝遺跡	霧島市	縄文時代早期	局部磨製石斧4	4	不明	不明	方塚上立位2点、側縁上下2点
大小原遺跡	南大隅町	縄文時代早期	局部磨製石斧4	4	N07° W 北西方向	不明	方塚南東、4点が天地同一方向で平置き積み上げ
上野原遺跡第10地点 遺構番号1	霧島市	縄文時代早期	打製石斧1 磨製石斧1	2	不明	あり	縦溝掘いで側縁上下の立位
上野原遺跡第10地点 遺構番号2	霧島市	縄文時代早期	局部磨製石斧3 磨製石斧1	4	不明	あり	方塚下の立位
上野原遺跡第10地点 遺構番号3	霧島市	縄文時代早期	局部磨製石斧5	5	不明	長径22cm短径18cmの楕円形、深さ16cm	方塚上下の立位
上野原遺跡第10地点 遺構番号4	霧島市	縄文時代早期	打製石斧1 局部磨製石斧3	4	不明	不明	側縁上下3点、他に直交の平置き1点
上野原遺跡第10地点 遺構番号5	霧島市	縄文時代早期	局部磨製石斧2	2	不明	不明	方塚下の立位
上野原遺跡第10地点 遺構番号6	霧島市	縄文時代早期	局部磨製石斧8	8	不明	長径25cm短径18cmの楕円形、深さ13cm	方塚下の立位2点、側縁上下の立位2点、方塚上下入れ子の立位4点
飯塚ヶ岡遺跡	鹿屋市	縄文早期 レベルは縄文早期 形態は晩期の石斧	打製石斧5	5	N14° E ほぼ北方向	不明	側縁上下の立位3点、方塚下の立位2点
南田代遺跡（1号）	南九州市	縄文時代前期	打製石斧1、打製石斧（製作途中）2	5	N40° E 北東方向	浅い、遺物の分だけ掘り込まれる。	側縁上下の立位、整然と隙間無く並べられた状態、他に大型割片2
南田代遺跡（2号）	南九州市	縄文時代前期	磨製石斧6	6	N42° W 北西方向	浅い、遺物の分だけ掘り込まれる。	方塚北西5点、方塚南1点の平置き
上水原遺跡	南さつま市金峰町	縄文時代前期	磨製石斧1 磨製石斧未製品?1	3	N45° E 北東方向	確認できない	北東方向上40°の傾斜をなして、一部の重ね、平置き、楕円形の微1点。
村原（原ノ原）遺跡	南さつま市	縄文時代前期	局部磨製石斧3	3	N30° W ほぼ北方向	不明	方塚北1点と方塚南1点の重なり平置き、方塚北1点の平置き
上ノ原遺跡	いちき串本町	縄文時代前期	打製石斧2	2	定まらず	方形で深さ3cm	方塚西1点、方塚南1点の平置き、すぐ隣の掘り込み5点の疑似品
鳴神遺跡	曾於市	縄文時代晩期	打製石斧磨製石斧	22	不明	浅い、詳細は不明	大部分が平置き積み上げ
上野原遺跡 第2～7地点 E-5区	霧島市	縄文時代晩期	打製石斧3	3	定まらず		基盤どうしが重なり合う方向で、平置き、積み重ね、土層片が隣接する。
柿木段遺跡 （本遺跡）	大崎町	縄文時代晩期	局部磨製石斧3 打製石斧1	4	N57° E 北東方向	確認できない	北方向上の30°の傾斜をなして平置き積み重ね、少し離れた所に打製石斧1点、欠製品1点

埋納された構成点数であるが、4個程度が一番多いが、2～3個程度のものや、二桁点数も存在し、いくつでないといけないというルールはないようである。埋納する意識があれば、たとえそれが1点でも埋納遺構であるが、発掘された段階で、1点の遺物は埋納遺構とはとらえることはできない。また、遺物1点の埋納遺構はありえないと断定することもできない。明確な掘り込みのない限り、単なる一つの遺物でしかとらえることができないことは課題である。

埋納遺構の掘り込みについてであるが、埋納された場所に掘り込みが見られない、または確認できないことがある。これは単に掘り込みはないと断定するのではなく、埋土とその周囲にあたる土層がほぼ同一である場合や、すぐに人為的に埋められた場合は区別がつきにくいことも考えられる。

結論として、石斧を埋めるという状態は、石斧を隠したということか一時的にこの場所に貯蔵したのか、または、現代社会で行われている針灸養的な何らかの祭祀行為であるか、現段階で断定できないが、その行為自体が縄文時代の狩猟生活中心の中に受け継がれている人為的で意図的な行為であることはまちがいない。柿木段遺跡（本遺跡）でもその行為を行った人がいた、という事実がある。

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・丹生勉・尾高真・廣田正史・瀬谷薫・小林壯一
Zaur Lotkhatzke・Ineza Jorjolani・中村賢太郎

1. はじめに

鹿児島県曾根郡大崎町に位置する榑木段遺跡と榑山遺跡の2遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第13表のとおりである。
榑木段遺跡の試料は、E-3区IV層出土の土器（深鉢）口縁部外面に付着した炭化物（PLD-12590）とA-14区III層のかまど内より出土した炭化材（PLD-12500）の計2点である。榑山遺跡の試料は、1TのB-5区IV層出土の土器（壺）底部内面に付着した炭化物（PLD-12501）1点である。なお、炭化材の部位はPLD-12500が不明である。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1,5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第13表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-12590	遺跡名：榑木段遺跡 調査区：E-3区 層位：IV層 遺物：口縁部外面 試料No.：1197	試料の種類：土器付着炭化物 部位：口縁部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸：フルオリン酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：0.1N、塩酸：1.2N） セルフアッタクス
PLD-12500	遺跡名：榑木段遺跡 調査区：A-14区 層位：III層 遺物：かまど	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸：フルオリン酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：0.1N、塩酸：1.2N） セルフアッタクス
PLD-12501	遺跡名：榑山遺跡 調査区：1T、B-5区 層位：IV層 試料No.：28と115	試料の種類：土器付着炭化物 部位：底部内面 状態：dry	超音波洗浄 酸：フルオリン酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：0.1N、塩酸：1.2N） セルフアッタクス

3. 結果

第14表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行った暦年代に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に校正した年代範囲、図1に暦年代校正結果をそれぞれ示す。暦年代校正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めたい値であり、今後暦年代校正曲線が更新された際この年代値を用いて暦年代校正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基準にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年代校正の詳細は以下の通りである。

暦年代校正

暦年代校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730

±40年）を校正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年代校正にはOxCal4.0（校正曲線データ：INTCAL10）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代校正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

第14表 放射性炭素年代測定及び暦年代校正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年代正年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-12590 試料No.：1197	-20.35±0.17	2008±26	2670±25	856BC (68.2%) 1630BC 2710BC (95.4%) 1707BC	
PLD-12500 遺物：かまど	-25.58±0.15	1286±24	1215±25	711AD (68.2%) 303AD 827AD (95.4%) 190AD	711AD (1.5%) 776AD 766AD (83.3%) 388AD
PLD-12501 試料No.：28と115	-25.64±0.16	2169±25	2170±25	300BC (50.8%) 2750BC 227BC (1.7%) 2520BC 2308BC (25.5%) 1700BC	300BC (50.8%) 2750BC 201BC (41.2%) 1690BC 1311BC (1.4%) 1160BC

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年代校正を行った。2σ暦年代範囲に着目して遺跡ごとに結果を整理する。なお、考古学編年と暦年代校正結果との対応関係については、小林（2008）、春成・今村（2001）と西本編（2006、2007）を参照した。

榑木段遺跡では、E-3区IV層出土の土器付着炭化物（PLD-12590）は紀元前9世紀初頃～8世紀初頃の範囲（800～797calBC）を示した。これは弥生時代早期～前期に相当する。A-14区III層のかまど内より出土した炭化材（PLD-12500）は8世紀前半～9世紀後半にかけての範囲（711～888calAD）を示した。ただし、かまど内の炭化材は部位不明であり、同様の年齢である可能性もある。そのため、枯死・伐採年より古い年代を示している可能性を考慮する必要がある。

榑山遺跡の1TのB-5区IV層出土の土器付着炭化物（PLD-12501）は紀元前4世紀中頃～2世紀後半にかけての範囲（300～119calBC）を示した。これは弥生時代中期に相当する。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
春成 春雄・今村 肇 編 (2004) 弥生時代の実年代, 253p, 学生社.
小林 謙一 (2008) 縄文時代の暦年代、縄文時代の考古学 2 歴史のものさし, 257-269, 同成社.
中村 俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20,
西本 豊弘 編 (2006) 新弥生時代の はじまり 第1巻 弥生時代の 新年代, 143p, 雄山閣,
西本 豊弘 編 (2007) 新弥生時代の はじまり 第2巻 縄文時代から弥生時代へ, 185p, 雄山閣.
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

野方前段遺跡 A 地点

第4節 野方前段遺跡A地点

1 発掘調査の方法

野方前段遺跡A地点は、標高約200mの台地の縁辺部に立地し、同じ台地上で谷をはさんで北側に野方前段遺跡B地点、天神段遺跡が位置する。調査前の現地は、台地上の畑地であった。調査区（グリッド）はセンターライン上の「STA74+80」と「STA75」を結ぶ直線をもとに設定した。10m間隔のグリッドとし、南側から北側に向かって1, 2, 3…、西側から東側に向かってA, B, C…とした。

確認調査は、平成19年5月16日～平成19年7月13日（実働30日間）まで実施した。野方前段遺跡では、グリッドを基準とした確認トレンチを17か所設定し、うち10か所をA地点に設定した。

調査は、調査区全体を覆う雑草・雑木の伐採を人力で行った後、重機で表土を除去した。その後、トレンチを設定し人力で掘り下げを行った。出土遺物については、取り上げを行った後に掘り下げを続け、検出した遺構については、写真撮影、平板実測のみを行った。いくつかのトレンチでは、遺構に影響のない部分に下層確認トレンチを設定し、Ⅲ層（シラス）上面まで確認調査を実施した。



第1図 地形図及びグリッド配置図

確認調査の後、本調査を平成19年7月16日から平成20年3月19日まで実施した。調査は、重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき遺物包含層については人力による掘り下げを行った。遺物については平板実測後取り上げを行い、遺構については実測・完掘・写真撮影を行った。無遺物層については、一部重機で慎重に掘り下げまで行った。Ⅷ層（薩摩火山灰）上面までの調査を実施した。

2 層位

層位については、Ⅱ層（安永ボラ）は遺跡全体に分布するが、ボラ抜きが行われており、部分的に残在する状況である。B地点には集めたボラを積み上げた“ボラ塚”もみられた。

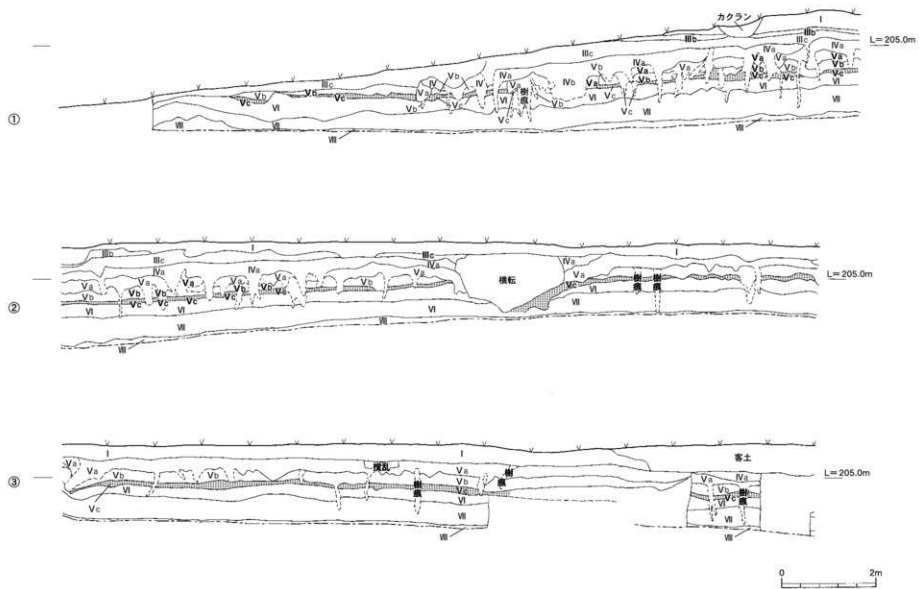
Ⅳ層全体に含まれる黄色バミスは桜島起源のP7火山灰層で、噴出年代は約4,200年前とされる。目に見える層厚を成す堆積は認められず、本遺跡の場合Ⅳ層中の黒色土層中に散存する状況であった。色調は野方前段遺跡A地点は黒色土であるのに対し、一方、谷をはさんで50m程の位置にある野方前段遺跡B地点・天神段遺跡のⅣ層ではバミスの混入度合いが高く、黄褐色を呈していた。

V層は鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰層で、噴出年代は約6,300年前とされ、一次堆積を含め良好に残存し、Ⅵa層とⅦb層に分層できる。

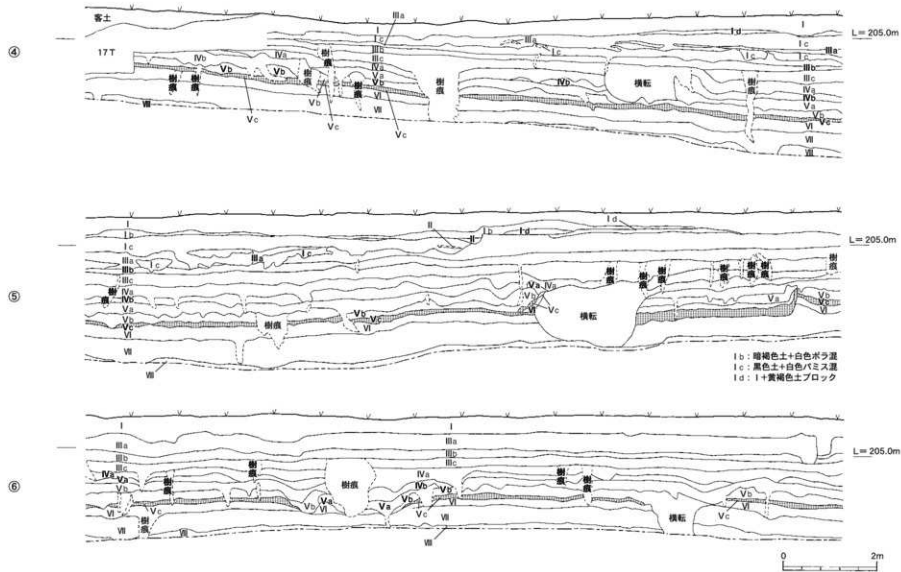
Ⅵ～Ⅶ層中には、桜島起源のP13（9,500年前）が確認されたが、曾於市内の遺跡で多くみられたP11は確認されなかった。

遺物包含層は、Ⅲ層、Ⅳ～Ⅴ層、Ⅵ～Ⅶ層の概ね3枚である。

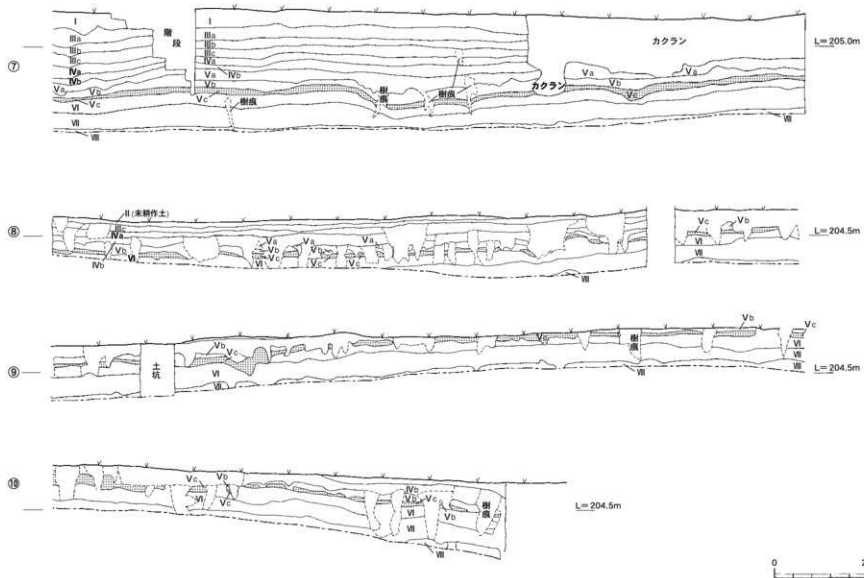
I層	表土	
II層	明黄色バミス	安永ボラ点在 1779年の桜島起源の噴出物
IIIa層	黒色土	近世～中世の遺物を含む
IIIb層	暗茶褐色土	古代～弥生時代の遺物を含む
IIIc層	オリブ褐色土	古代～弥生時代の遺物を含む
IVa層	暗茶褐色土	縄文時代晩期～後期の遺物を含む
IVb層	黒褐色土	P7点在 桜島起源の噴出物
Va層	黒色土	縄文時代中期～前期の遺物を含む
Vb層	赤褐色土	アカホヤ火山灰の二次堆積土
Vc層	明赤褐色バミス	アカホヤ火山灰 鬼界カルデラ起源の火山灰
VI層	明黄褐色土	縄文時代早期の遺物を含む
VII層	黒褐色土	縄文時代早期の遺物を含む
VIII層	黄白色火山灰土	P14 桜島起源の噴出物
IX層	黒色粘質土	
X層	暗茶褐色粘質土	
XI層	黒褐色弱粘質土	
XII層	暗茶褐色土	
XIII層	褐色土	P15点在 桜島起源の噴出物
XIV層	暗黒褐色硬質土	P15 桜島起源の噴出物
XV層	暗褐色土	P17点在 桜島起源の噴出物
XVI層	黄白色硬質土	
XVII層	黄白色砂質土	
XVIII層	黄褐色砂質土	シラス



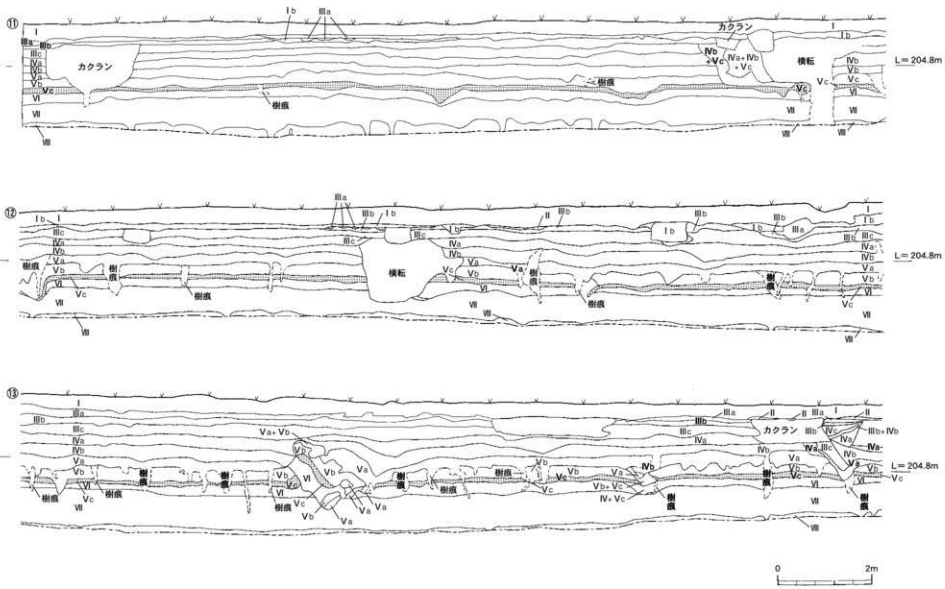
第2図 土層断面図1



第3図 土層断面図2



第4図 土層断面図3



第5図 土層断面図4

3 縄文時代

本遺跡では縄文時代早期、前中期、後晩期の遺構・遺物が検出されている。

(1) 早期

早期では、集石遺構 6 基が検出され、土器 31 点と石器 36 点が出土している。

ア 遺構

遺構は、集石遺構 6 基と炭化木が検出されている。

集石遺構（第 8 図～第 10 図）

K-9～10区、I-6・13区で 6 基検出されている。

1号集石遺構（第 8 図）

I-12区VII層で検出されている。礫は100×100cm程の円形の範囲に集中し、その下には90×80cm、深さ8cm程の皿状の掘り込み遺構を検出している。なお、その外側180×170cm程に礫が散存するが、これらの礫は、掘り込み遺構に伴う密集域からはみだしたものと判断できる。なお、構成礫は拳大288個からなり、その平均重量は116gである。

2号集石遺構（第 8 図）

H-6区VI層で検出されている。範囲は約90×120cmで、約50×60cmの楕円形に礫は集中している。拳大の角礫を中心に44個からなり、平均重量は200gである。掘り込み面は確認されていない。

3号集石遺構（第 8 図）

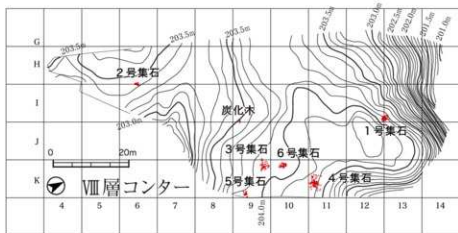
K-9区VII層で検出されている。約250×300cmの範囲に礫が拡散し、10cm大の角礫を中心に55個からなり、平均重量は120gである。掘り込み面は確認されていない。

4号集石遺構（第 9 図）

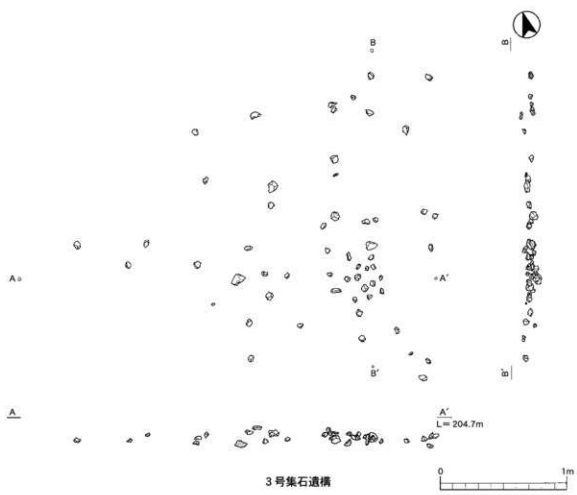
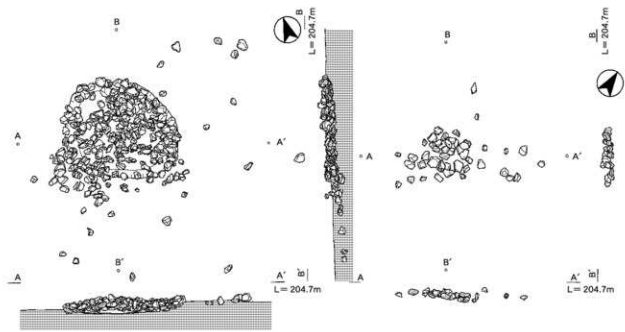
K-11区VI層で検出されている。約430×320cmの範囲に礫が拡散し、10cm大の角礫を中心に110個からなり、平均重量は110gである。掘り込みは確認されていない。土器片と打製石斧を伴う。

5号集石遺構（第 10 図）

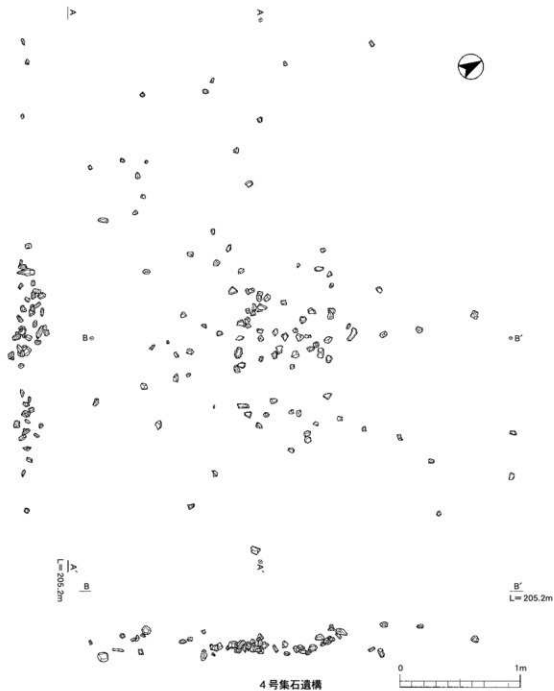
K-9区VI層で検出されている。範囲は約120×100cmで、約30×30cmの円形に礫は集中している。拳大の角礫を中心に42個からなり、平均重量は172gである。掘り込みは検出されていない。



第 7 図 縄文時代早期 遺構配置図



第8図 集石遺構 1



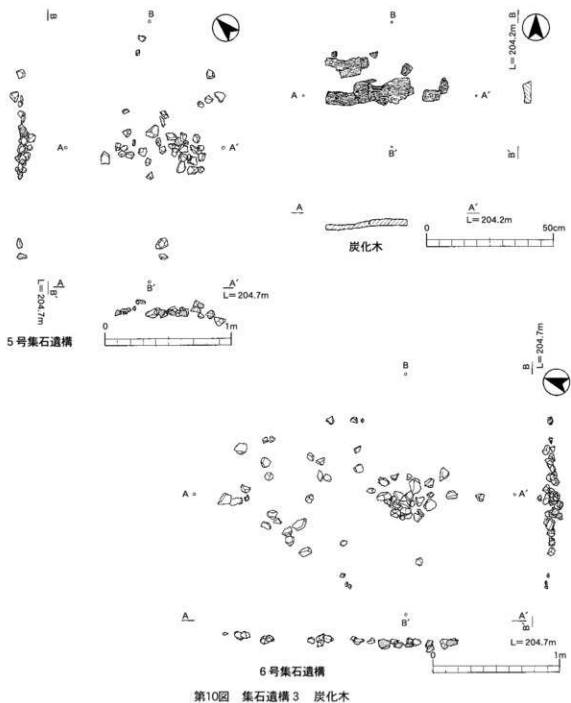
第9図 集石遺構2

6号集石遺構 (第10図)

K-6区VI層で検出されている。範囲は約140×210cmの範囲で、約40×50cmの楕円形に礫は集中している。拳大の角礫を中心に57個からなり、平均重量は240gである。礫群に伴う掘り込み遺構は検出されていない。

炭化木 (第10図)

I-9区VII層で検出されている。周囲の半径3m以内には炭化物が散らばっている。



遺構内遺物 (第11図 1~6)

集石遺構 3号出土遺物 (第11図 1)

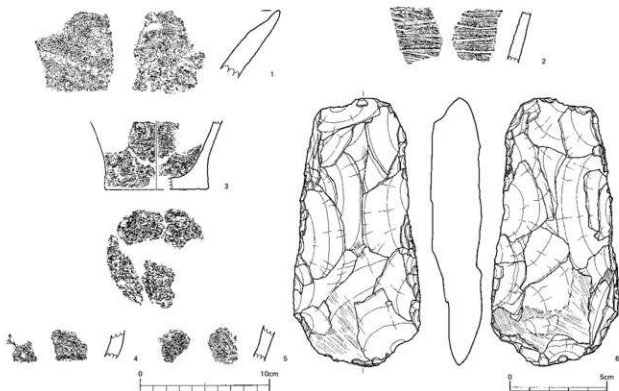
1は口縁部がラッパ状に開く器形の深鉢で、部位は口縁部である。整形は雑で、内面に凹凸がみられ先端部は尖っている。文様は外面に斜位の貝殻腹縁刺突文がみられる。器面調整は篋状工具で雑に施している。色調は内外面とも黄褐色で内側に黒斑がみられる。胎土は石英、長石、角閃石があり、白い岩片もみられる。焼成は良い。後述するI類に比定される。

集石遺構 2号出土遺物 (第11図 2)

2は胴部片で、内外共に篋状工具による横位の条痕調整が見られる。色調は外面が灰茶褐色、内面が黒色である。胎土の色調は黒色で、石英、長石、角閃石、白い砂粒が含まれている。焼成は硬質である。後述するIV類土器に比定される。

集石遺構 4号出土遺物 (第11図 3~6)

3は平底の底部で、薄手の器壁で立ち上がっている。内外面ともにナデ調整で、色調は内外面とも黄褐色である。胎土は色調が黒色で、石英、長石、角閃石と白い砂粒が含まれている。焼成は良い。4は底部近くの破片で、内外面の色調は灰茶褐色である。器面調整はナデである。胎土は色調が黒色で、石英、長石、角閃石と白い砂粒が含まれている。焼成は良い。5は底部近くの資料で、外面の色調は灰赤茶褐色、内面は灰茶褐色で、器面調整はナデである。胎土は色調が黒色で、石英、長石、角閃石と白い砂粒が含まれている。焼成は良い。6は刃部磨製石斧で、いわゆる短冊型に類する。態は基部の幅が狭く刃部の幅が広いものである。なお、基部は厚く、刃部は薄くなっている。整形の調整痕は両側面に見られる。石材は頁岩である。後述するIV類土器に比定される。



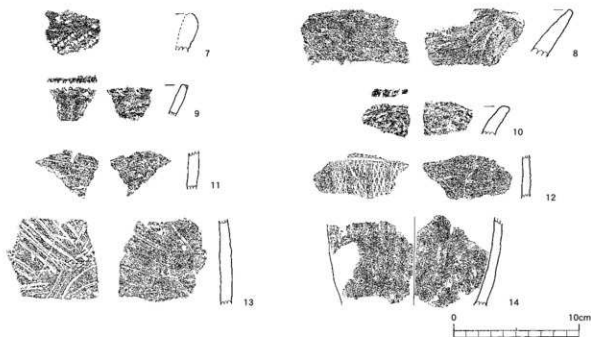
第11図 縄文時代早期 遺構内遺物

イ 遺物

土器 (7~32)

I類土器 (第12図 7~14)

7は内面が剥落した深鉢の口縁部で、口唇部は肥厚し丸みを持つ傾向が読み取れる。口縁部は外反し、貝殻腹縁による貝殻刺突文を斜位に連続して施している。器面はナデられ、色調は暗赤茶褐色を呈している。胎土は石英、長石、角閃石と白い岩片を含む。焼成は良い。8はラップ状に外反する深鉢形土器の口縁部で、口唇部は狭い平坦面をなし、器面は横方向にナデられる。色調は内面が灰茶褐色で外面が灰黒色を呈している。胎土は石英、長石、角閃石を含む。焼成は良い。9もラップ状に外反する口縁部で、口唇部は狭い平坦面を呈し、外面を連続して刻んでいる。器面はナデ調整である。色調は内面が灰茶褐色で外面が灰桃褐色を呈している。胎土は石英、長石、角閃石を含む。焼成は硬質で良い。10もラップ状に外反する口縁部で、口唇部の平坦面は斜位に刻まれ、器面はナデている。色調は内面が黒茶褐色で外面が茶褐色を呈している。胎土は石英、長石、角閃石を含む。焼成は硬質で良い。11~13は円筒状の器形を呈した深鉢形土器の胴部である。11は横位の沈線文を施し、器面はナデ調整で、器壁は薄い。色調は内面が暗茶褐色で外面が茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石と白い岩片を含む。焼成は硬質で良い。12は横位の沈線文を1条巡らし、沈線文と直交する縦位の摺糸文を施している。器面はナデ調整で、器壁は薄い。色調は内面が暗茶褐色で外面が茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石と白い岩片を含む。焼成は硬質で良い。13は斜位の条痕仕上げがそのまま残される。器面はナデ調整で、器壁は薄い。色調は内面が赤茶褐色で外面が茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石と白い岩片を含む。焼成は良い。14は深鉢形土器の胴部で文様は確認できない。器面は研磨状に調整され、焼成は硬質で良い。色調は内外面とも暗黒茶褐色である。胎土は白い岩片、石英、長石、角閃石を含む。



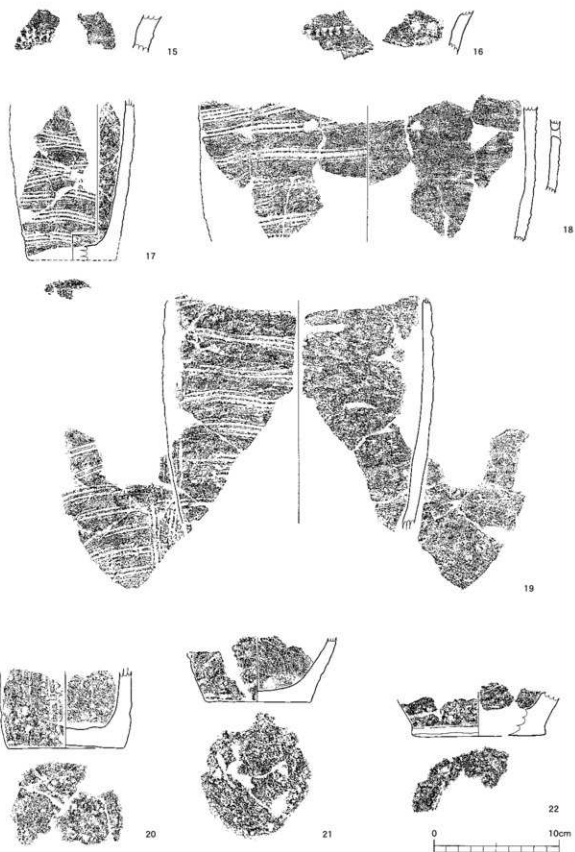
第12図 縄文時代早期 I類土器

Ⅱ類土器（第13図 15～22）

15は頸部で「く」の字状に外反する深鉢形土器で、屈曲部に貝殻腹縁による横位の連続刺突文を施している。器面はナデ調整で、器壁は厚い。色調は内外面とも茶褐色である。胎土には白い岩片を含み、石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。16も頸部で「く」の字状に外反する屈曲部に貝殻腹縁による横位の刺突文を施している。器面調整はナデである。色調は内面が茶褐色、外面は黒茶褐色である。胎土には白い岩片を含み、石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。17は円筒形を呈す胴部から底部資料で、底部の接地面は剥落しているが、安定した平底を呈すと思われる。粗の器面調整の後、貝殻条痕を横方向に周回し、文様を構成している。色調は内面が黒茶褐色で、外面は暗茶褐色である。胎土には白い岩片を含み、石英、長石、角閃石、金雲母がみられる。焼成は良い。18も深鉢形土器の胴部で、円筒状で底部側がやや狭くなる。文様施文は17と同様で、器面はナデ調整である。色調は内外面とも黒茶褐色で、黒褐色の黒斑がみられる。胎土には白い岩片を含み、石英、長石、角閃石、金雲母がみられる。焼成は良い。なお、補修孔が上部にみられる。19も円筒形の胴部で、底部側がやや狭くなる。文様施文は貝殻腹縁による横方向の周回文を中心に一部に縦方向の条痕がみられる。器面はナデ調整である。色調は内外面ともに暗茶褐色で、黒褐色の黒斑がみられる。胎土には白い岩片を含み、石英、長石、角閃石、金雲母がみられる。焼成は良い。20は深鉢形土器の底部で、17と同様の円筒形の平底である。貝殻腹縁による縦位条痕が残される。器面はナデ調整である。色調は内外面とも明茶褐色である。胎土は白い岩片を含み、石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。21は深鉢の底部で底面部がやや張る。器面は粗いヘラナデ調整である。色調は内面が茶褐色、外面は暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。22は深鉢の平底の底部である。器面はナデ調整である。色調は内外面とも暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。

Ⅲ類土器（第14図 23～25）

23は口縁部が外反する深鉢形土器である。口唇部外面は連続に刻まれ、腹縁施文具をアクセントをつけながら横方向に移動することにより特有の波状文を描きだしている。器面調整の内面は口縁部付近が横位で、胴部が縦位のナデ調整である。全体的に器壁は薄手であり、焼成は良い。色調は内面が黒褐色、外面が明茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含む。24は口縁部がやや外に開く深鉢型土器である。器面全体に横位の貝殻腹縁を波状に連続して刺突している。器面調整の内面は口縁部が横位で、胴部が斜位のナデ調整である。全体的に器壁は薄手であり、焼成は良い。色調は内面が暗茶褐色、外面が明茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含む。25は深鉢の平底である。器面はナデ調整で、薄手で焼成が良い。色調は両面とも明茶褐色で、胎土の色調は黒色で、石英、長石、角閃石を含む。この土器は形式判断ができないが、焼成、色調、薄手土器等のためこのグループへ分類した。



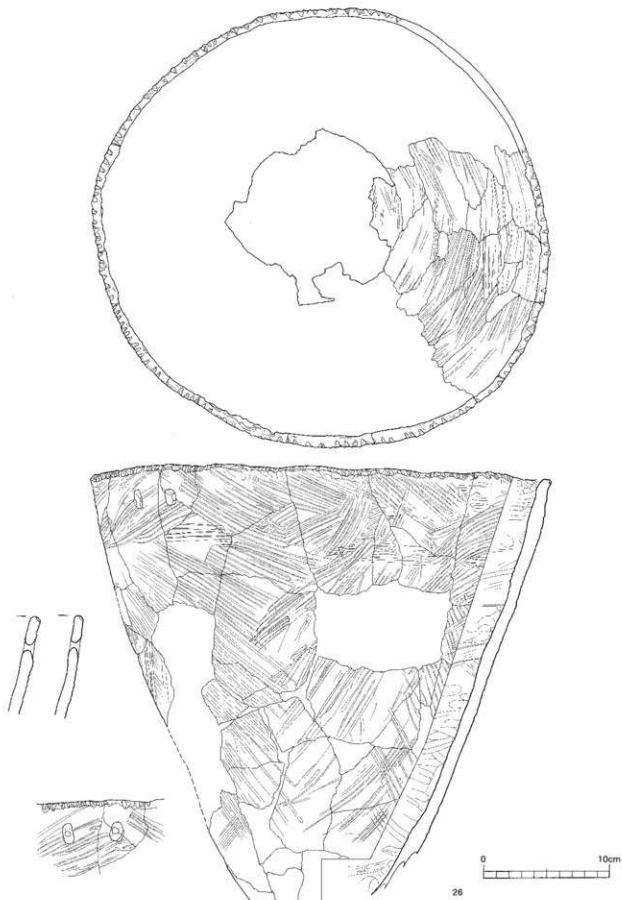
第13圖 縄文時代早期 II類土器



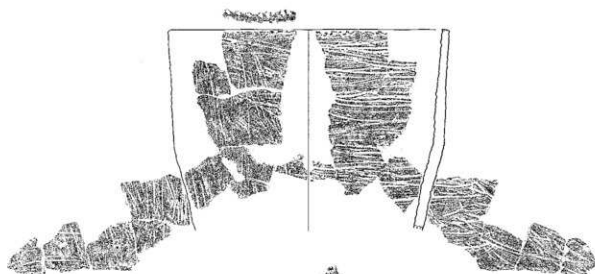
第14図 縄文時代早期 III類土器

IV類土器 (第15図・第16図 26~32)

26は胴部下半から底部が欠落しているが、底部から円錐状に外開する器形の深鉢形土器である。口唇部外面は、ヘラ状工具で連続して刻み波状を呈している。器面は貝殻腹縁による条痕文を重ねることにより、施文効果を表している。口縁部付近では条痕文が密に多用され、胴部下半に向い粗となる傾向がみられる。口径36.3cm。器面調整は内面が横位のヘラナデで、外面は縦位のナデである。色調は、外面の胴部及び底部が橙茶褐色で、口縁部は煤の付着がみられ黒褐色である。内面は胴部及び底部が暗茶褐色、口縁部は黒褐色である。胎土は白い岩片を微量含むが、石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。27は低部から胴部へがやや外に開き、胴部上位から口縁部にかけて直行する深鉢形土器である。口唇部は連続して刻まれる。器面は外面に縦位を基本の一部横位の篋状施文具による引き掻き痕、内面に横位の引き掻き痕を施している。色調は外面の底部近くが明茶褐色、口縁部が灰茶褐色である。内面は黒褐色である。胎土は白い岩片を少量含む、石英、長石、角閃石を含む。焼成はやや弱い。口径22.3cm。28は小型の土器である。器形は底部が欠損しているが下膨らみの円錐形である。器面は外面に縦位の引き掻き痕でナデ調整をしている。内面は横ナデである。色調は内外面とも茶褐色である。胎土は白い岩片を含み、石英、長石、角閃石を含む。胎土の色調は黒色で、焼成は良い。29は胴部から口縁部にかけて外向する器形の深鉢形土器である。器面は外面に縦位と横位の篋状施文具による引き掻き痕、内面に横位の引き掻き痕を施している。色調は外面が明茶褐色で、内面は黒褐色である。胎土は白い岩片を少量含む、石英、長石、角閃石を含む。焼成はやや弱い。30は径の小さいやや厚めの底部が付き、胴部にかけてやや外に開き、胴部から口縁部近くにかけて直行する器形の深鉢形土器である。目立つ文様は無く、外面は胴部に横位、底部に縦位の貝殻腹縁状施文具による条痕、内面に横位の条痕の器面調整が施されている。色調は外面の底部近くが茶褐色、胴部が灰黒褐色である。内面は暗灰褐色である。胎土は白い岩片を少量含む、石英、長石、角閃石を含む。焼成はやや弱い。底部形5.0cm。31は厚手の平底底部で、器面調整は貝殻腹縁である。色調は内外面とも灰黒茶褐色である。胎土は白い岩片や、石英、長石、角閃石を含む。焼成はやや弱い。32の内面は貝殻の背面を回転して押圧している。外面は貝殻腹縁部によるナデ調整を施し、その後、研磨状に調整している。色調は両面とも暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。焼成は良い。



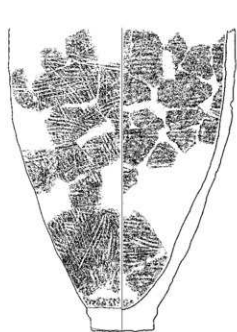
第15図 縄文時代早期 IV類土器 1



27



28



30



29



31



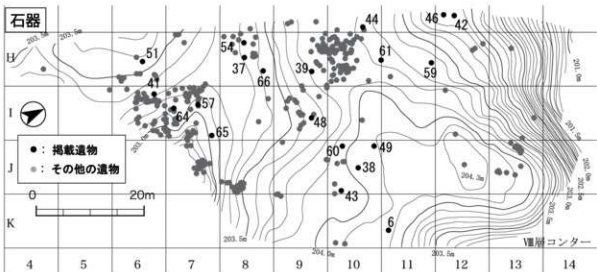
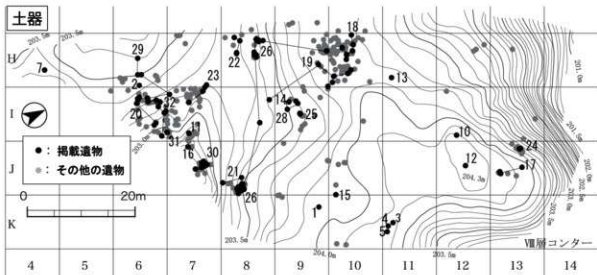
32



第16図 縄文時代早期 IV類土器 2

第1表 縄文時代早期 土器観察表

縄文 番号	番号	部位	出土区	部位	色調 (内面)		色調 (外面)		胎土			地味	調製 (内面)	調製 (外面)	類	遺物番号	備考	
					白	黒	白	黒	石英	長石	内角石							その他
11	1	遺構内		口縁	黄褐色	黄褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	ヘラナデ	貝殻線刻刺突文	I	集石3-1	
	2	遺構内		胴	黒色	灰茶褐色	○	○	○	○	○	白砂粒	硬質良	ヘラ状ナデ条痕	ヘラ状ナデ条痕	IV	集石2-1	
	3	遺構内		胴~底	黄褐色	黄褐色	○	○	○	○	○	白砂粒	良	ナデ	ナデ	IV	集石4-104 108	底径 4.0cm
	4	遺構内		底厚 近く	灰茶褐色	灰茶褐色	○	○	○	○	○	白砂粒	良	ナデ	ナデ	IV	集石4-107	
	5	遺構内		底厚 近く	灰茶褐色	灰赤茶褐色	○	○	○	○	○	白砂粒	良	ナデ	ナデ	IV	集石4-115	
12	7	Ⅷ	H-4	口縁	明赤茶褐色	明赤茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	ナデ	貝殻線刻刺突文、 ナデ	I	1383	
	8	Ⅷ	H-12	口縁	灰茶褐色	灰黒色	○	○	○	○	○	白岩片	良	ナデ	無文、ナデ	I	2138	
	9	Ⅵ	K-12	口縁	灰茶褐色	灰桃褐色	○	○	○	○	○		硬質良	ナデ	口唇部刻み目、 ナデ	I	1575	
	10	Ⅵ	I-12	口縁	黒茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○		硬質良	ナデ	口唇部刻み目、 ナデ	I	2131	
	11	Ⅵ	I-7	胴	暗茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	ナデ	横位沈線	I	1247	
	12	Ⅵ	J-12	胴	暗茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	ナデ	横位沈線、縦位 刻赤文、ナデ	I	2137	
	13	Ⅴ	H-11	胴	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○		硬質良	ナデ	斜位と円形の沈 線、ナデ	I	2078	
14	Ⅷ	I-9	胴	明赤茶褐色	明赤茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	硬質良	研磨	無文、研磨	I	2194		
13	15	Ⅵ	I-10	胴部	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	ナデ	貝殻線刻刺突文、 ナデ	II	1402	
	16	Ⅵ	I-7	胴部	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	ナデ	貝殻線刻刺突文、 ナデ	II	1421	
	17	Ⅵb, Ⅵ下	K-12	胴~ 底	黒褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母	良	ナデ	貝殻線刻斜位の 引き線、ナデ	II	56 406 408 570	
	18	Ⅵ, Ⅵ上, Ⅷ	H-10	胴	黒茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母	良	ナデ	貝殻線刻斜位の 引き線、ナデ	II	2038 2040 2039 2064 2065 2189	補修孔
	19	Ⅵ, Ⅶ, Ⅶ上	H-9-10	胴	暗茶褐色 (黒色)	暗茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母	良	ナデ	貝殻線刻斜位の 引き線、ナデ	II	1635 1636 1991 1995 2041 2048 2080	
	20	Ⅵ, Ⅶ	I-6	底	明赤茶褐色	明赤茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	ナデ	貝殻線刻斜位の 引き線、ナデ	II	707 951 952	底径 9.2cm
	21	Ⅵ, Ⅵ上	K-8	底	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	○		良	ヘラナデ	ナデ	II	2206 2210 2220	
22	Ⅵ	H-8	底	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	○		良	ナデ	ナデ	II	1913 2172 2173	底径 10.6cm	
14	23	Ⅵ	I-7	口縁 ~ 胴	黒褐色	明茶褐色	○	○	○	○	○		良	↑縁部横位、胴部 縦位のナデ	↑唇部刻み目、 貝殻線による 波状文	II	1222 1441 2182 2183	口径 25.8cm
	24	Ⅵ	J-13	口縁 ~ 胴	暗茶褐色	明茶褐色	○	○	○	○	○		良	↑縁部横位、胴部 縦位のナデ	↑唇部横位、胴部 縦位のナデ	II	1306 1357	口径 17.3cm
	25	Ⅵ	I-9	底	明赤茶褐色	明赤茶褐色	○	○	○	○	○		良	ナデ	ナデ	III	1406 1407	底径 6.6cm
15	26	Ⅵ, Ⅵ上, Ⅶ上	H~K-8	口縁 ~ 底厚	暗茶褐色、 口唇部黒褐色	橙茶褐色、 口唇部黒褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	横位のナ デ	貝殻線引き線文、 縦位ナデ	IV	976 1870 1871 1872 1873 1876 1877 1900 1924 1971 1973 2000 2174 2178 2179 2208 2218 2219 2221 2228 2229 2231 2232 2235 2232 2233 2254 2258 2259 2269 2290 2291 2292 2293 2297	口径 36.3cm 底径9.8cm
16	27	Ⅵ	H-6, I-6	口縁 ~ 胴	黒褐色	明茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	やや 弱い	横位の引 き線と 縦位の 引き線	横位施文具による 引き線と 縦位の 引き線	IV	644 645 646 783 789 1232 1247	
	28	Ⅵ	I-9	胴	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	良	横ナデ	縦位の引き線 と 横位の 引き線	IV	1282 1464 1465	
	29	Ⅵ	I-6	胴	黒褐色	明茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	やや 弱い	横位の引 き線	縦位の横位 施文具による 引き線	IV	635 636 768 779 793 824	
	30	Ⅵ, Ⅵ上	I-6, J-7	胴~ 底	暗灰褐色	茶褐色、 灰黒褐色	○	○	○	○	○	白岩片	やや 弱い	横位条痕	貝殻線縦 横条痕	IV	305 2249 2242 2244 2245 2246 2247 2282 2286 2288 2273 2283	底径 5.0cm
	31	Ⅵ	I-7	底	灰黒茶褐色	灰黒茶褐色	○	○	○	○	○	白岩片	やや 弱い	貝殻条痕	貝殻条痕	IV	2186	底径 10.2cm
32	Ⅵ	I-6	底	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○	○		良	貝殻背面 凹脈押圧	貝殻線ナデ、 横で研磨	IV	642	底径 10.0cm	



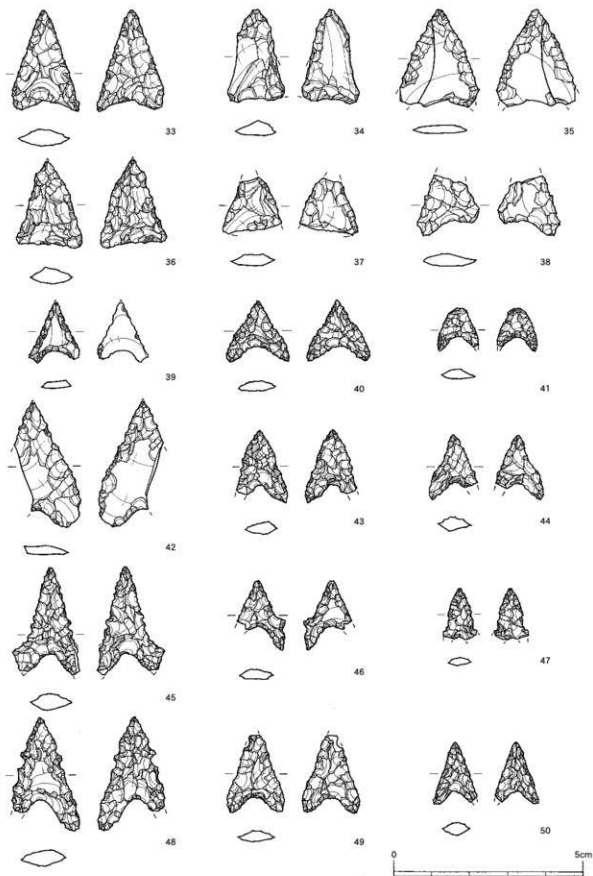
第17図 縄文時代早期 出土状況図

石器 (第18図・第19図・第20図・第21図 33~66)

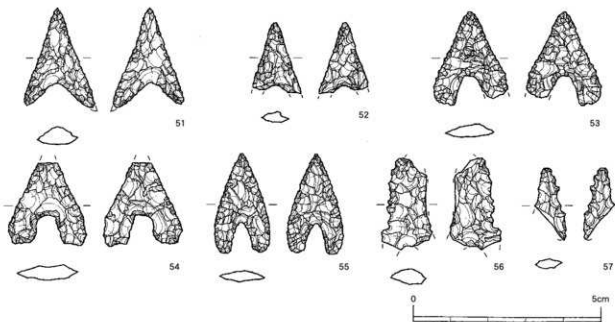
石鏃 (第18図・第19図 33~57)

33はやや決りのみられる平基式で二等辺三角形の石鏃である。厚みはやや薄く、交互剥離で整形している。石材は頁岩である。34はやや決りのみられる平基式で五角形の石鏃である。厚みはやや薄く主要剥離面が残り、やや雑に整形している。刃部の調整は基部と片側側面に交互剥離である。石材は頁岩である。35はやや決りがみられる平基式で底辺の幅がある二等辺三角形の石鏃である。厚みは薄く、刃部を交互剥離で整形している。石材は頁岩である。36はやや決りがみられる平基式で変則五角形の石鏃である。厚みはやや厚く、交互剥離で整形している。石材は凝灰岩である。37はやや決りがみられるが平基式で三角形の石鏃である。厚みはやや薄く、主要剥離面が残り、調整

は一部を交互剥離で整形している。なお、頭部は欠損している。石材は頁岩である。38はやや抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。厚みはやや薄く、主要剥離面が残り、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、頭部は欠損している。石材は凝灰岩である。39は抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。厚みはやや薄く、主要剥離面が残り、調整は全縁を片面剥離で整形している。なお、頭部は欠損している。石材はチャートである。40は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。厚みはやや薄く、調整は全面を交互剥離で整形している。石材は頁岩である。41は大きく抉りがみられる小型の凹基式で三角形の石鐮である。厚みはやや薄く、主要剥離面が残り、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、頭部は欠損している。石材は黒曜石である。42は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。厚みはやや薄く、主要剥離面が残り、調整は大半を交互剥離で整形している。なお、片方は欠損している。石材は凝灰岩である。43は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。厚みはやや薄く、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部の片方は欠損している。石材は姫島系黒曜石である。44は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。厚みはやや薄く、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部の片方は欠損している。石材は頁岩である。45は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。脚部には返り状に突起があり、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部の片方は欠損している。石材はチャートである。46は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。脚部には返り状に突起があり、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部の片方は欠損している。石材は頁岩である。47は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮とおもわれる。脚部は返り状に突起があり、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部は両方とも欠損している。石材は黒曜石である。48は大きく抉りがみられる長身の石鐮である。頭部には突起があり、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部の片方は欠損している。石材はチャートである。49は大きく抉りがみられる凹基式の石鐮である。調整は全面を交互剥離で整形している。なお、頭部は欠損している。石材は頁岩である。50は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部の片方は欠損している。石材は凝灰岩である。51は大きく抉りがみられる凹基式で二等辺三角形の石鐮である。調整は全面を交互剥離で整形している。石材は頁岩である。52は大きく抉りがみられる凹基式の三角形の石鐮である。調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部は両方とも欠損している。石材は凝灰岩である。53は深い抉りを持つ正三角形の石鐮である。脚部は丸みを持ち、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、石材は黒曜石である。54は大きく抉りがみられる凹基式で三角形の石鐮である。脚部は丸みを持ち、調整は全面を交互剥離で整形している。なお、頭部は欠損している。石材はチャートである。55は大きく抉りがみられる凹基式で蕨葉形の石鐮である。調整は全面を交互剥離で整形している。なお、脚部の片方は欠損している。石材はチャートである。56は大きく破損しているが、肩部には返り状に突起が認められる。調整は全面を交互剥離で雑に整形している。なお、脚部は両方とも欠損している。石材は姫島系黒曜石である。57は大きく抉りがみられる凹基式肩の張る石鐮であると思われる。頭部には返り状に小さな突起があり、調整は全面を交互剥離で雑に整形している。なお、脚部の片方は欠損している。石材は頁岩である。



第18図 縄文時代早期 石器 1



第19図 縄文時代早期 石器 2

石匙 (第20図 58~63)

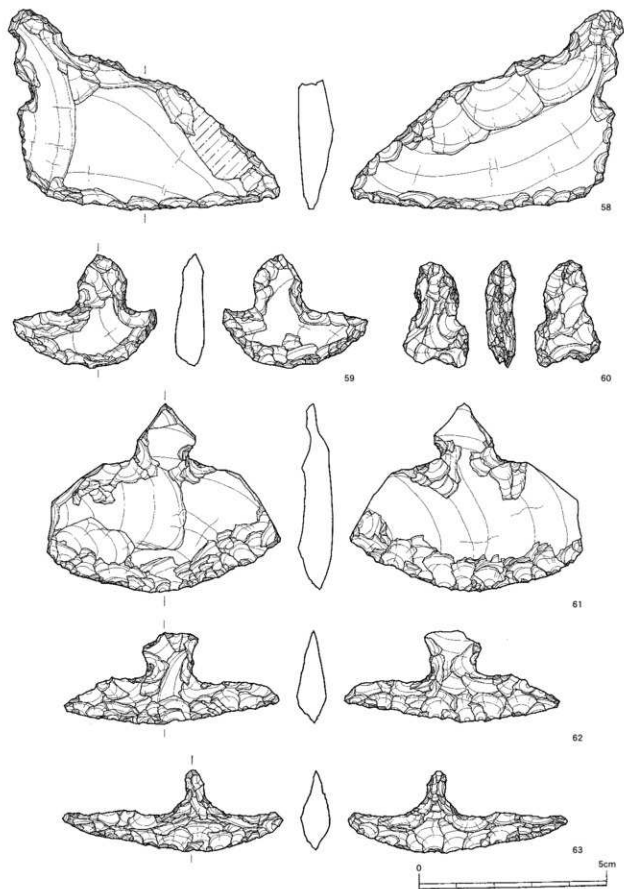
58は大きな横剥の剥片を利用した横型石匙である。剥離面は背面側で自然面を残し、主要剥離面側は打点部を剥ぎ取っている。形状は直角三角形を呈し、摘み部は上部で、3箇所の袂りが施されている。刃部は下辺に直線状で、交互剥離で作られている。石材は頁岩である。59は横剥の剥片を利用した横型石匙である。形状は分銅型で、摘み部は中央で上に尖り、小型の刃部は弧状に交互剥離で作られている。石材は頁岩である。60は摘み部に両方から袂りがみられる。なお、刃部は欠損したと思われる。石材は姫島系黒曜石である。61は横剥の剥片を利用した横型石匙である。形状は深い分銅型で、摘み部は中央で上に尖り、刃部は弧状に交互剥離で作られている。石材はチャートである。62は横剥の剥片を利用した横型石匙である。形状は典型的なサブマリーン型で、摘み部は中央で上に尖り、刃部は弧状に交互剥離で作られている。石材は頁岩である。63は横剥の剥片を利用した横型石匙である。典型的なサブマリーン型で、摘み部は中央で上に尖り、刃部は弧状に交互剥離で作られている。石材は頁岩である。なお、摘み部を中心にした左右の刃部長は、大きく異なる。

磨石 (第21図 64・65)

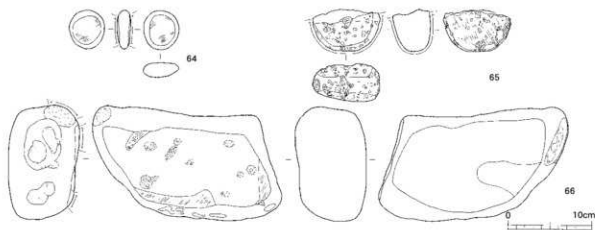
64は小型の磨石である。形は碁石状で、片面に丸みがあり、使用面は平坦である。石材は凝灰岩である。65は約半分欠損した磨石で、元来縁部は石輪状に整形されたのみならず、広い平坦部や面を作った縁面を磨石として使用している。平坦面に一部窪みがみられ、凹石としての使用も考えられる。石材は安山岩である。

敲石 (第21図 66)

66の形状は石皿様であるが、摩擦面が観察できない。一方、敲打痕が部分的に残されることから、台石（アンビル）的機能が推定される。



第20回 縄文時代早期 石器 3



第21図 縄文時代早期 石器4

第2表 縄文時代早期 石器観察表

押洞 番号	番号	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上 番号	備考
						cm	cm	cm	g		
11	6	局部磨製石器	遺構内	Ⅲ	頁岩	13.95	6.60	2.70	287.49		集石4号
	33	打製石鏃	I-5	Ⅵ	頁岩	2.70	1.85	0.50	1.23	1384	
18	34	打製石鏃	I-9	Ⅶ	頁岩	2.50	1.55	0.40	1.33	2195	
	35	打製石鏃	G-11	Ⅵ	頁岩	2.60	2.15	0.25	1.08	2087	
	36	打製石鏃	H-8	Ⅵ	凝灰岩	2.40	1.75	0.50	1.33	1935	
	37	打製石鏃	H-8	Ⅵ	頁岩	1.55	1.60	0.35	0.75	1922	
	38	打製石鏃	I-10	Ⅵ	凝灰岩	1.65	1.65	0.35	0.64	1495	
	39	打製石鏃	H-9	Ⅵ	チャート	1.65	1.40	0.25	0.30	2105	
	40	打製石鏃	I-8	Ⅵ	頁岩	1.65	1.70	0.25	0.42	1516	
	41	打製石鏃	I-6	Ⅵ	黒曜石	1.15	1.15	0.30	0.19	800	
	42	打製石鏃	G-12	Ⅵ	凝灰岩	3.40	1.75	0.30	1.20	2009	
	43	打製石鏃	I-10	Ⅵ	黒曜石 姫島系	1.95	1.35	0.35	0.49	1493	
	44	打製石鏃	G-10	Ⅵ	頁岩	1.75	1.30	0.40	0.45	2075	
	45	打製石鏃	H-12	Ⅵ	チャート	2.85	1.80	0.45	1.70	2005	
	46	打製石鏃	G-12	Ⅵ	頁岩	1.85	1.35	0.30	0.35	2002	
	47	打製石鏃	K-12	Ⅵ	黒曜石	1.40	0.95	0.25	0.20	577	
	48	打製石鏃	I-9	Ⅵ	チャート	2.05	1.55	0.30	1.33	1469	
	49	打製石鏃	I-3	Ⅵ	頁岩	3.05	1.80	0.45	0.65	1498	
	50	打製石鏃	I-6	Ⅵ	チャート凝灰岩	1.70	1.20	0.35	0.35	625	
	19	51	打製石鏃	H-6	Ⅵ	頁岩	2.65	1.90	0.50	1.03	1160
52		打製石鏃	G-9	Ⅵ	凝灰岩	1.95	1.35	0.30	0.44	2019	
53		打製石鏃	J-13	Ⅵ	黒曜石	2.50	2.00	0.35	1.10	一括	
54		打製石鏃	H-8	Ⅵ	チャート	2.20	2.10	0.45	1.40	1885	
55		打製石鏃	H-11	Ⅵ	チャート	2.65	1.50	0.35	0.84		深掘り
56		打製石鏃	K-13	Ⅵ	黒曜石 姫島系	2.45	1.40	0.45	1.18	500	
57		打製石鏃	I-7	Ⅵ	凝灰岩	1.95	0.85	0.30	0.23	1449	
20	58	石匙	H-10	ⅥF	頁岩	5.40	7.20	0.95	29.74	2072	
	59	石匙	H-12	ⅥF	頁岩	3.05	3.80	0.80	7.00	2100	
	60	挟入状石器	I-10	Ⅵ	黒曜石 姫島系	2.85	1.75	0.85	2.96	1487	
	61	石匙	H-10	Ⅵ	チャート	5.00	6.25	0.95	26.16	2077	
	62	石匙	H-11	Ⅵ上	頁岩	2.45	5.70	0.80	5.21	2083	
	63	石匙	H-6	Ⅵ	頁岩	2.20	5.90	0.80	3.93	643	
21	64	磨石	I-7	Ⅳa	凝灰岩	4.65	4.25	1.70	48.50	620	
	65	磨石	I-7	Ⅵ	安山岩	5.00	7.95	4.50	208.50	1450	
	66	石皿状砥石	I-8	Ⅵ	安山岩	22.50	13.60	8.40	3525.00	762	

(2) 前・中期

前・中期では、落とし穴5基が検出され、土器2点が出土している。

ア 遺構

遺構は、落とし穴5基が検出されている。

落とし穴（第22図～第23図）

H-7～9, 11区とJ-9区で5基検出されている。

1号落とし穴（第22図）

H-11区Vc層で検出されている。平面の形状は円形であり、長軸110cm、短軸90cmである。底面は長軸40cm、短軸30cmである。深さは検出面から93cmである。断面の形状は、ほぼ垂直に下がり、検出面から60mmのところから丸底気味になる。底面は平坦である。

2号落とし穴（第22図）

J-9区Vcで検出されている。平面の形状は円形であり、長軸70cm、短軸67cmである。底面は長軸65cm、短軸55cmである。深さは検出面から77cmである。断面の形状は、ほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。

3号落とし穴（第22図）

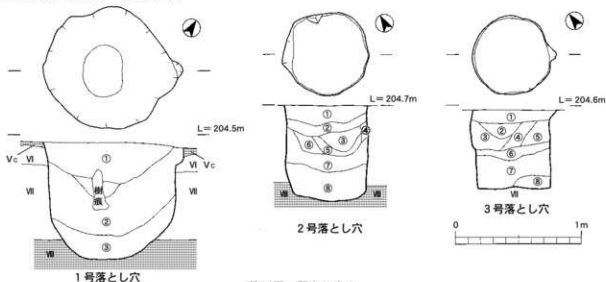
H-9区Vc層で検出されている。平面の形状は円形であり、長軸66cm、短軸60cmである。底面は長軸58cm、短軸58cmである。深さは検出面から63cmである。断面の形状は、ほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。

4号落とし穴（第23図）

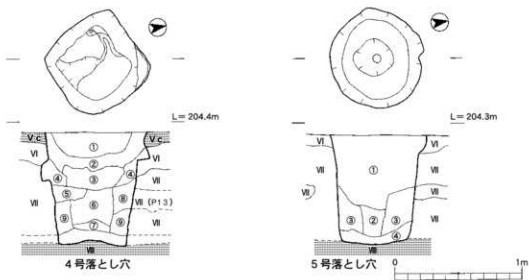
H-8区Vc層で検出されている。平面の形状は隅丸菱形であり、長軸84cm、短軸68cmである。底面は長軸60cm、短軸60cmである。深さは検出面から90cmである。断面の形状は、ほぼ垂直に下がる形状である。底面は中央がやや盛り上がるがほぼ平坦である。

5号落とし穴（第23図）

H-7区Vc層で検出されている。平面の形状は円形であり、長軸81cm、短軸70cmである。底面は長軸62cm、短軸54cmである。深さは検出面から87cmである。断面の形状は、ほぼ垂直に下がる形状である。底面は平坦である。



第22図 落とし穴1



第23図 落とし穴2

第3表 1号落とし穴 埋土観察表

埋土	色調	特徴
①	暗灰褐色土	弱粘質土。IVb層に類似。P7が含まれる。部分的にVb、Vc層ブロック。
②	暗灰褐色土	粘質土。①より暗い色調。4～5mm大のバミス量が多い。
③	暗灰褐色土	粘質土。バミスがあまり入っていない。

第4表 2号落とし穴 埋土観察表

埋土	色調	特徴
①	暗茶褐色土	2～5mm大の黄色バミスと白ごま状の混入。
②	黒色土+暗茶褐色土	2～5mm大の黄色バミスと白ごま状の混入。部分的に純黒色土。
③	黒色土+暗茶褐色土	②に崩れたような黄色バミスが一部混入。
④	黒色土	アカホヤ (Vb、Vc) 混入。
⑤	黒色土+暗茶褐色土 (若干)	バミスはほとんど入らない。Va層に近い
⑥	暗茶褐色土+黒色土 (若干)	下層の中では最も明るい色調であり①の明るさに似る。Va層に近い。
⑦	黒色土+暗茶褐色土	⑥より暗めの黒色土であるが、純黒色ではなく暗茶が混ざる。Va層の土に類似している。
⑧	オリブ褐色土+黒色土	P7がわずかに入る。粘性はあまりないがしまっている。

第5表 3号落とし穴 埋土観察表

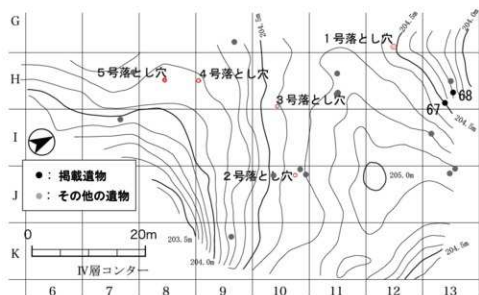
埋土	色調	特徴
①	暗茶褐色土+オリブ褐色土	1～3mm大の黄色バミスと白ごまが混入。
②	暗茶褐色土+オリブ褐色土	①よりも暗い。2mm大の黄色バミスと白ごまが少量混入。
③	暗茶褐色土+オリブ褐色土	色調は②とあまり変わらない。黄色バミスをわずかに含む。
④	黒色土+暗オリブ	黄色バミス・白ごまがわずかに入る。
⑤	黒色土+暗オリブ	④より少し暗め。1～2mm大の黄色バミスが少量混入。
⑥	黒色土+暗オリブ (小)	粘質土。P7を含むIVb層とIVa層との混在。
⑦	黒色土+暗オリブ (小)	弱粘質土。P7が入る。一部にVII層の2×2cm大のブロック混入。
⑧		VII層と考えられるが壁面などのVII層と比較するとやわらかい。

第6表 4号落とし穴 埋土観察表

埋土	色調	特徴
①	オリブ褐色土	弱粘質土。2～3mm大の黄色バミスと白ごまが混入。
②	オリブ褐色土+黒色土	弱粘質土。2～3mm大の黄色バミスと白ごまが混入。①と③新移層。
③	黒色土 (+オリブ褐色土 少々)	P7が混ざる確実なIVb層である。
④	オリブ褐色土+黒色土	軟質土。色調は②と同じであるがバミスは少量混入。
⑤	オリブ褐色土+黒色土	②よりも明るいオリブ。2mm大の黄色バミスが少量混入。
⑥	オリブ褐色土+黒色土	軟質土。色調は②と似ているがバミスの量が少ない。
⑦	黒色土	軟質土。1mm大の黄色バミスが少量混入。
⑧	オリブ褐色土+黒色土	軟質土。バミスはほぼ含まない。
⑨	オリブ褐色土+黒色土	⑧よりも若干だが黒が弱い。他は⑧と同じ。
⑩		サツマであるが上層の影響で若干色が暗く、少々やわらかい。⑩上面が土坑の底面であった可能性がある。

第7表 5号落とし穴 埋土観察表

埋土	色調	特徴
1	黄褐色土+暗灰黄色土	弱粘質土。P7が混ざりIVa層に近い。
2	オリブ褐色土	軟質土。P7と考えられる軽石を含む。
3	暗灰黄色土	粘質土。P7を含む。
4		VI層とVIIとVIIIの新移層



第24図 縄文時代前・中期 出土状況図

イ 遺物

土器 (第25図 67・68)

67・68は第IVa・IVb層で出土し、第VI層の早期の条痕土器に類似したものである。深鉢の底部近い部分である。器面は内外面とも貝殻腹縁部による貝殻条痕がみられる。色調は内面が暗茶褐色、外面が燈茶褐色である。胎土は白い岩片を含む石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。同一個体の可能性が高い。



第25図 縄文時代前期 土器

第8表 縄文時代 前期土器観察表

縄文番号	番号	層位	出土区	部位	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土				焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	類	遺物番号	備考
							石英	長石	角閃石	その他						
25	07	IV b	H-13	胴	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		良	貝殻条痕	貝殻腹縁による貝殻条痕		1414	調査?
	08	IV a	H-13	胴	暗茶褐色	燈茶褐色	○	○	○		良	貝殻条痕	貝殻腹縁による貝殻条痕		2145	

(3) 後・晩期

後・晩期では、土坑2基が検出され、土器8点と石器8点が出土している。

ア 遺構

遺構は、土坑2基が検出されている。

土坑（第26図）

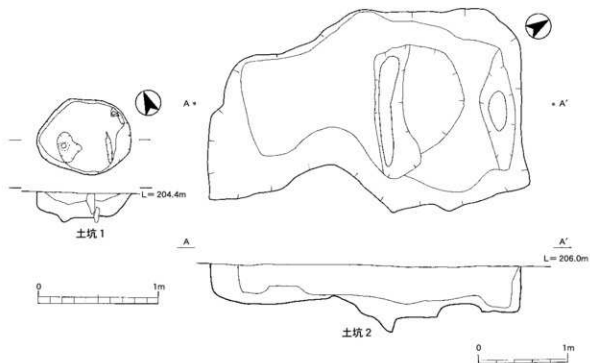
I-8・9区で2基検出されている。

1号土坑（第26図）

I-9区VII層で検出されている。平面の形状は楕円形であり、長軸が160cm、短軸が120cmである。底面は長軸が125cm、短軸は110cmである。深さは検出面から45cmである。断面の形状は、西壁はほぼ垂直に立ちあがり、東壁は緩やかである。底面はほぼ平坦である。石器の剥片を伴っている。

2号土坑（第26図）

I-8区IVb層で検出されている。平面の形状は不定形であり、長軸が180cm、短軸が110cmである。底面は長軸が150cm、短軸は90cmである。深さは検出面から63cmである。断面の形状は、ほぼ垂直に下がる形状である。底面はほぼ平坦であり、中央部と北壁側に縦長の掘り込みがある。

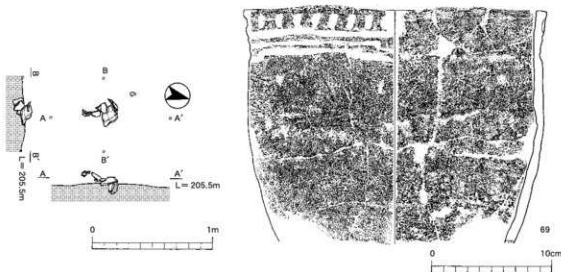


第26図 土坑

イ 遺物

後期土器 (第27図 69)

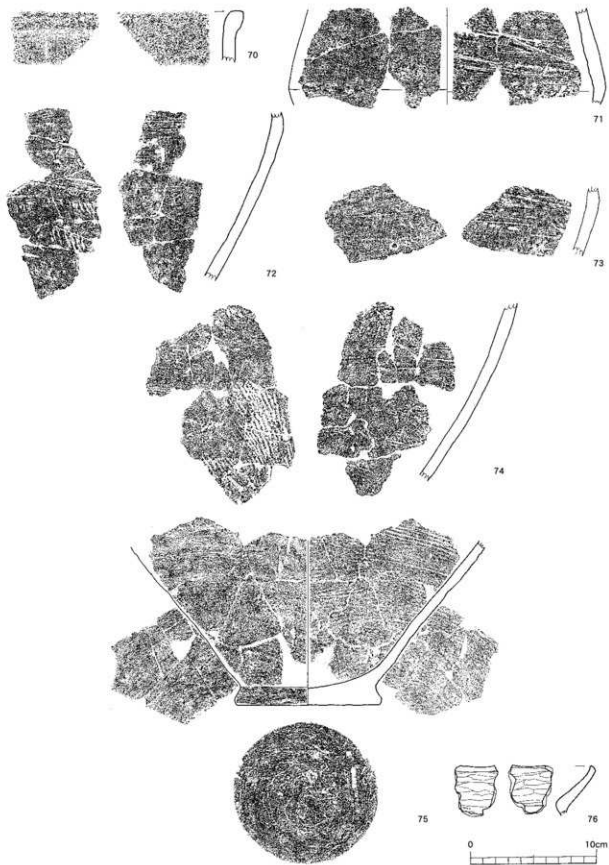
69は胴部がやや張り、頸部でやや締まり、口縁部でやや外反する器形で、口唇部が平坦面をなす深鉢である。文様は幅の広い施文具で、口縁部に縦位の連点と、その下に横位の沈線文を1条、その下位に2本の平行沈線文を巡らしている。靴型文を繋ぐ3条の沈線文を施している。器面はナデ調整で、色調は内外面とも茶褐色で部分的に黒斑がみられる。粘土は口縁部と胴部の繋ぎ部に厚くみられ、製作方法がわかる。胎土は礫を含む、石英、長石、角閃石が見られる。焼成は良い。



第27図 縄文時代後期 土器

晩期土器 (第28図 70~76)

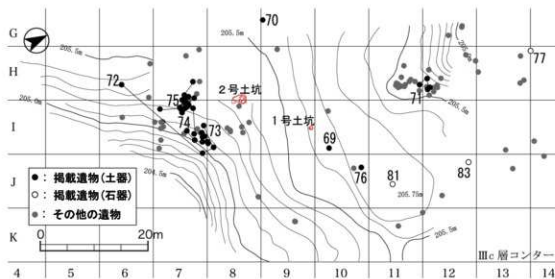
70は口縁端部に肥厚部のある深鉢である。器形としては直行するものである。器面は風化が激しくザラザラ感がある。色調は黒色である。胎土は白い石英が多く、長石、角閃石がみられる。焼成は弱い。71は肩部で、「く」の字状に屈折する器形の深鉢である。器面は外面の肩部に黒色の煤が付着している。器面は内外面ともヨコナデ調整である。色調は内外面とも暗茶褐色である。胎土は白い岩片を含み、石英、長石、角閃石が見られる。72は胴部で、「く」の字状に屈折する器形の深鉢である。器面は肩部でヨコナデ、胴部で斜めナデ調整である。色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色である。胎土は白い岩片を含み、石英、長石、角閃石が見られる。73は胴部で、「く」の字状に屈折する器形の深鉢である。器面はヨコナデ調整である。色調は内面が暗茶褐色、外面が黒色である。胎土は白い岩片を含み、石英、長石、角閃石が見られる。74は胴部で、「く」の字状に屈折する器形の深鉢である。器面は肩部でヨコナデ、胴部で斜めナデ調整である。色調は外面が黒色と暗茶褐色、内面が暗茶褐色と茶褐色である。胎土は白い岩片を含み、石英、長石、角閃石が見られる。焼成は良い。75は円盤状の平底から外に開く胴部をもつ深鉢である。器面は篋状施文具による横位の調整である。色調は内外面とも茶褐色で黒斑もみられる。胎土は白い岩片を含み、石英、長石、角閃石がみられる。焼成は良い。76は山形口縁部をもつ浅鉢である。器形は頸部で締まり、口縁部が外反する。口縁部には断面玉緑の肥厚がみられる。器面は研磨調整である。色調は黒茶褐色で、胎土は石英、長石、角閃石を含む。焼成は良い。



第28圖 縄文時代晩期 土器

第9表 縄文時代後・晩期 土器観察表

編年番号	番号	階位	出土区	部位	色面 (内面)	色面 (外面)	胎土				焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	類	遺物番号	備考
							石英	長石	角閃石	その他						
27	00	IV	H-10	口縁 ~ 胴	茶褐色	茶褐色	○	○	○		兵	ナデ	口縁部縦位直交 有り、横位三差 の沈積 ナデ	土器集中区	南福寺	
	70	II	H-9	口縁	黒色	黒色	○	○	○		弱い	風化	風化	1304		
	71	III c, IV a	H-11 12	胴	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	白岩片	ヨコナデ	ヨコナデ	70 1255 1256 1257	黒川 塚付遺		
	72	III c, IV a	H-6	胴	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	白岩片	ヨコナデ	斜ヨコナデ, 胴側のナデ	324 325 328 329 331 1040			
	73	III c	H-6	胴	暗茶褐色	黒色	○	○	○	白岩片	ヨコナデ	ヨコナデ	327			
	74	III c	H-6	胴	暗茶褐色 茶褐色	黒色 暗茶褐色	○	○	○	白岩片	兵	ナデ, ヨコナデ	ヨコナデ	317 319 320 321 322 326	黒川	
	75	III, III b, III c, IV a	H-6-7, 1-7	底~ 胴	茶褐色	茶褐色 (黒炭)	○	○	○	白岩片	兵	ヘラナデ	ヘラナデ	325 311 312 334 345 441 443 444 445 446 447 448 683 684 1037 1038 1039 1042	黒川	
	76	IV a	J-10	口縁	黒茶褐色	黒茶褐色	○	○	○		兵	研磨	研磨	617	黒川	

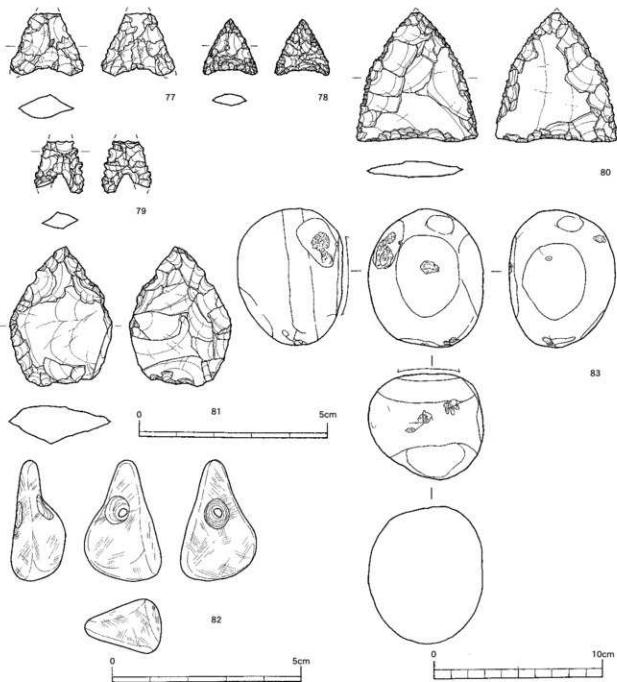


第29図 縄文時代後・晩期 出土状況図

石器・石製品 (第30図 77~83)

77はやや挟りがみられる平基式で三角形の石鎌である。厚みはやや薄く、背面が残り、調整は一部を両面交互剥離で整形している。なお、頭部は欠損している。石材は不純物のある黒曜石である。78はやや挟りがみられる平基式で三角形の石鎌である。厚みはやや薄く、背面が残り、調整は全縁を交互剥離で整形している。石材は黒曜石である。79は挟りがみられる凹基式で三角形の石鎌である。厚みはやや薄く、調整は全部を交互剥離で整形している。なお、頭部は欠損している。石材は黒曜石である。80は大型の石鎌と思われるが、長軸約3cmを測りて石槍的な使用も考えられる。扁平な剥片を使用し、平基式の形態である。丸みを持つ刃部は交互剥離で調整されている。石材は頁岩である。81は石匙で、摘み部を欠損しているものである。刃部は交互剥離で作られている。石材は頁岩である。82は自然礫に孔を施した石製品である。孔は両方から開けられ、中央部が最も狭い。石材は頁岩である。

83は球形の磨石である。使用面は平坦面の最も広い部分である。一部窪みも見られ、敲石として使用した可能性もある。石材は凝灰岩である。



第30図 縄文時代後・晩期 石器

第10表 縄文後・晩期 石器観察表

標本 番号	番号	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上 番号	備考
						cm	cm	cm	g		
30	77	打製石鏃	H-14	IVa	O b	1.60	1.95	0.60	1.42	2144	
	78	打製石鏃	G-13	VII	O b	1.50	1.50	0.30	0.41	一括	
	79	打製石鏃	J-13	IVa	O b	1.40	1.40	0.40	0.45	464	
	80	打製石鏃	I-9	IIIc	S H	3.55	3.55	0.35	4.24	936	
	81	打製石鏃	J-11	IV	S H	3.70	3.70	1.00	8.64	58	
	82	石製挿飾品	H-7	IIIc	S H	3.15	3.15	1.40	8.21	344	
83	磨石	H-6	IIIc	凝灰岩	8.10	6.85	6.30	529.00	330		

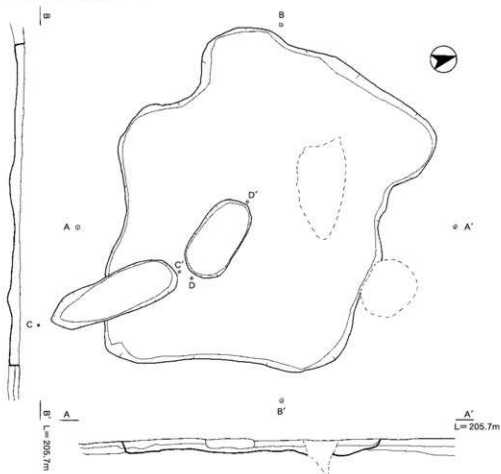
4 弥生時代

土坑1基が検出され、土器2点を図化した。

(1) 遺構

土坑 (第31図)

1-7区で検出した。280×270cmの方形に一边がやや斜めに張り出した形状である。検出面からの深さは10cmで、底面はほぼ平坦である。壁面はほぼ垂直に立ちあがる。上部は後世の攪乱により消失したと想定される。

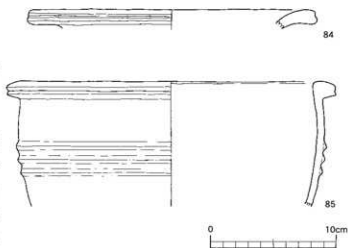


第31図 土坑

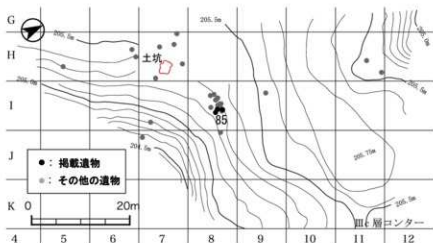
(2) 遺物

土器 (第32図 84・85)

84は厚みのあるL字口縁をもつ甕形土器である。文様は口唇部に浅い沈線、胴部に断面三角突帯3条を施している。器面調整はナデである。色調は内面が茶褐色、外面が暗茶褐色で黒色の煤が付着している。焼成は良い。85は外反する口縁部をもつ壺形土器である。文様は口唇部に沈線を施している。器面調整はナデである。色調は内面が茶褐色、外面が赤茶褐色である。焼成は良い。



第32図 弥生時代 土器



第33図 弥生時代 出土状況図

第11表 弥生時代 土器観察表

神田 番号	番号	層位	出土区	部位	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土				焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	類	遺物番号	備考
							石英	長石	角閃石	その他						
32	84	表採		口縁	茶褐色	暗茶褐色					良	ナデ	沈殿、三条の瀬 面三角突帯	一括	古ヶ崎 口径 23.0cm	
	85	III c	1-8	口縁 ~別	茶褐色	赤茶褐色					良	ナデ	ナデ	429 431 679	口径 26.0cm	

5 古代・中世

遺構は溝状遺構，古道跡，土坑が検出され，遺物は土師器，陶磁器が出土している。

(1) 遺構

G～J-7区から溝状遺構1条，G～I-13区から古道跡3条が検出されている。また，多数の土坑が検出され，ビット状の土坑も検出されている。遺構の多くは，削平により上部構造を消失しているとみられる。

溝状遺構（第34図）

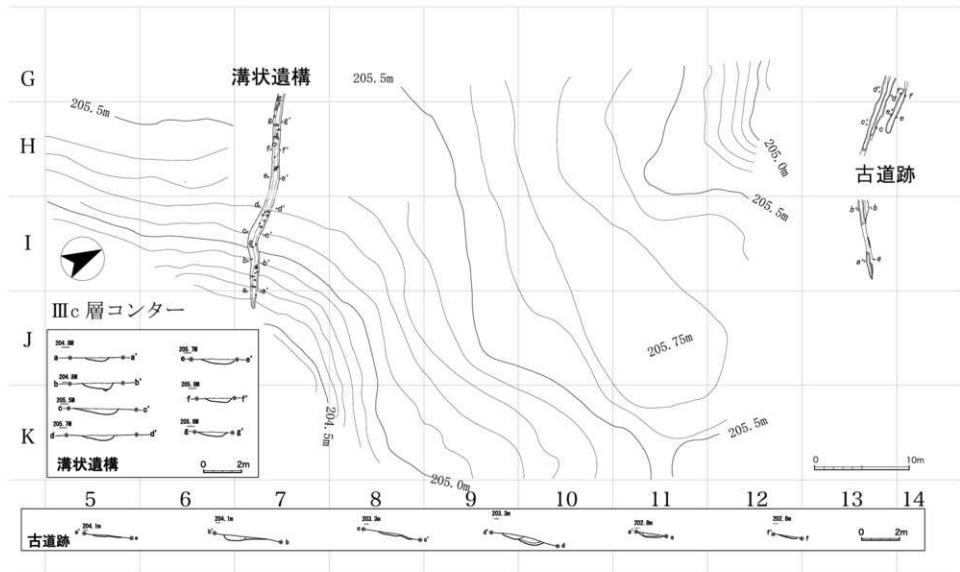
G～J-7区で1条検出されている。断面形はレンズ状で，北側が立ち上がり，南側が緩やかな形状である。IV層を基盤層とし，埋土の主体は黒色土である。

古道跡（第34図）

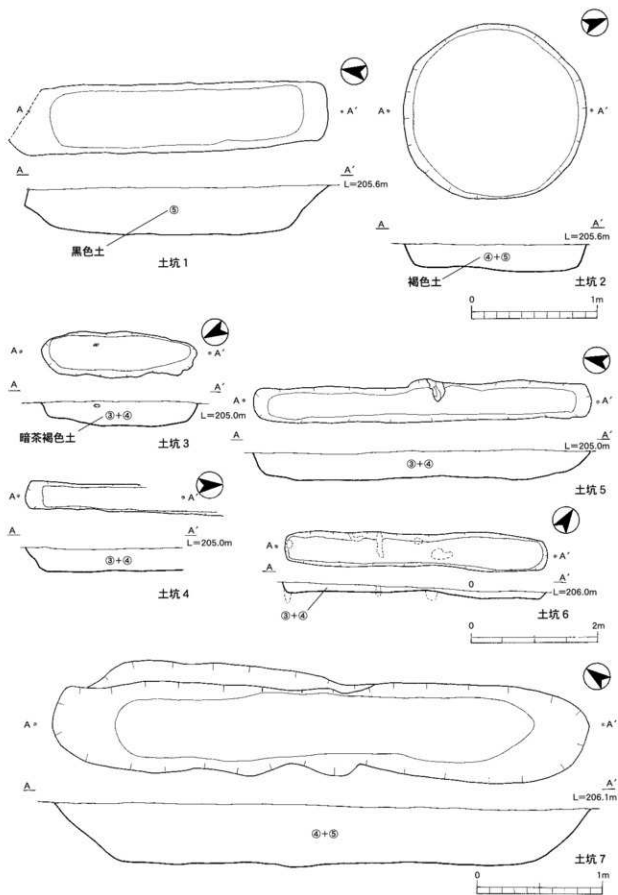
G～I-13区で3条検出されている。東西軸に平行な状態で検出されている。古道1と古道2は密着した状態で検出されている。古道2と古道3は，約1mの間隔で検出されている。3条ともIIIc層を基盤層とするが，埋土状況に差異がみられ，古道造営の時期差が考えられる。古道1と古道2は黒褐色土と黒色土を埋土とし，古道3は褐色土と黒褐色土とする。

土坑（第35図～第37図）

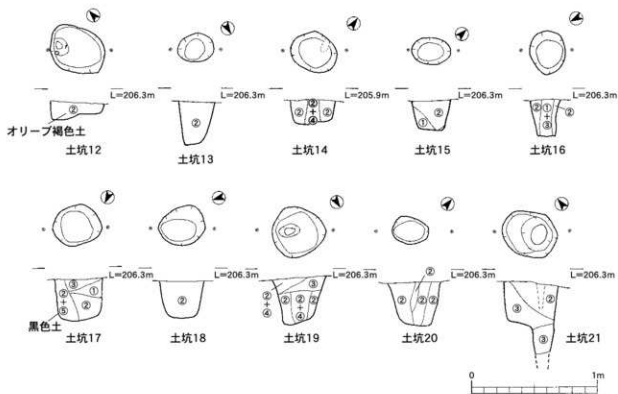
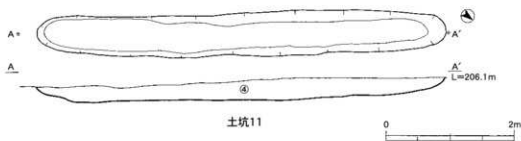
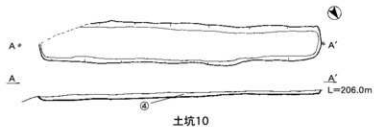
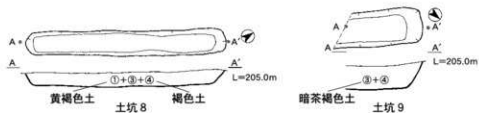
43基を図化した。非ビット状の土坑では，隅丸の長方形9基，楕円形1基，円形1基が検出されている。埋土状況に差異がみられ，土坑造営の時期差が考えられる。埋土別では，暗褐色土単一の土坑1基，黒色土を主体とする土坑10基に分類される。また，ビット状の土坑は32基検出されている。埋土別では，オリーブ褐色土を主体とする土坑14基，暗茶褐色土を主体とする土坑4基，黒色土を主体とする土坑14基に分類される。



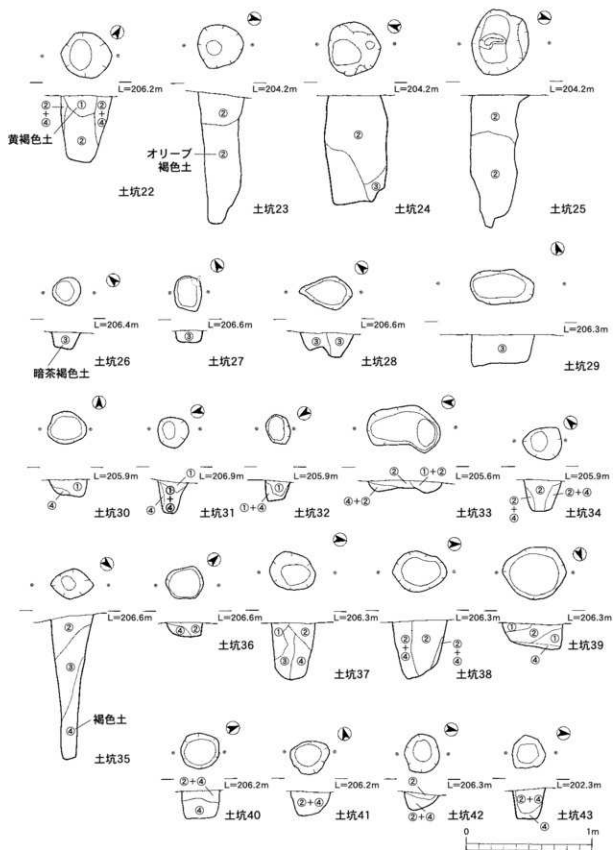
第34図 溝状遺構・古道跡



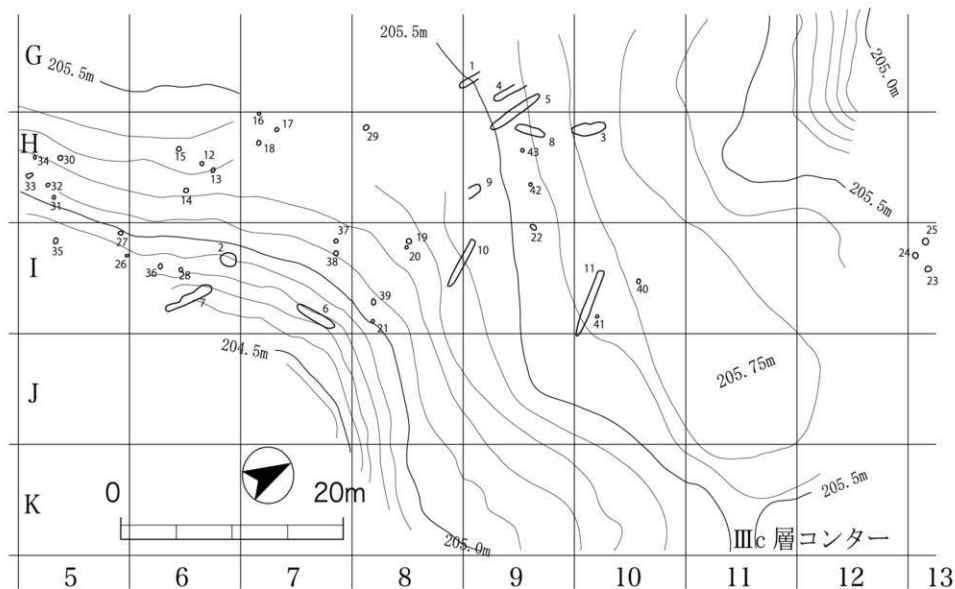
第35图 土坑 1



第36図 土坑 2



第37図 土坑 3



第38図 土坑配置図

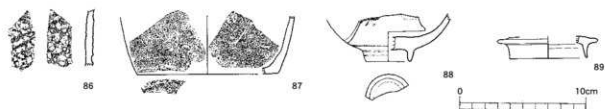
(2) 遺物

須恵器 (第39図 86・87)

86は甕形土器の胴部である。器面には格子目タタキがある。色調は暗灰茶褐色である。胎土は細かい粘土質である。焼成は良い。87は壺の底部である。器面には轆轤痕があり、外面には灰釉がみられる。色調は外面が緑茶褐色、内面が灰色である。焼成は良い。

陶磁器 (第39図 88・89)

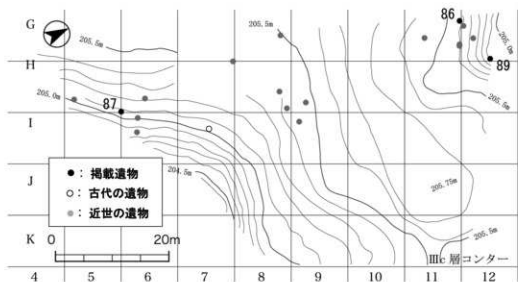
88は染付の碗である。見込みには円形に挿軸され、重ね焼きの跡がみられる。文様は草花文がみられる。胎土は白石である。89は薩摩焼の土瓶の蓋である。色調は茶褐色で、上面に自然釉がかっている。胎土は細かい粘土である。焼成は良い。



第39図 古代～近世 遺物

第12表 古代・近世 遺物観察表

押収 番号	番号	副位	出土区	部位	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土				焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	粗	遺物番号	備考
							石英	長石	角閃石	その他						
30	86	IIIa	H-12	胴	暗灰茶褐色	暗灰茶褐色				粘土質	良		格子目タタキ	1254	須恵器	
	87	IIIa	J-5	底～胴	灰色	緑茶褐色					良	轆轤	轆轤、灰釉	185	須恵器、底径11.2cm	
	88	II	H-11	底～胴	灰青白色	灰青白色				白石			草花文	300	近世	
	89	II	H-11	土瓶蓋	茶褐色	茶褐色				細粘土	良		自然釉	307	薩摩焼、底径6.2cm	



第40図 古代～近世 出土状況図

6 まとめ

縄文時代早期

遺構は、集石遺構を6基検出した。1号および3号はⅦ層で検出し、2号および4～6号はⅥ層で検出している。

遺物は、Ⅰ類土器のうち7が貝殻刺突文のある石坂式土器、8～11、13が沈線文のある平格式土器、12、14が燃糸文のある塞ノ神A式土器に比定される。Ⅱ類土器の15～22は貝殻刺突文と貝殻沈線文のある塞ノ神B式土器に比定される。Ⅲ類土器の23～25は貝殻条痕を鋸歯状に施した双交弧文がある苦浜式土器に比定される。Ⅳ類土器の26～32は貝殻条痕を全面に施した右京西式土器に比定される。

石器は33～57が石鏃で平基式と凹基式が見られる。また、58～63は石匙で58、59は下層に62は上層に出土している。形状と層の関係で時期の違いも考えられる。64～66は磨石、敲石の類である。

この時期の出土状況の特徴としては、Ⅶ層からⅠ類およびⅡ類土器を主体とした出土と、Ⅵ層からⅢ類およびⅣ類土器を主体とした出土がみられたことである。遺構に伴った遺物としては、3号集石遺構から塞ノ神B式土器、2号および4号集石遺構から右京西式土器が出土している。

よって、遺物の出土状況と遺構の検出状況をあわせて考察すれば、Ⅶ層は塞ノ神B式土器を中心にしたⅠ、Ⅱ類土器で、Ⅵ層は右京西式土器を中心にしたⅢ、Ⅳ類土器にあたり、形式の新旧関係も層位的に把握できているといえる。

なお、放射性炭素年代（AMS測定）の結果では、塞ノ神B式土器が中心となる層は7270±40yr B Pで、右京西式土器付着の炭化物は6570yr B Pであった。

縄文時代前期

遺構は、落とし穴が5基検出され、形態は1～3、5号は円形で、4号が方形の竪穴状である。

遺物は、67、68は貝殻条痕の器面調整を施す藁式土器に比定される。

縄文時代後・晩期

遺構は、長方形の浅い土坑が1基、円形が1基検出されている。性格は不明である。

遺物は、土器は69が後期の南福寺式土器である。70～96は黒川式土器である。石器は77～79は石鏃で80は石匙、81は有孔石製品、82は磨石及び敲石の類である。

弥生時代

遺構は、方形に近いが不定形の竪穴状の土坑が検出している。中には楕円形の攪乱部が2ヶ所以上みられる。竪穴住居址の想定で調査を進めたが確定に至らず。

遺物は、84は吉ヶ崎式土器の壺の口縁部である。85は同じく中期の吉ヶ崎式土器の甕形土器である。

古代、中・近世

遺構は、溝状遺構1条と古道跡3条が検出している。舌状台地に立地する遺跡の中央部に位置し、先端部へ向かう方向へ検出している。性格は区画溝の可能性が考えられる。他は長方形の浅い土坑や円形の土坑と多数のビット状の土坑が検出されている。性格は不明である。

遺物は、86、87は須恵器で、88は磁器で肥前系、89は陶器で薩摩焼と思われる。

野方前段遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

野方前段遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町（北緯31°30' 07"，東経130°55' 43"）に所在し、標高約200mの台地上に位置する。測定対象試料は、VII層出土炭化物（No. 1：IAAA-90986）、IVa層出土炭化物（No. 2（1327）：IAAA-90987）、VI層出土土器付着炭化物（No. 3（2232ほか）：IAAA-90988）、合計3点である。

2 測定の意義

炭化物の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを精製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age:yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。この値は、 $\delta^{14}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素の¹⁴C濃度（ $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹⁴C/¹²Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- (4) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma=68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma=95.4\%$ ）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4、1較正プログラム（Bronk Ramsey 1995、Bronk Ramsey 2001、Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6 測定結果

¹⁴C年代は、No. 1が7270±40yrBP、No. 2が1260±30yrBP、No. 3が6570±40yrBPである。No. 1が縄文時代早期、No. 2が古代、No. 3が縄文時代早期から前期頃の年代となった。

No. 1、No. 2の炭素含有率は70%前後と通常の値であったが、No. 3は50%に満たず、若干低い値となった。化学処理、測定上の問題は認められない。

第13表 放射性年代測定結果表

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-90986	No. 1	層位: VII層	炭化物	AAA	-28.53±0.50	7,270±40	40.44±0.21
IAAA-90987	No. 2	層位: IVa層	炭化物	AAA	-32.00±0.60	1,200±30	85.46±0.34
IAAA-90988	No. 3	層位: VI層	土器付着炭化物	AaA	-27.35±0.47	6,570±40	44.13±0.22

[#3084]

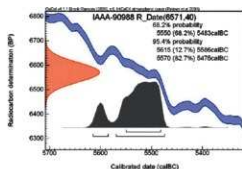
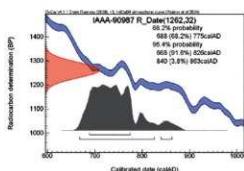
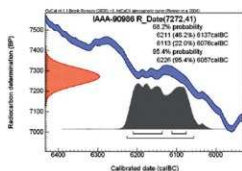
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-90986	7,330±40	40.15±0.20	7,272±41	6211BC-6137BC (46.2%) 6113BC-6076BC (22.0%)	6226BC-6057BC (95.4%)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-90987	1,380±30	84.24±0.32	1,262±32	688AD-775AD (68.2%)	668AD-826AD (91.6%) 840AD-863AD (3.8%)
IAAA-90988	6,610±40	43.92±0.22	6,571±40	5550BC-5483BC (68.2%)	5615BC-5686BC (12.7%) 5570BC-5475BC (82.7%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389
- Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



[参考] 暦年校正年代グラフ

写 真 图 版



①加治木堀遺跡・②宮ノ本遺跡・③椿山遺跡・④野方前段遺跡A地点 空撮
国土交通省空中写真 昭和49年（1974）



加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡

- ①宮ノ本遺跡 1 トレンチ土層断面
 ③加治木堀遺跡 落とし穴 1 完掘状況
 ④加治木堀遺跡 落とし穴 2 平面検出状況
 ⑤加治木堀遺跡 落とし穴 2 半掘

- ②加治木堀遺跡 土層断面
 ⑥加治木堀遺跡 落とし穴 3 半掘
 ⑦加治木堀遺跡 落とし穴 4 半掘